

高畑遺跡

— 第22次調査報告 —

2024

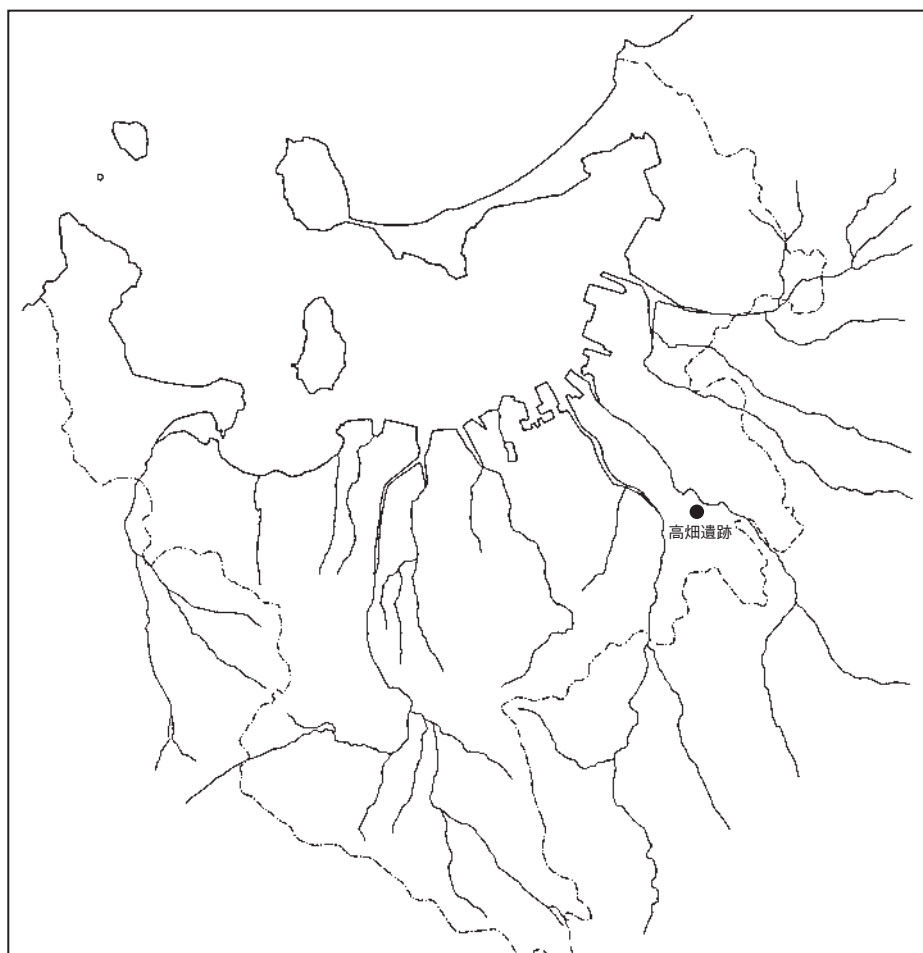
福岡市教育委員会

たか ばたけ

高畑遺跡

— 第 22 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1504 集



調査番号 2037
遺跡略号 TKB-22

2024

福岡市教育委員会



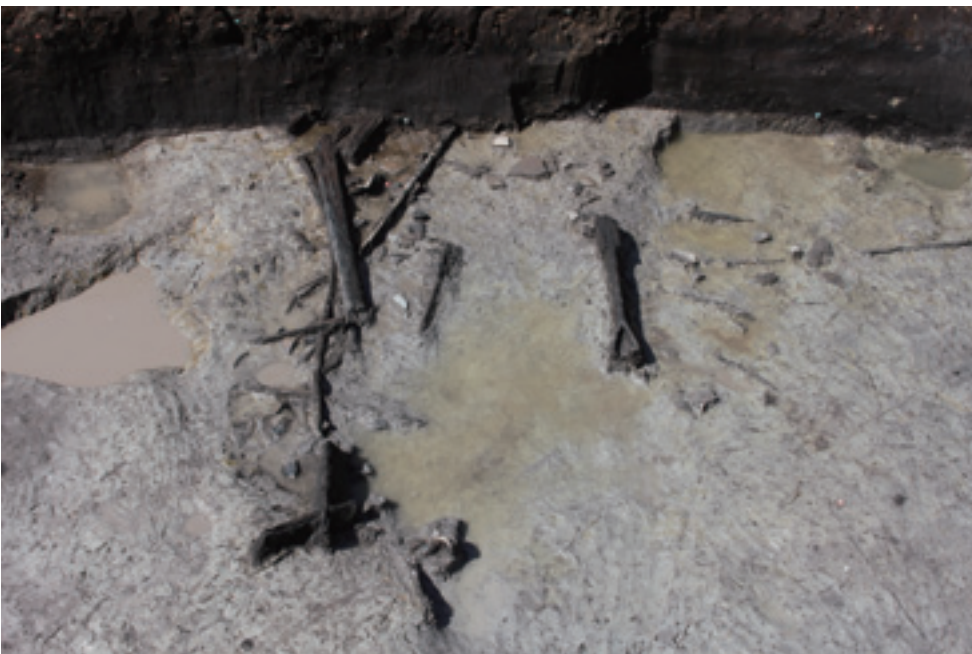
1 SX003 北から



2 下層最下面 北から



3 SX003 検出時 北から



4 SX008 南から



5 北壁土層 南から

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設工事に伴う高畑遺跡第22次調査について報告するものです。調査では弥生時代前期から古墳時代の遺物が出土し、特に古墳時代の土器群は当時使った状態で見つかりました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、事業主様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例 言

1. 本書は共同住宅建設にともない実施した高畑遺跡第22次調査の報告書である。
2. 本書に使用した方位は座標北で、座標は世界測地系による。
3. 検出遺構には検出順に3桁の連番号を与え、遺構略号SK（土抗）、SD（溝）、SP（ピット）、SX（その他）を頭に付した。
4. 掲載した遺物の番号は通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
5. 本書に掲載した遺物実測図は土器を主に井上加代子、石器623-625を山口譲治、木製品を鶴来航介、他を池田が作成し、挿図の製図は井上、大庭友子、野口聡子が行った。
遺構実測、写真撮影、執筆・編集は池田が行った。
6. SX003出土動物遺体については、新美倫子氏（名古屋大学博物館）にご教示を得た。
7. 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

遺跡名	高畑遺跡	調査回数	22次	調査略号	TKB-22
調査番号	2037	分布地図図幅名	板付24	遺跡登録番号	95
申請地面積	993.07㎡	調査対象面積	367.50㎡	調査面積	240㎡
調査期間	2021年1月5日～2021年3月24日			事前番号	2019-2-1347
調査地	福岡市博多区板付6丁目10-5				

本文目次

I	はじめに	
1	調査に至る経緯	1
2	発掘調査の組織	1
II	立地と周辺の調査	1
III	調査の記録	4
1	調査の概要	4
2	上層の調査	7
(1)	SD001	7
(2)	SX002	8
(3)	SX003	9
3	下層の調査	49
(1)	SK005	51
(2)	SK008	52
(3)	下層出土遺物	55
IV	おわりに	70

挿図目次

図1	遺跡位置図 (1/25000)	2	図17	SX003 4群出土遺物実測図 (1/3)	18
図2	調査地点位置図 (1/4000)	3	図18	SX003 5群出土遺物実測図 (1/3)	19
図3	調査地点位置図 (昭和初期1/4000)	3	図19	SX003 5群出土遺物実測図 (1/3)	20
図4	調査区位置図 (1/1000)	4	図20	SX003 6群出土遺物実測図 (1/3)	22
図5	調査区位置図 (1/400)	5	図21	SX003 6群出土遺物実測図 (1/3)	23
図6	調査区北壁土層図 (1/60)	6	図22	SX003 7群出土遺物実測図 (1/3)	23
図7	上層検出面、SX003配置図 (1/200)	7	図23	SX003 8群出土遺物実測図 (1/3)	25
図8	SD001、SX002実測図 (1/40)	8	図24	SX003 9群出土遺物実測図1 (1/3)	26
図9	SX002出土遺物実測図 (1/4)	8	図25	SX003 9群出土遺物実測図2 (1/3)	27
図10	SX003全体図 (1/80)	10	図26	SX003 10群出土遺物実測図1 (1/3)	29
図11	SX003検出面出土遺物実測図 (1/3)	11	図27	SX003 10群出土遺物実測図2 (1/3)	30
図12	SX003遺物出土状況1 (1/40)	12	図28	SX003 11群出土遺物実測図 (1/3)	31
図13	SX003遺物出土状況2 (1/40)	13	図29	SX003 12群出土遺物実測図 (1/3)	33
図14	SX003 1群出土遺物実測図 (1/3)	14	図30	SX003 13群出土遺物実測図1 (1/3)	34
図15	SX003 2群出土遺物実測図 (1/3)	15	図31	SX003 13群出土遺物実測図2 (1/3)	35
図16	SX003 3群出土遺物実測図 (1/3)	17	図32	SX003 14群出土遺物実測図 (1/3)	37

図33 SX003 15群出土遺物実測図 (1/3) …… 38	図47 SX008出土遺物実測図 (1/3) …… 54
図34 SX003 16群出土遺物実測図1 (1/3) …… 39	図48 9層SX004出土遺物実測図 (1/3) …… 56
図35 SX003 16群出土遺物実測図2 (1/3) …… 40	図49 9層出土遺物実測図1 (1/3) …… 57
図36 SX003 17群出土遺物実測図1 (1/4) …… 42	図50 9層出土遺物実測図2 (1/3) …… 58
図37 SX003 17群出土遺物実測図2 (1/3) …… 43	図51 9層出土遺物実測図3 (1/3) …… 59
図38 SX003 17群出土遺物実測図3 (1/3) …… 44	図52 10層出土遺物実測図1 (1/3) …… 61
図39 SX003出土遺物実測図 (1/3) …… 45	図53 10層出土遺物実測図2 (1/3) …… 62
図40 SX003出土須恵器実測図 (1/3) …… 47	図54 10層出土遺物実測図3 (1/3) …… 63
図41 SX003出土石製品実測図 (1/3、1/2、1/1) …… 48	図55 10層出土遺物実測図4 (1/3) …… 64
図42 SX003出土そのほかの遺物実測図 (1/3) …… 48	図56 9・10層出土土製品・石製品実測図 (1/2) …… 65
図43 下層遺構実測図 (1/200) …… 49	図57 9層出土石製品実測図 (1/2) …… 66
図44 SK005・SX008実測図 (1/40) …… 50	図58 10層出土石製品実測図 (1/2) …… 67
図45 SK005出土遺物実測図 (1/3) …… 51	図59 剥片石器実測図1 (3/4) …… 68
図46 SX008出土木製品実測図 (1/6) …… 53	図60 剥片石器実測図2 (1/1、3/4) …… 69

I はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、博多区板付6丁目10-5における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無の照会を令和2（2021）年3月31日付けで受理した（2019-2-1347）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である高畑遺跡の範囲であるため、令和2年4月14日に確認調査を実施し、地表下70cmでまとまった遺物が出土した。埋蔵文化財課は確認調査の結果を踏まえ、申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、建設工事による埋蔵文化財への影響が避けられないため、令和2年度に発掘調査、同4年度に整理・報告を行い、記録保存を図ることで合意し委託契約を締結した。調査終了後、整理・報告については令和4・5年度に行うことで合意し、変更契約を締結した。

発掘調査は令和3（2021）年1月5日から同3月24日に実施した（調査番号2037）。調査面積は240㎡で、遺物はコンテナケース70箱分が出土した。

申請地のうち、共同住宅建設部分以外については遺構面を保存している。

2 発掘調査の組織

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波正人

調査第1係長 本田浩二郎

庶務担当 文化財活用部文化財活用課

内藤愛

事前審査 文化財活用部埋蔵文化財課

森本幹彦 山本晃平（令和2年度）

板倉有大 大森真衣子（令和5年度）

調査担当 文化財活用部埋蔵文化財課

池田祐司

II 立地と周辺の調査

高畑遺跡は御笠川と諸岡川に挟まれた更新世段丘の台地とその裾部に広がる。二つの河川の間には島状に台地が連なり、鞍部を挟んで南には麦野A遺跡、北には板付遺跡が展開する。高畑遺跡が位置する台地は昭和初期の地形図では全体に12m、北側には14mの等高線がめぐるが、戦時中の開発により削平を受けている。中央には南北に縦断する古代官道による切通しがみられる。台地周辺は近年まで標高10.3mほどの水田が広がっていた。今回報告する22次調査地点は台地の東側裾部に位置する。

高畑遺跡ではこれまで23次（2023年12月現在）の調査が台地上と東側裾部を中心に実施されている。その概要については既刊の報告書（676、699、799集など）にまとめられている。ここでは22次調査に関連する遺構について簡単に触れておきたい。22次調査地点の隣地では北側で8次、西側で9次、南側で17次調査が実施され、台地の裾に沿う8～9世紀の溝を検出している。溝は120m北の10次調査地点で東に曲がり、南では2次がその埋土内の堆積と考えられている。この溝からは木簡や多量の墨書土器、瓦磚が出土し、寺院、郡衙、駅家などの存在が想定されている。台地の北



図1 遺跡位置図 (1/25000) 国土地理院2.5万分1地形図を加工して作成

東側では10次から7次地点にかけて台地裾に沿った4世紀後半から5世紀の溝を検出し、埋土からは多くの土器、木製品が出土している。土器では小型丸底壺が多く、高坏、ミニチュア土器が目立ち、周辺での祭祀行為が想定されている。一方、台地上は削平が大きいなか、西側の斜面での18、19、21次調査で弥生後期の溝、井戸、古墳時代中期の竪穴建物が確認され、東側では23次調査において弥生前期の溝、中期の竪穴建物、後期の溝、古墳前期の竪穴建物等が出土している。台地上では弥生時代前期から古墳時代中期までの集落が営まれたことを窺うことができる。

関連調査報告書

- 8、9次：板付周辺遺跡調査報告書（9）福岡市埋蔵文化財調査報告書 第98集 1983
- 7次：板付周辺遺跡調査報告書（8）福岡市埋蔵文化財調査報告書 第83集 1982
- 10次：板付周辺遺跡調査報告書（10）福岡市埋蔵文化財調査報告書 第115集 1985
- 17次：高畑遺跡17次 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第676集 2001
- 18次：高畑遺跡-18次調査- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第699集 2002
- 19次：高畑遺跡-19次調査報告-福岡市埋蔵文化財調査報告書 第799集 2004
- 21次：高畑遺跡-21次調査- 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1284集
- 23次：2024年度報告予定

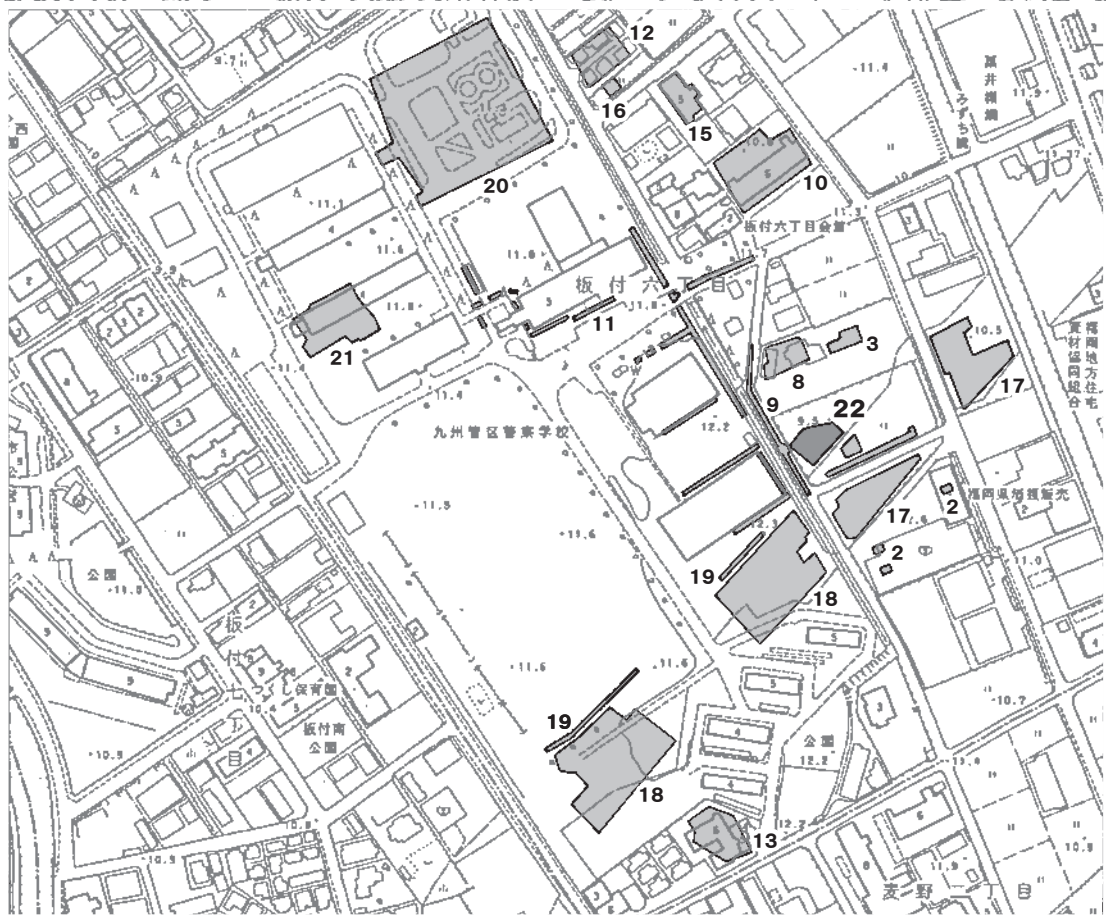


図2 調査地点位置図 (1/4000)

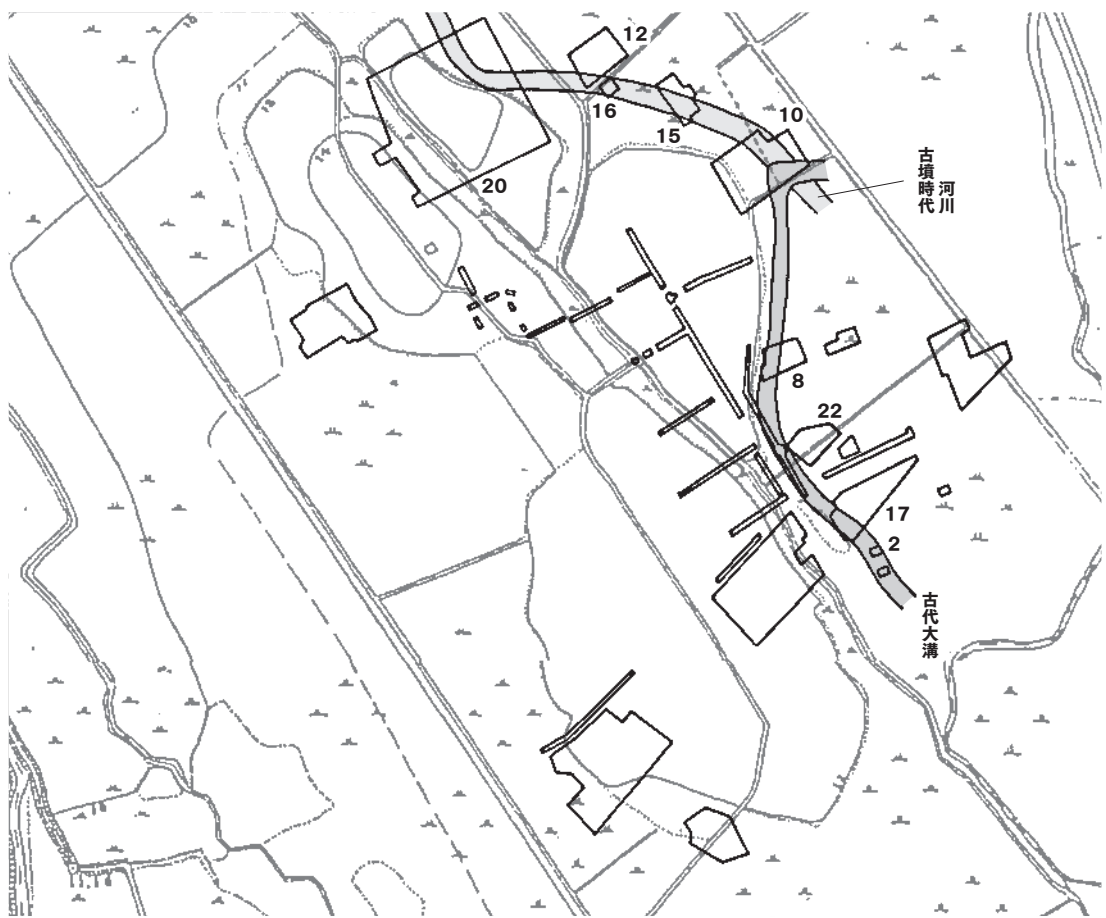


図3 調査地点位置図 (昭和初期1/4000)

Ⅲ 調査の記録

1. 調査の概要

対象地は台地の東側の裾部に位置する標高10.3mほど水田である。周囲は南側が板付2859号線および外環状線道路、西は板付1885号線、北は宅地でいずれも盛り土造成され、対象地は開発から残った水田であった。南側の道路とは1.2m、北側の宅地とは50cmの比高差がある。調査対象範囲は申請地のうち建物建設が計画されている南西側の範囲である。計画では敷地全域が隣接する周囲の高さまで盛り土がなされる。

調査区西側で実施した確認調査でまとまった遺物が出土しており、また8、17次で確認された古代の溝が西側の台地裾部を沿うことが想定されるため、調査区西側から重機による表土掘削を行った。地表下70cmで上層の灰褐色粘質シルト（6層）が剥がれるように取れ、灰色土に細かく割れた土器層が現れた。この6層を除去した面を上層の遺構面として、それ以下を調査対象とした。

上層では古墳時代前期後半から中期を中心とする土器片が広がり、特に幅2mほどの帯状に密集する状態がみられた。これらの土器群をSX003として掘削し調査期間の多くを費やした。他には北西隅で溝の肩SD001、また東西、南北方向に土管を設置した暗渠SX002を検出した。上層の調査

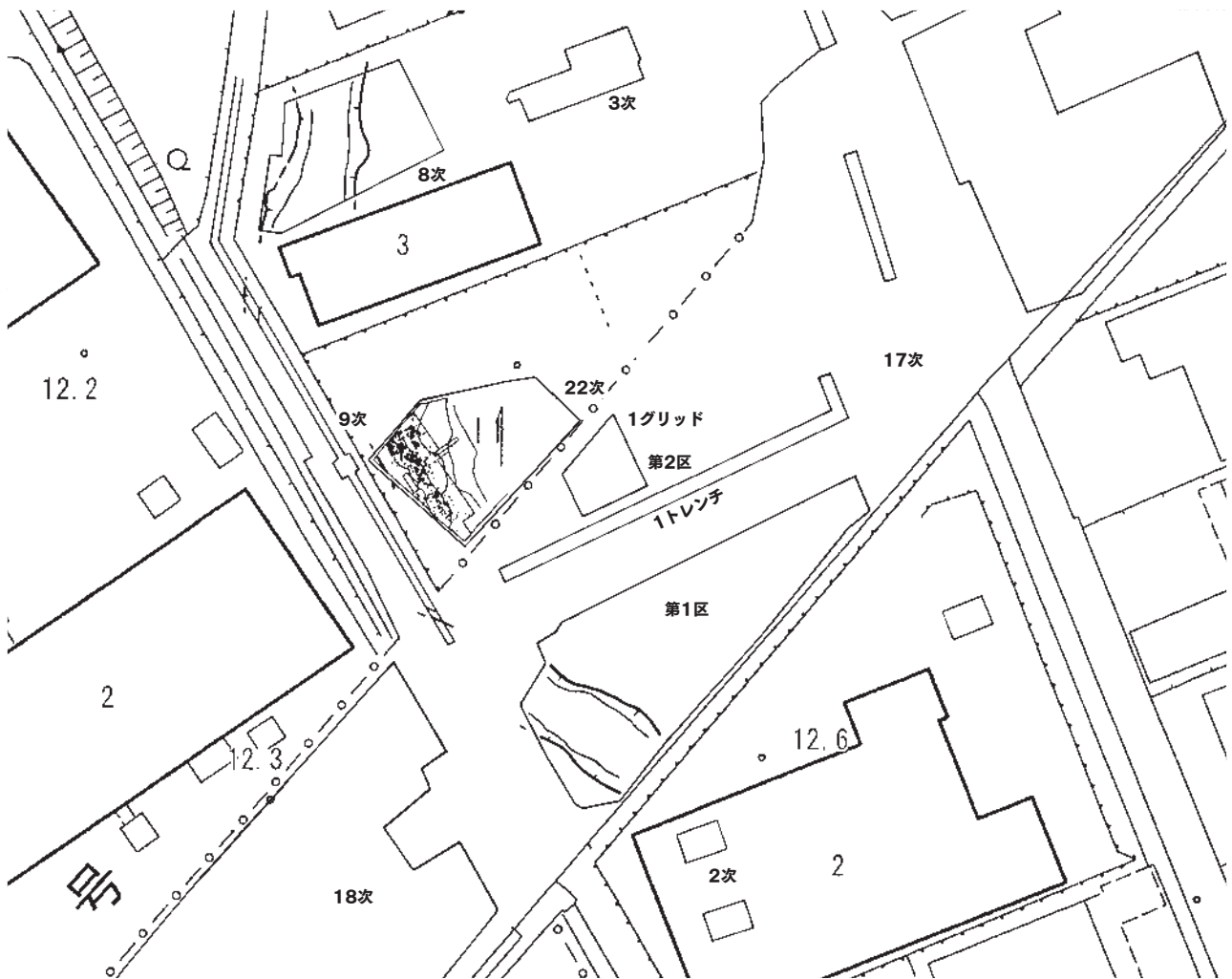


図4 調査区位置図 (1/1000)

終了後はSX003（7層）の下に堆積する遺物包含層を8層、9層、10層ごとに掘削を行い、9層で主に弥生時代中期から後期、10層で弥生前期までの遺物が出土した。10層を除去した面が八女ロームで、この面を最下面として、刻目突帯文が出土する土坑SK005、弥生後期の木製品が出土するSX008を確認した。調査区西端では八女ローム面の立ち上がりが見られ、台地の裾部に包含層が堆積する様を確認した。以下、7層までを上層、8層以下を下層の調査として報告する。

SX003および8層以下の遺物包含層は、西側の台地裾部に遺物が多く、東側に減じていく。手掘りによる掘削は調査期間との兼ね合いで、各項目で示す範囲に限って実施した。遺物が多い範囲は掘削できたと考えている。最下面については、手掘りを終了した後、未掘削部分を重機で八女ロームの面まで掘削して遺構の確認を行った。

以下、上層から調査の記録を示す。調査区はSX003が帯状に延びる方向を軸に2mグリッドを設定し、西からA、B、C、・・・、北から1、2、3と名称を付した。遺物の取り上げには、番号（R1、2・・・）を付した以外はB2、B3・・・とグリッドごとに行った。また、グリッドの南北は真北から35°西に振れるが、調査区内の記述では煩雑を避けるためグリッドの方向を使用する。

層位 遺物包含層は調査区西側の台地からの傾斜に沿って堆積する。包含層掘削時には先行して掘削した5グリッドの東西トレンチでの観察を元に分層した。以下の記述では5グリッドとほぼ同様の層位で、表土からの図を作成した北壁土層について示す。他に調査区西壁の土層図も作成している。

1、2層は現在の水田の耕作土と床土で、上面の標高は10.3mほどである。2層床土は全体にシルト質で粘質の違いで細かく分けることができる。3層は褐灰色のシルト質土、4層は3層よりやや暗く粘質で水平に堆積する。時期は不明であるが水田土壌と考えられる。5層、6層は4層よりも暗い褐灰色の粘質土で上部の5層はマンガン分を多く含む。6層がやや粘質が強いが境は不明瞭で

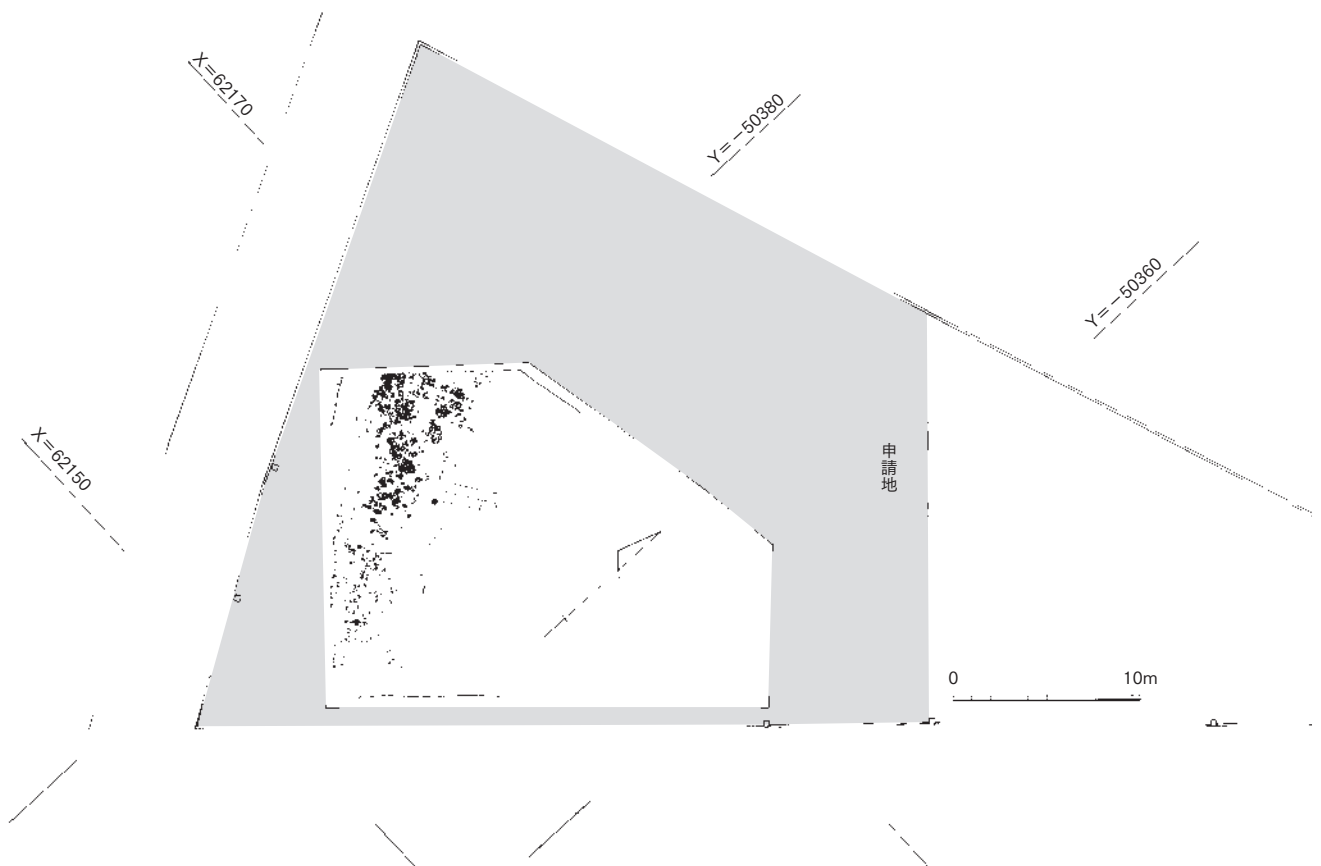


図5 調査区位置図（1/400）

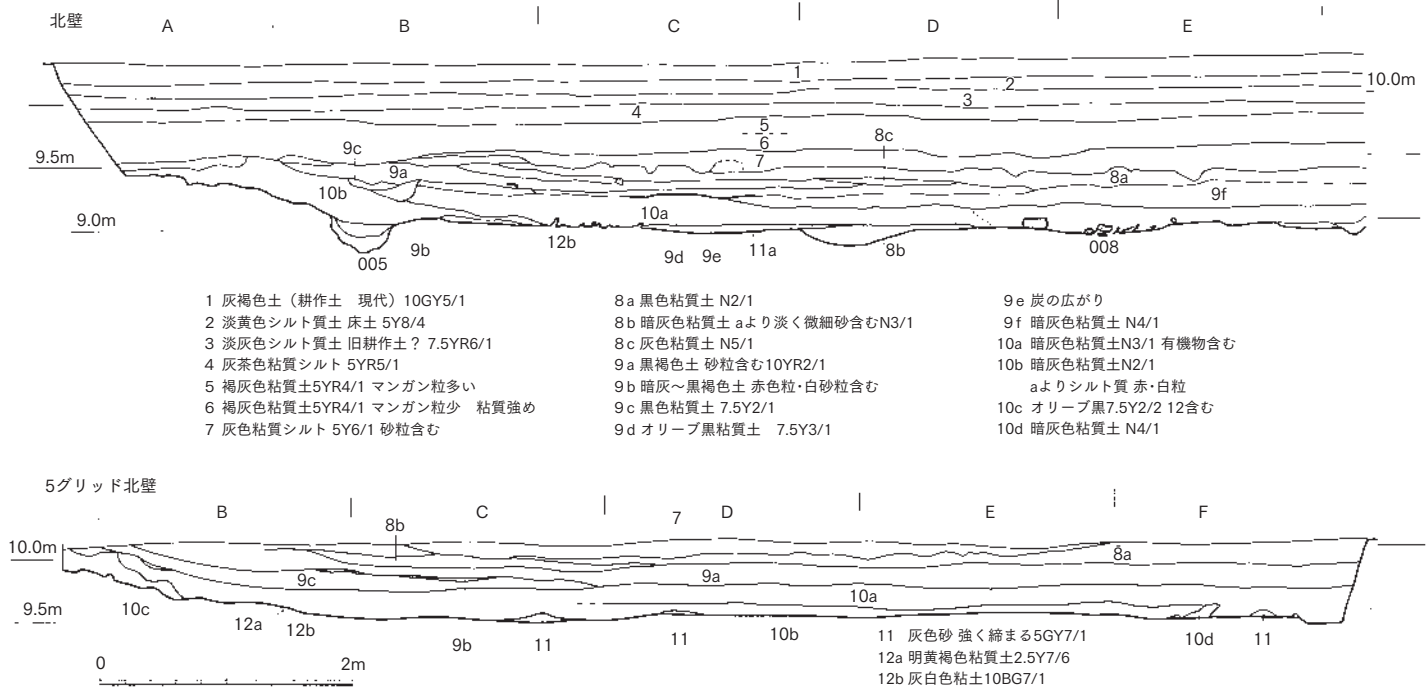


図6 調査区北壁土層図 (1/60)

一体でとらえ得る。7層は土器を密に含むSX003を含む堆積で、直上の6層までを重機で掘削した。

5、6層は標高、マンガン分を多く含む質、遺物包含層との位置関係から8次調査の5層(98集 Fig 5)、17次調査の12層(676集 Fig 6)に対応すると考えられる。8次では12-13世紀、17次では11世紀後半の水田層と推定されているが、今回は確認していない。

7層は灰色の粘質シルトで古墳時代中期の土器群SX003を中心とした遺物が多く出土した。上面はほぼ水平だが、下面は緩やかに東へ下がりB-Cグリッド間付近では傾斜がやや強い。6層と7層の間には不整合があり6層の堆積前に削平を受けたことも考えられる。またSX003検出面では瓦片、土師器碗片が数点出土しており、この時期の包含層等が存在した可能性がある。

8層は黒色粘質土で9層以下の暗い土色と比べても暗い。土層断面では観察し難いが7層との間に薄く炭化物が広がる部分がある。遺物はわずかである。つぶれた状態で出土した土器が数点あり7層SX003の遺物が沈んだものと判断したが、8層に伴う可能性もある。

9層は黒色～暗灰色の粘質土で全体に灰色かかる。上下層と比べて砂粒を含む。上部の9a層はやや茶色かかる。弥生中期から後期を主とする遺物を多く含む。9層中には炭化物や砂が広がる部分があり、分層できるものと考えられる。Bグリッド西半では上面で露出する。Bグリッドではやや強い傾斜で東へ下がり、遺物が落ち際に沿って多く出土し、この遺物の集中をSX004として取り上げた。

10層は暗灰色から黒色の粘質土で、9層と比べるとやや締まりがなく暗い。砂粒は少なく、全体に水気があり有機物がみられる。弥生前期の遺物が出土した。ただしDグリッドからEグリッドでは木製品と弥生後期の遺物がまとまって出土している(SX008)。10層と分離できると考えるが、北壁でもその区別ができなかった。Bグリッド中央から西は12層の八女粘土からなる台地裾部の斜面に堆積する。傾斜が緩くなったCグリッドから東では10層と八女ロームとの間には薄く締まった砂質層11層が入る。Dグリッド付近では南北に帯状にみられた。また所々でくぼみ状に厚くなる。砂はやや締まり遺物はほぼ見られないが、細石刃? 1点、石鏃1点が出土している。

12層の八女ロームはBグリッドの台地裾部は傾斜があるものの、Cグリッドから東は標高9mで

ほぼ水平である。この状況は17次調査第1区でも指摘されており、この面の平坦部が50m以上続くことになる。12層の表面はA・Bグリッドの斜面は明黄褐色で平坦面は明青灰色～白色を呈す。

2. 上層の調査

上層の遺構面は6層を除去し7層の土器群SX003が露出した面で標高9.6m前後である。図7左に遺構検出面での土色等の違いを示した。①は暗褐色から黒褐色の粘質土で9、10層の堆積。②は土器片が集中する7層で暗灰褐色。③はやや茶色をおびた暗灰褐色の粘質土で土器を②ほどではないが多く含み、部分的に集中する7層。④は暗灰褐色粘質土で③より暗く遺物は含むが細片でまとまりはない。7層、8層か。⑤は暗灰色から灰黒色粘土で締まりがあり遺物は細片がまばら。8層以下か。⑥黒褐色粘土で遺物は稀。以上はあくまで上面での様相である。人力で掘削した範囲は図7右の範囲でおよそ③から西側である。この面では他に溝状のSD001と現代の水田床土から掘り込む暗渠土管SX002がある。

(1) SD001 (図7、8)

調査区北西隅に南北方向に走る西への浅い落ち、延長2.3mを検出した。覆土は茶色をおびた灰褐色の砂質土で砂粒を多く含み、7層以下の包含層とは異質である。8次、17次調査で確認された8、9世紀の大溝の一部と考えられるが、傾斜は緩やかで確認できた深さは15cmほどである。10層を掘り込み、底は八女ロームである。敷地西側の道路部分では9次調査で溝の堆積が確認されており調査区の西側で落ちると考えられる。今回検出した部分は溝の肩というより、溝に向かって少し下がった部分であろう。遺物は弥生土器と土師器の破片が出土しているが時期をはっきり示すものはない。11cm×4.5cm大、85gほどの滑石が出土した。8次調査の日記には大溝が黒色粘土上の土器

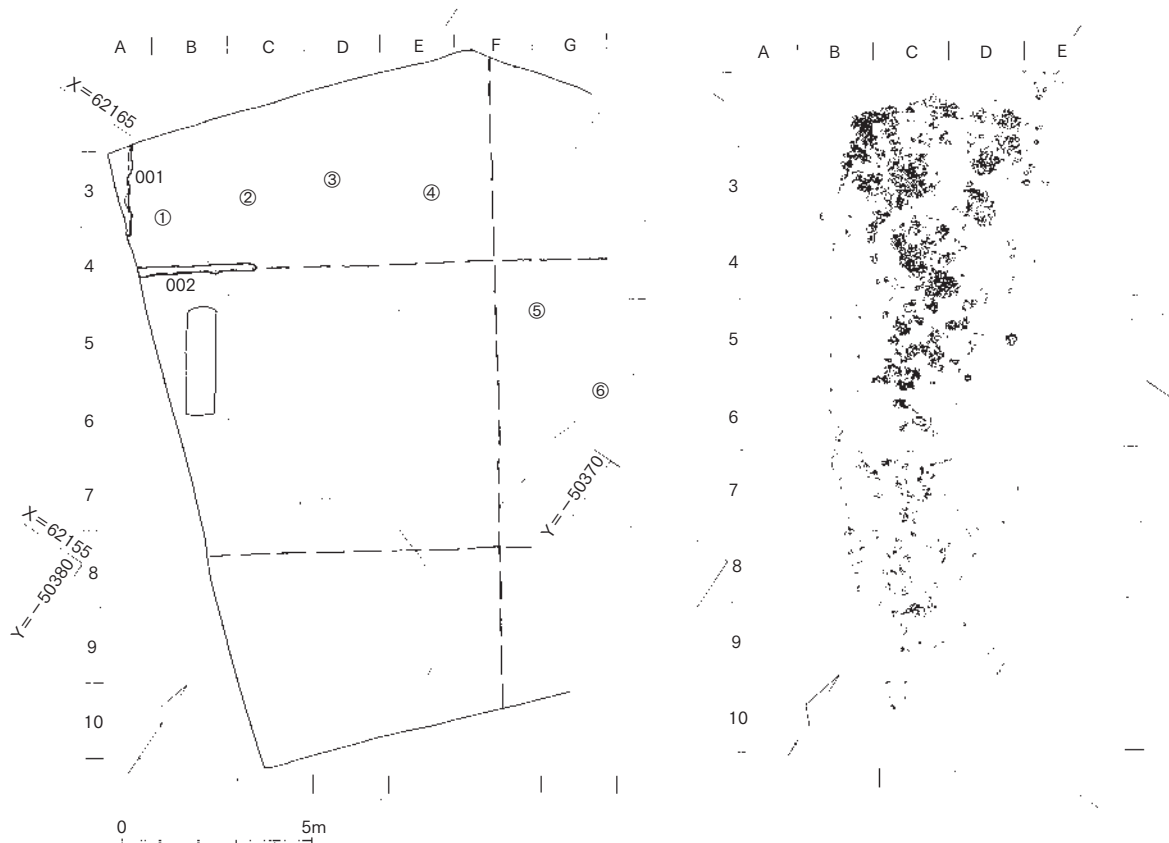


図7 上層検出面、SX003配置図 (1/200)

層を切る事が記されており、SX003を切る状況があった可能性がある。

(2) SX002 (図7・8・9)

現代の暗渠で2層床土からの掘り込みがみられ(図8)、幅27cm、深さ70cmの溝の底に土管を連結して暗渠としている。埋土は掘削した土をそのまま埋める。底は標高9.5mほどで10層を浅く掘り込む。表土掘削時に除去したが、東西、南北方向に敷かれていた(図7左 破線)。設置された方向はほぼグリッドと一致し、調査区内では東西方向に2列が4、8グリッドに7.5mほどの間隔で平行に走り、南北方向はFグリッドのみである。8グリッドの東西方向の土管列はF8グリッドの南北列と交わり、交点ではジョイント付きの土管を使用している(巻末写真3)。4グリッドの土管列はさらに東へ延びる。8次調査の日誌には東西方向に2列の記載があり、大正2?年の区画整理で埋設したという聞き取りが記録されている。年代については確認が必要である。

出土遺物 土管を2点図示した。671、672は陶製の土管である。671は長さ40cm、狭口部の径7cm、

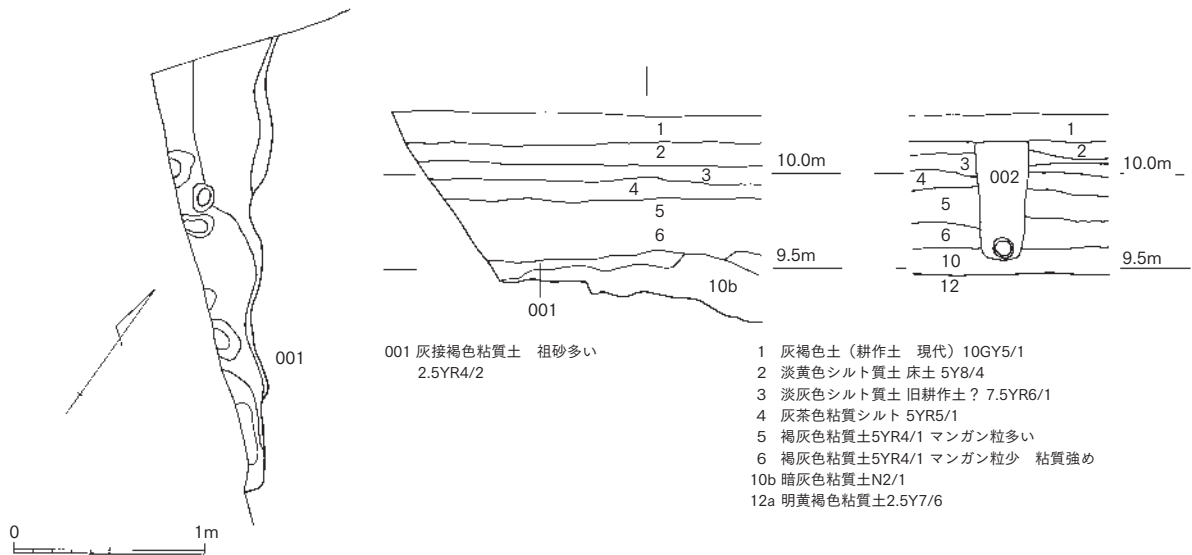


図8 SD001、SX002実測図(1/40)

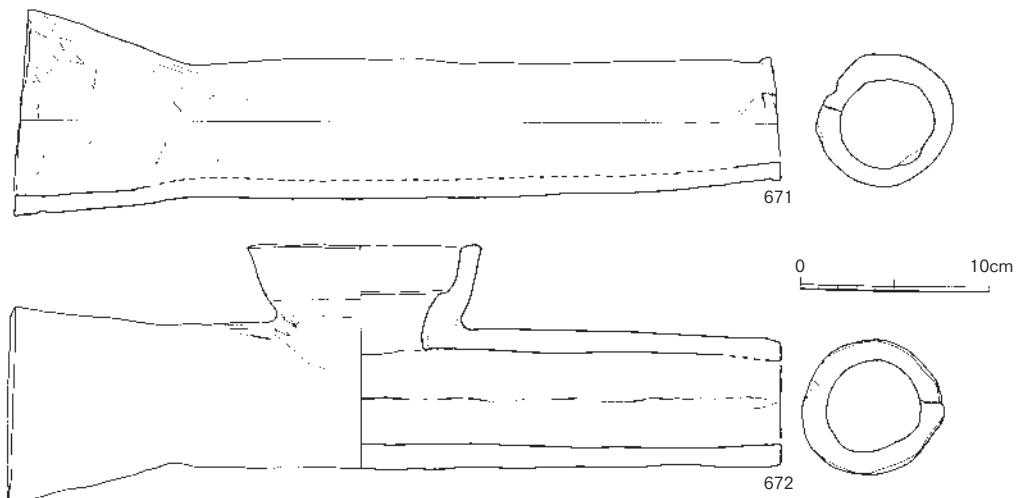


図9 SX002出土遺物実測図(1/4)

内径4.7cm、広口部は径11cm、内径8.5cm。器面は浅黄橙色。外面の1/3に布圧痕、他は縦方向のなで状の成形痕がみられる。672は中央部に径12.3cm、内径10cmのジョイント口を設ける。外面は径のうち3/4に布圧痕がみられ、1/4はなで調整である。土管の成形は、布上に広げた縦長の粘土板を径8.5cmの棒状に巻いて円筒を作り接合部をなで、棒状を抜くという工程が想定される。内面には接合線と棒状を抜いた時のものと考えられる擦痕がわずかにみられる。広口部は指で粘土を伸ばすことで径を広げており、円筒部の器壁が1.1cmの厚さがあるのに対し、広口部は0.8～0.6cmと薄い。外面には擦痕がみられる。

(3) SX003

上面に広がる土器群で7層の遺物である。6層を除去した面では土器の小片が密に幅2mほどの帯状に広がり、一部では土が見えないような状態であった。これらをグリッド毎に取り上げながら7層を掘り下げると、個体、まとまりが識別できる土器が多くあらわれた(図10)。設置されたものがつぶれた状態のものも多く、人為的な行為の跡が残ると考えられる。これらの遺物はほぼ8層の上面に接する位置にある。遺物設置面にはCD2-6グリッドの範囲では薄く炭化物層が広がり、炭化した木材片も見られた。出土遺物は古墳時代前期後半から中期を主体とする土師器で、壺、甕、高坏、小型丸形壺、ミニチュア土器などがあり、特に高坏、小型丸底壺が目立つ。須恵器は土師器に比べると少なく小破片で、土師器と同様の分布を示す。ただしD3、E3・4グリッドでは須恵器の大型壺が出土し、さらに東側では6世紀代の坏がやや集まって出土している。このほかに土製品、滑石製品、動物遺体も少数ではあるが出土している。また弥生土器、黒曜石などのまじり込みもある。出土状態については、接したり重なりがみられる箇所、平面的にまとまりがある箇所があるが、同時性については判断できない。また上部の小片は破面が摩滅したものが多く、下の土器群が割れただけでなく、攪拌、移動があったと考える。少数だが瓦、土師器碗等が出土しており、検出面出土として図11に示す。

遺物は上部の小片を取り上げた後、図10の状態になってからは個体やまとまりごとにR番号を付して取り上げ、接合作業を行った。一個体と認識した中に複数個体あるものや、単に破片が集まっていただけの箇所もある。形が復元できるものはできるだけ図化した。胴部のみや小片で図化していないものもある。また復元までの過程で取り上げ位置が分からなくなったものもあり、出土位置を示せないものもある。遺物は細かな破片に割れているものが多く、全体を復元できなかったものも多い。破片が足りないものもあった。

図12、13の出土状況に付した数字は遺物実測図で示す遺物の番号である。出土状況の記述にあたっては図12、13に示した1から17の平面的なまとまりごとに1群のように呼称して順に行う。ただし説明上の便宜的なもので、同時期性等は意図しない。図示した順は北西側のB2グリッドからBCグリッドを中心に順に南へ追い、DEグリッドにもどる。巻末にも出土状況の写真を示している。

検出面(図11) SX003上部の土器は小片で時期が不明確なものが多いが、ほとんどは古墳中期までの土師器と考えられる。その中に少量の後出する遺物がみられた。8・17次調査の大溝の遺物に近く、この時期の遺物の広がりがSX003の上にあったか、6層の遺物が混じったものと考えておきたい。673は須恵器の坏片。674、675は平瓦片で674は須恵質で布目と縄目叩きが明瞭に残る。675は土師質。676は土師質で器面は荒れるがわずかに叩きの痕跡がみられる。磚か。



图10 SX003全体图 (1/80)

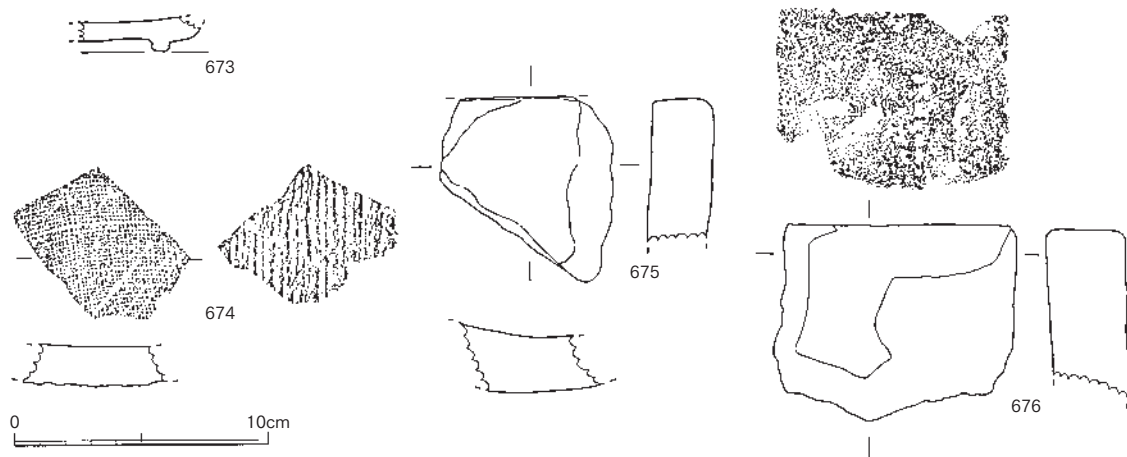


図11 SX003検出面出土遺物実測図 (1/3)

1群(図12・14) B2グリッドの壁際で、甕、壺がつぶれた状態で重なり、その上から鉢7、高坏8、9などが出土した。鉢7は正置、高坏は8、9と図化できていない脚部4点が北へ倒れた状態であった。11は口縁部を西に横倒して出土した二重口縁壺で頸部の接合が不確実で復元的に作図している。14は倒置での出土。11、14ともに最下部での出土で8層に接している。15は壺で10の下の最下部から口を西に横倒して出土した。1から6は北壁からの出土で出土状況図はなくPl.1に一部がみられる。図39に示した257～260も壁出土で、遺物はさらに北へ広がる。

2群(図12・15) C2グリッド北西端で1群に連なる。北壁沿いに18～24、26、27の高坏が集まる。18、19はほぼ完形に接合した。18は倒立した状態、19は北に倒れた上に甕等の破片が重なる。20は



Pl.1 1・2群 南から



图12 SX003遺物出土狀況1 (1/40)

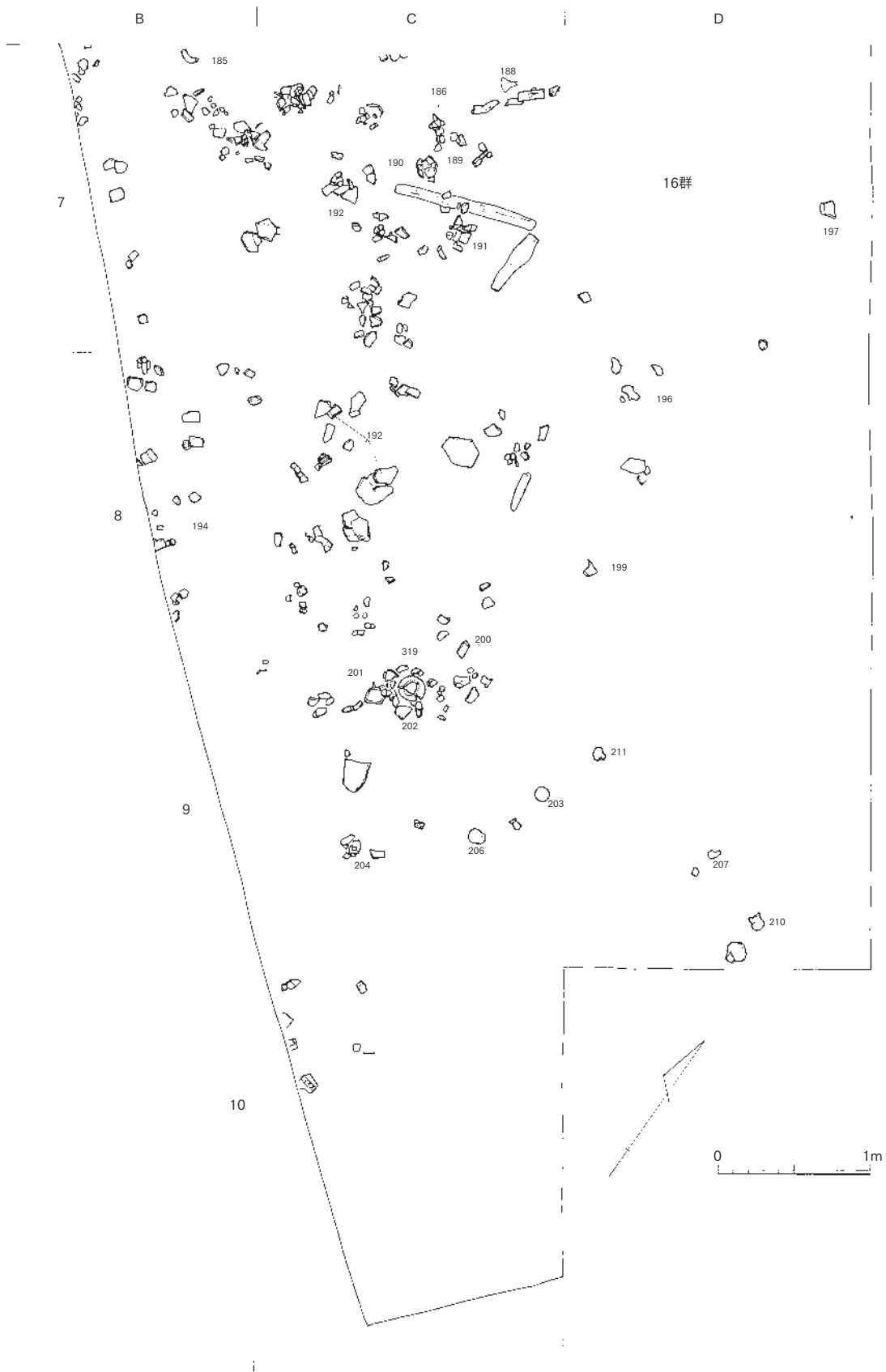


图13 SX003遺物出土状況 2 (1/40)

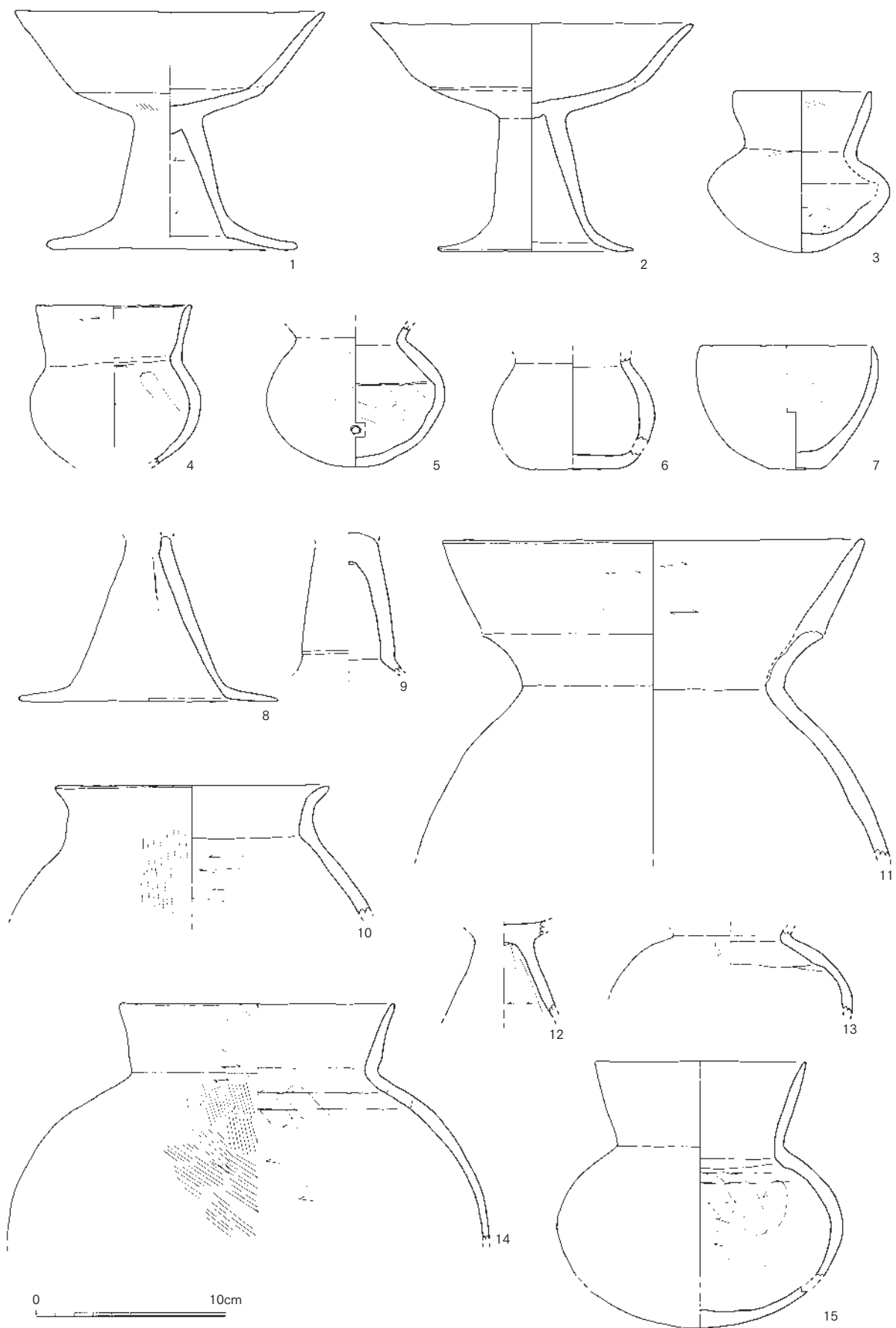


图14 SX003 1群出土遺物実測図 (1/3)

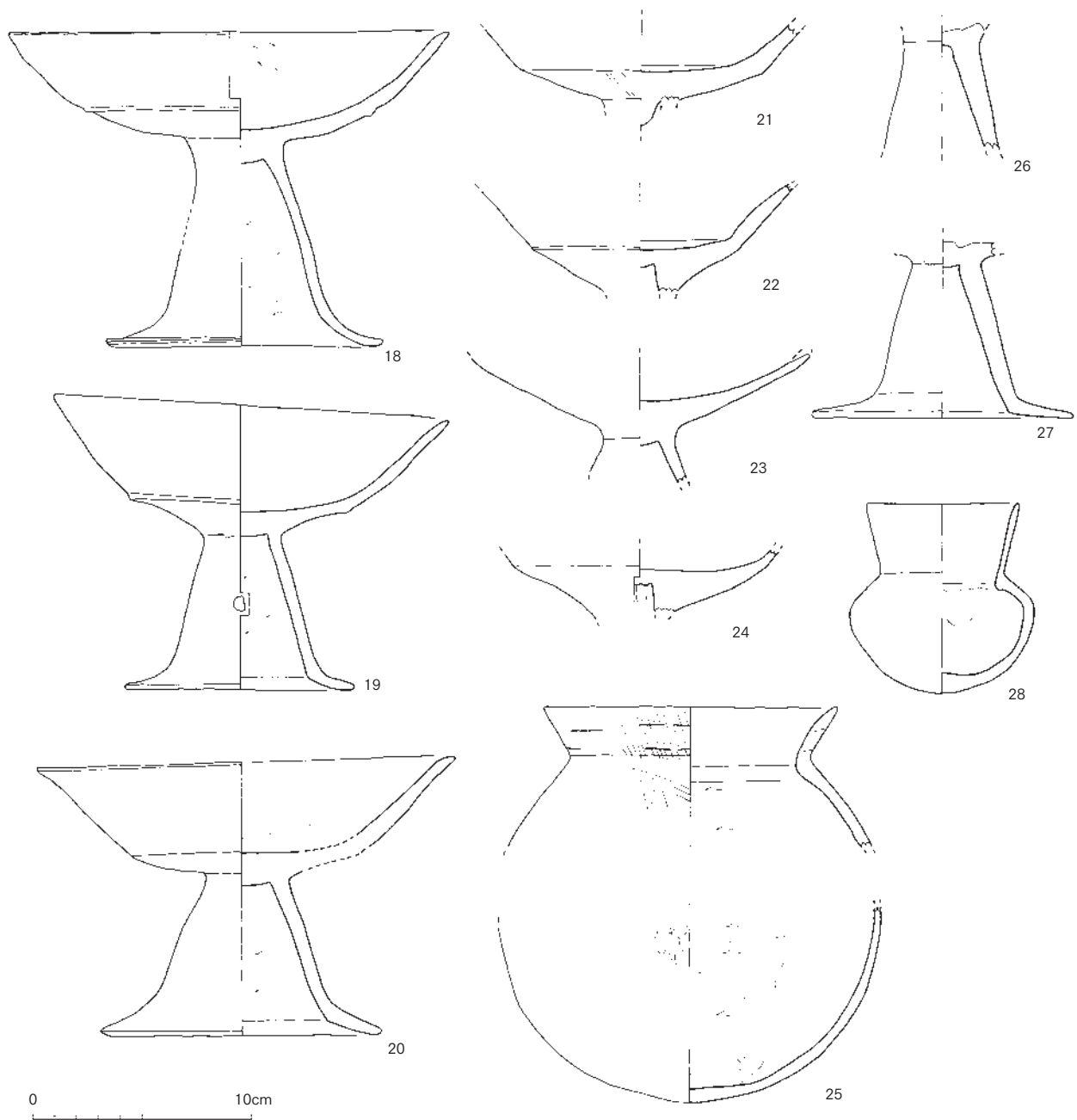


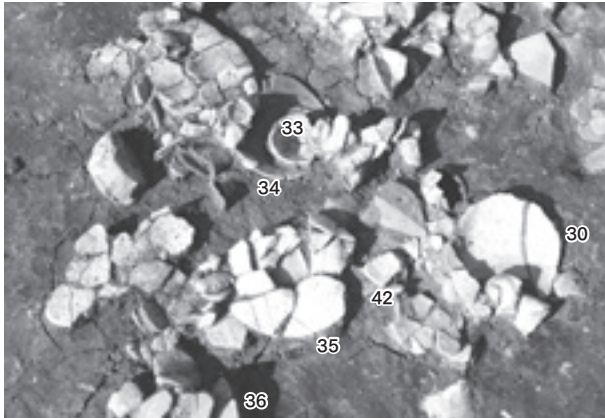
図15 SX003 2群出土遺物実測図 (1/3)

3/4の残存である。22、24は坏部が正置、他は破片が散っていた。小壺28は19、20、27の上の破片の上に乗って正置で出土。25は高坏群の南で正置した甕がつぶれた状態で出土した。この南に接して甕と思われる個体がつぶれて出土したが現時点で見失っている。口縁部が見えず倒立に近い状況か。

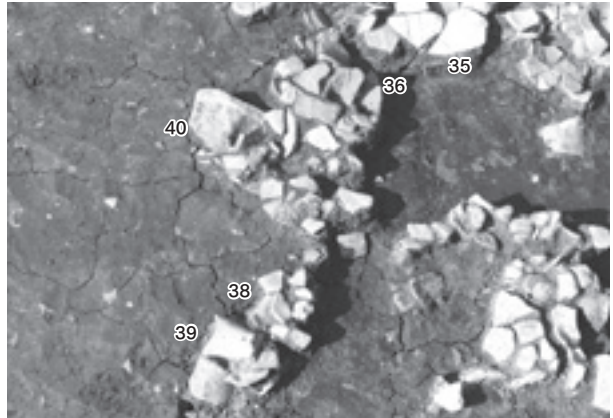
3群(図12・16) B3グリッド北側で、多くが高坏である。北東側では30が正置、34が倒置で並ぶ。その北西にも正置の坏部がみられる。これらの上に脚部31、底部32、小碗33が重なる。これらの南に接して坏部35が倒置で、37はその下出土の破片である。その下部から小碗42が出土した。36はその南でまとまってはいるが破片が割れて天地が動いた状態で出土した。40はその下から出土した弥生後期の器台で9層の遺物か。38から41は南側で散乱した状態で破片が出土した。43は上部で出土した小碗で位置は不明。

4群 (図12・17) C3グリッド北西隅 甕45が口を南に横倒して出土した。甕46はその下から8層に沈むように口を北に横倒して小破片に割れて出土。47は45の北に接した小壺の破片。48、49は破片群中の破片。48は正置方向で出土の脚部、49は高坏の坏部片。50はその南側で出土した弥生後期の器台片。

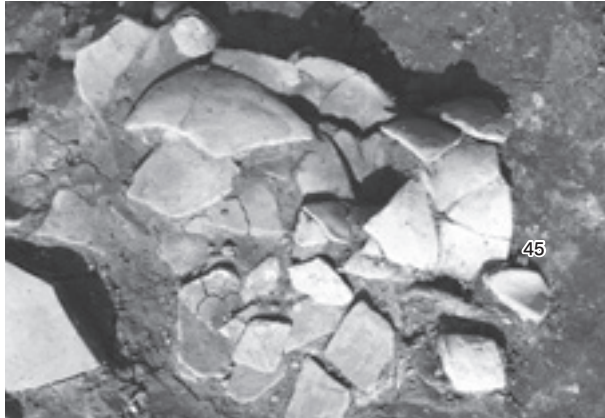
5群 (図12・18) B3南側とC3西端をまとめる。高坏が目立つが甕の破片で図化していないものもある。高坏52~55、58は北西部に散乱する破片。54、55は同一個体で倒置され小片に割れた状態でまとまる。65二重口縁壺口縁部片もこの破片群で出土。57は南に離れて出土した高坏片でその下から56、59が横に倒れて出土した。67は東北よりで口を南に横倒して出土の甕。66、61は67の西側の破片群の高坏坏部と甕の口縁部である。68はさらに南で口を北に横倒しの甕。67との間の破片に



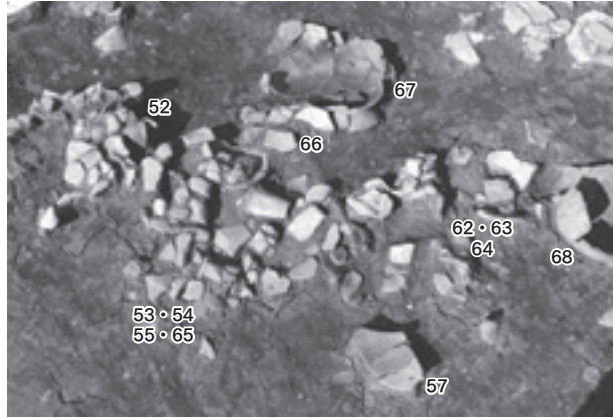
PI.2-1 3群 南から



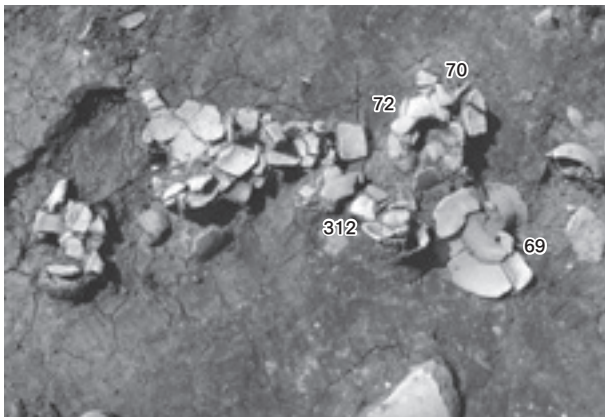
PI.2-2 3群 南から



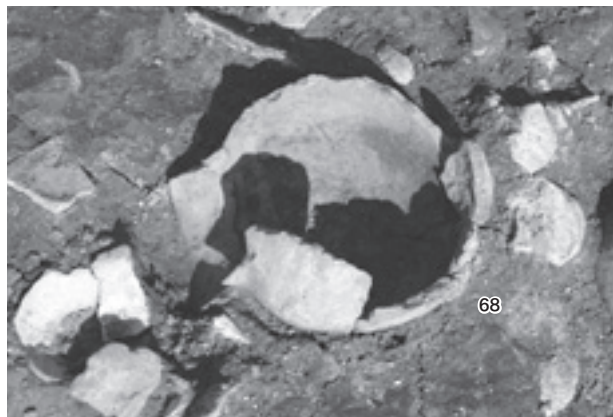
PI.2-3 4群45 西から



PI.2-4 5群 南から



PI.2-5 5群 南東から



PI.2-6 5群68 西から

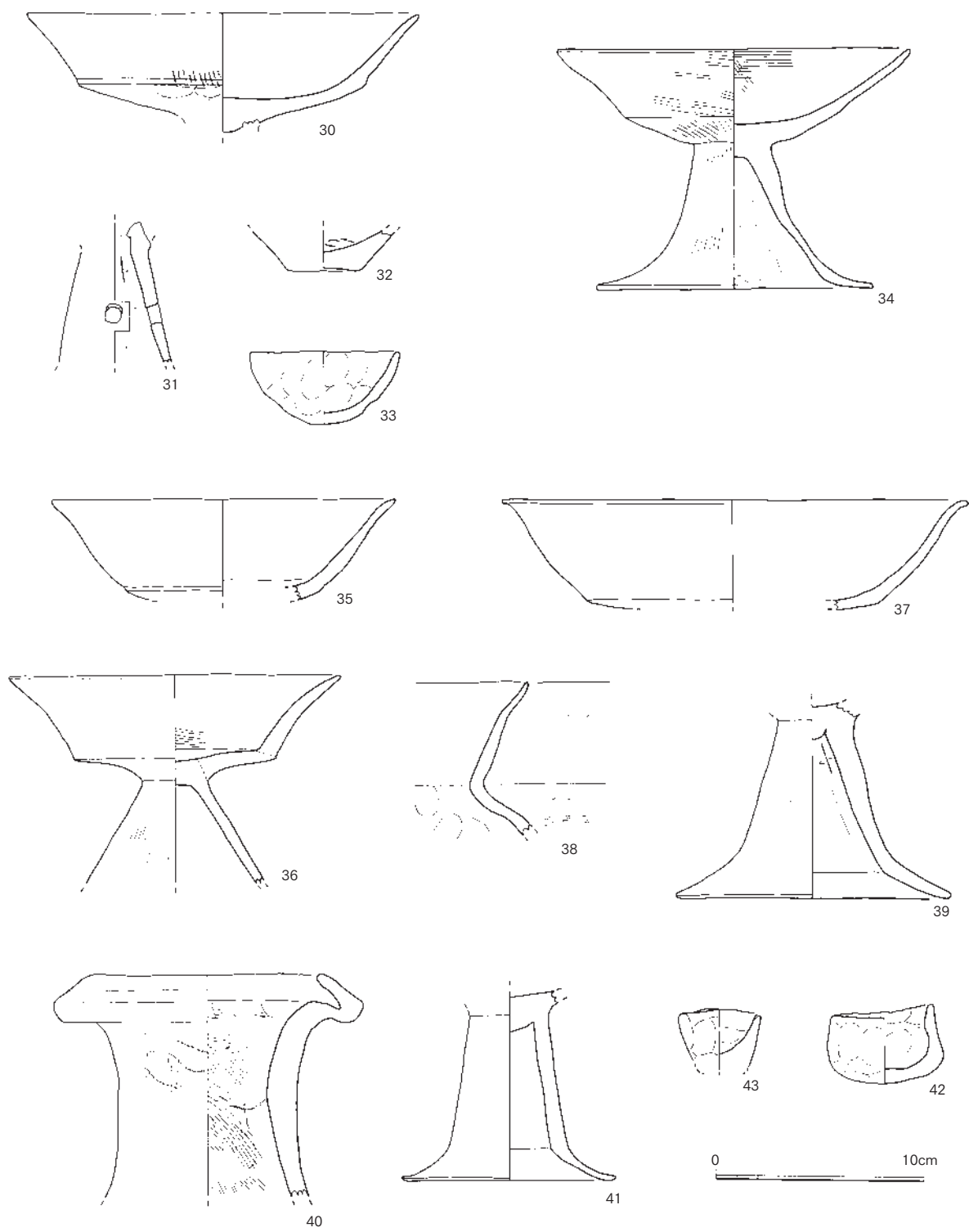


图16 SX003 3群出土遺物実測図 (1/3)

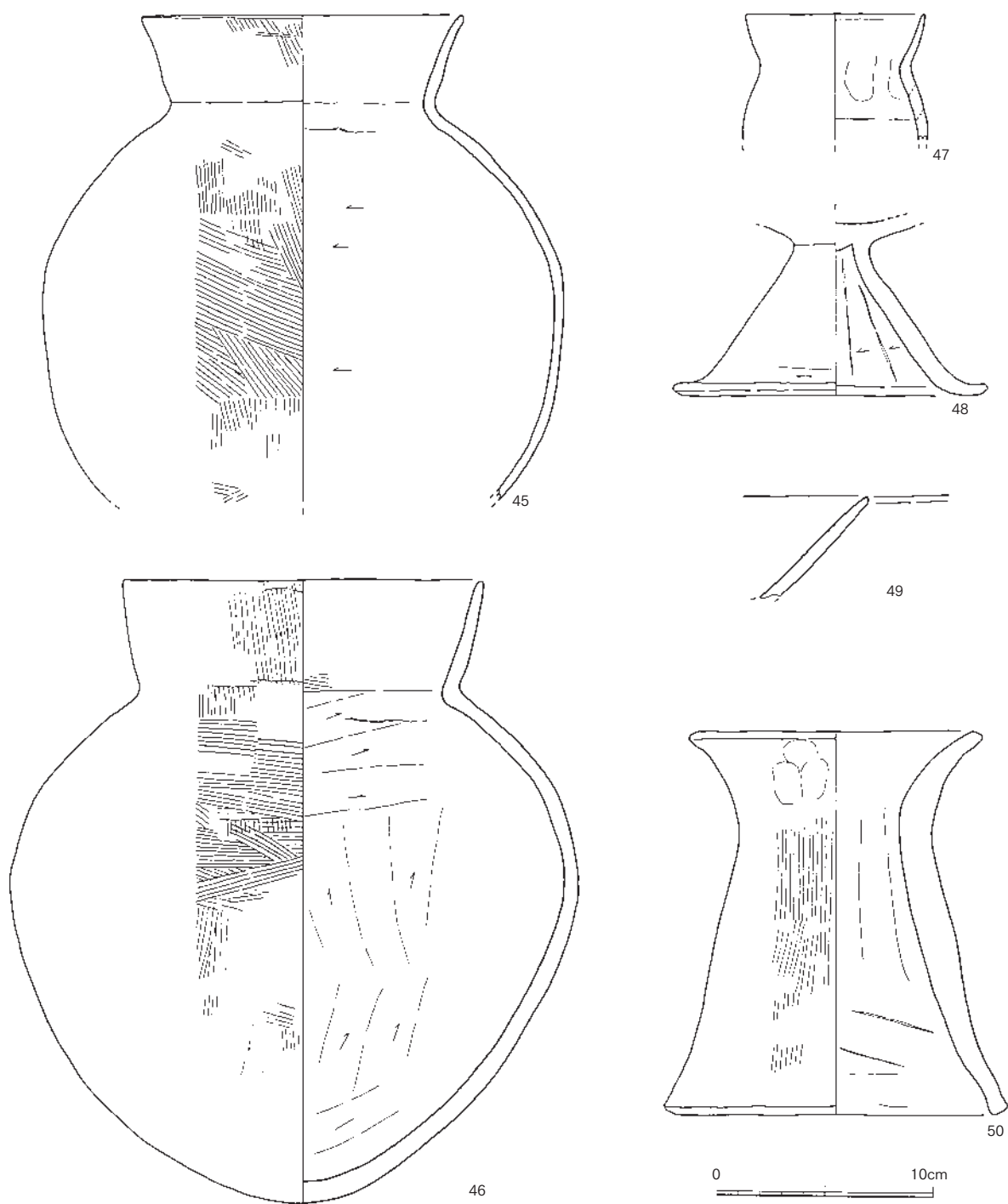


图17 SX003 4群出土遺物実測図 (1/3)

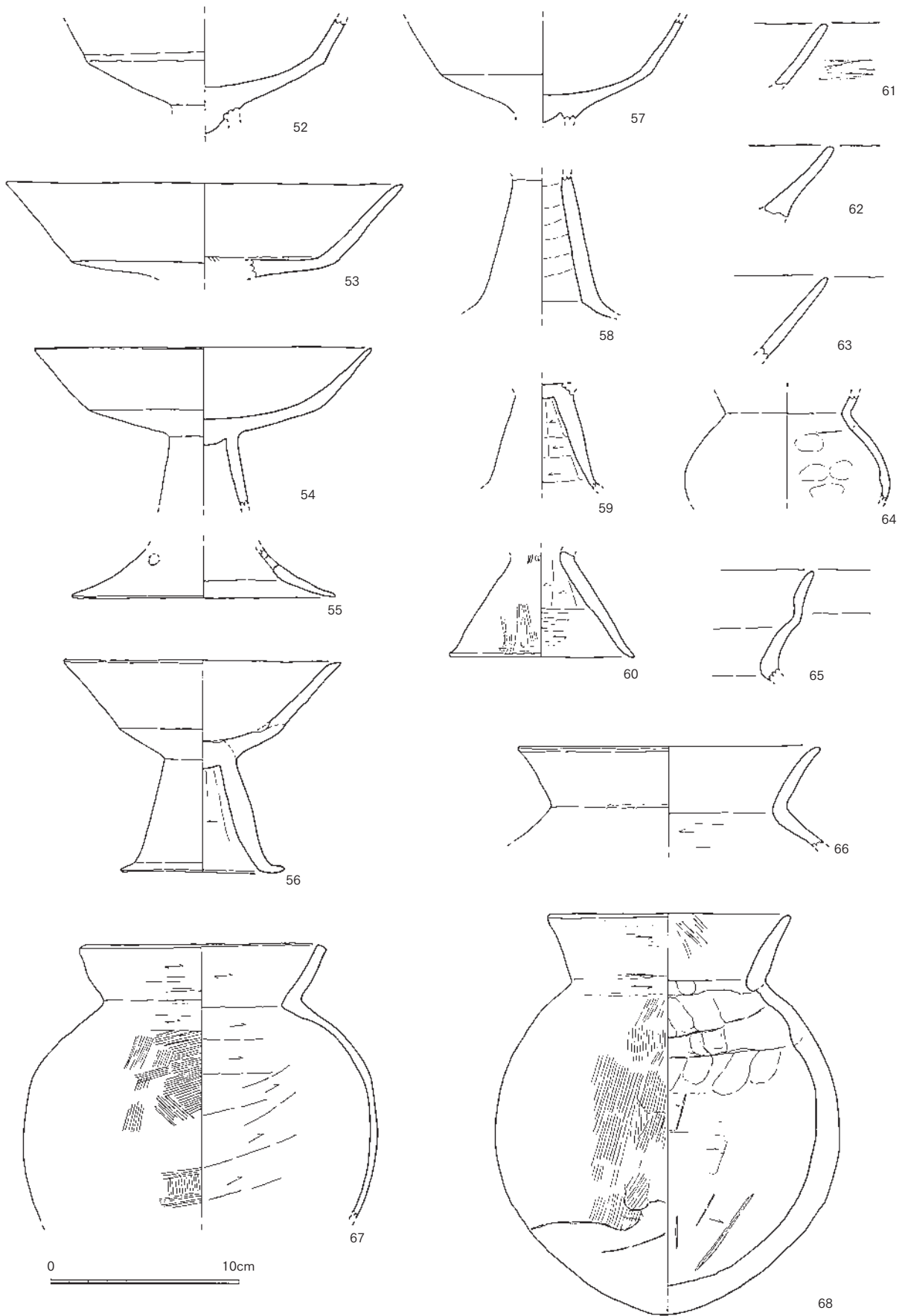


图18 SX003 5群出土遺物実測図 (1/3)

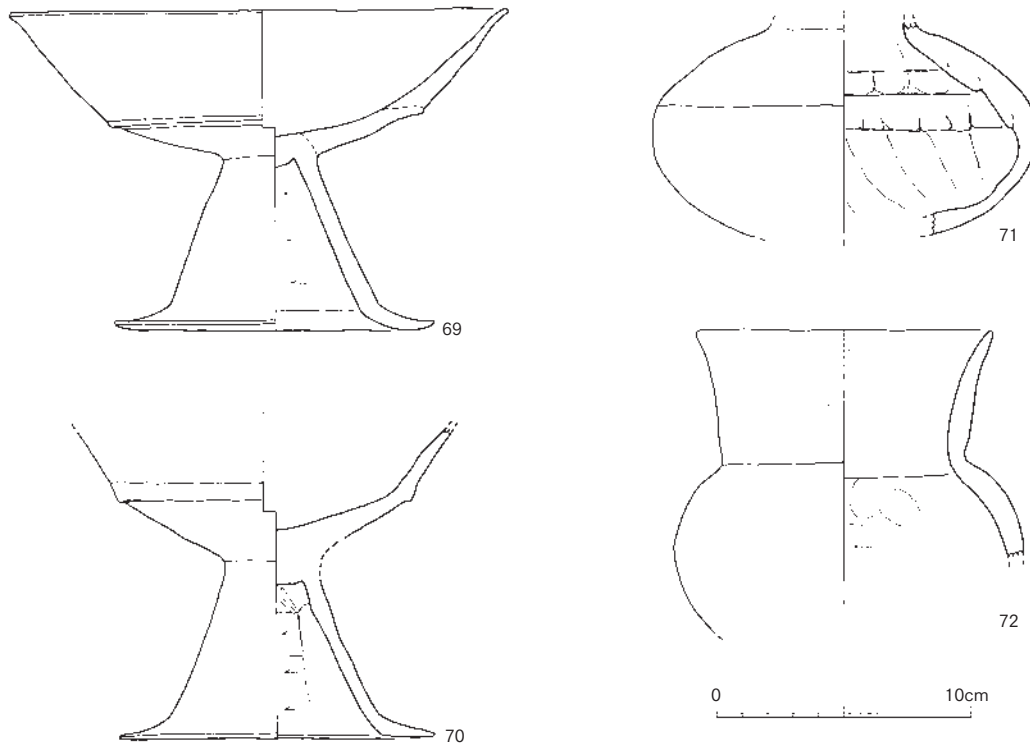


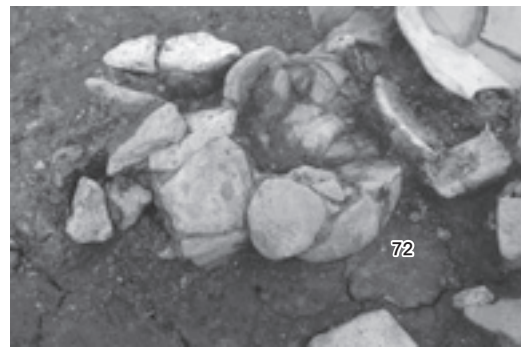
図19 SX003 5群出土遺物実測図 (1/3)

は62から64の高坏、小壺がある。69から72は68の南に集まる。高坏69は正置したものが南側に倒れる。72は口を北西に横倒しの壺で、その口周辺に高坏70が破片でのる。71は破片からの復元。

6群 (図12・20・21) C3の中心1mほどの範囲に86の灰白色で厚手の破片が散乱し、その周辺や範囲内に高坏などがみられた。73は甕で灰白色破片と一緒に取り上げて出土状態不明。高坏74は北東側で東へ倒れて出土し坏部に86の破片がのる。高坏75は74の東に散乱する赤色破片の一部。

76は北東側で25cm離れた坏部と脚が接合した。坏部は正置。高坏77は76坏部の南に接して北へ倒れた状態。坏部78は高坏76の脚部、甕83の下から出土した破片が接合。高坏79は南東側で倒置、80は東端で81は南側で横倒しで出土。小壺82は高坏74の北に接して破片で出土。甕83は東側中央で正置で出土し、底を欠くほかは割れていない。84は南東側で倒置。85は北東側で出土した二重口縁壺で口縁部は倒置で胴部の一部が散らばる。86が広く散乱する二重口縁の大壺で上部1/4が復元できたが接合できていない破片が多い。底部と思われる破片を87に示した。88から91は86の下からの出土。88は甕で完形品が北を口に横倒しで出土したが胴上部で接合できていない。胴部は推定した底部、調整から推定復元した。89は上部を欠き椀または壺か。高坏90は横倒し、壺91は破片が重なって出土した。

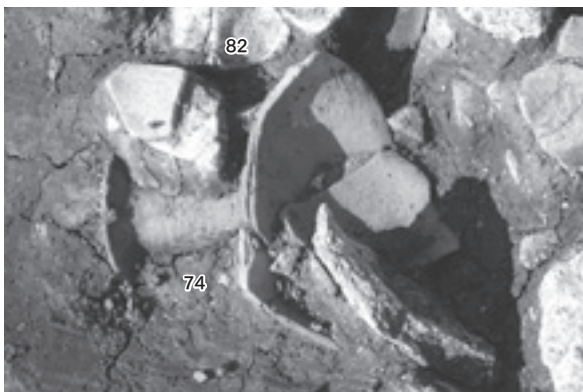
7群 (図22) 遺物は多くないが高坏が散乱する。脚部は横倒しで、坏部96は倒置、97は正置状態。小碗101、小壺103、甕104は破片を復元した。



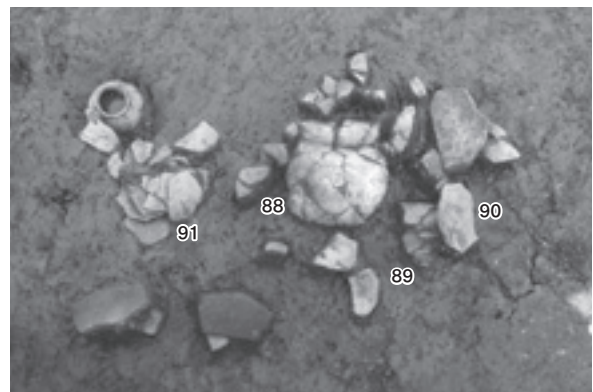
Pl.3 5群72 南西から



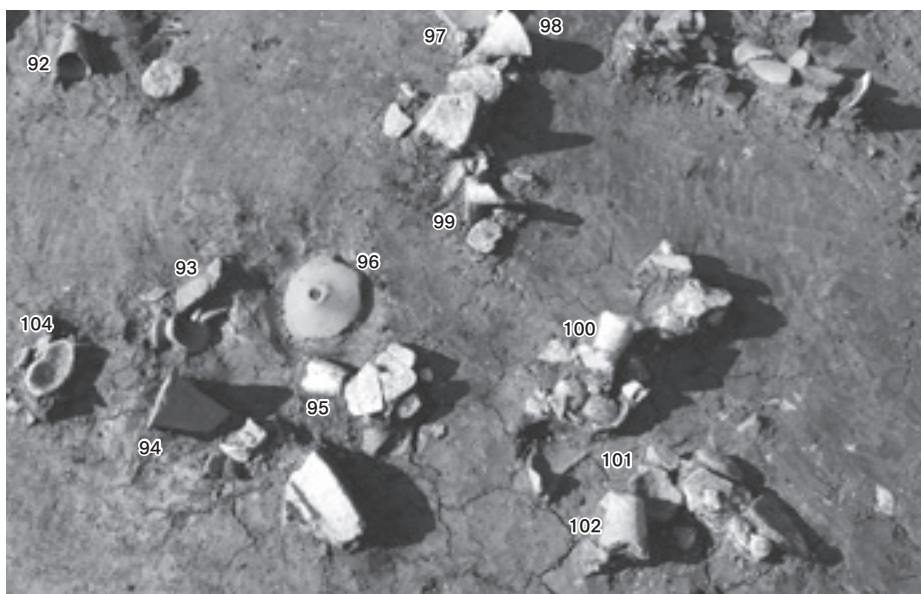
PI.4-1 6群 南から



PI.4-2 6群74 南西から



PI.2-3 6群下 南から



PI.4-4 7群 南から

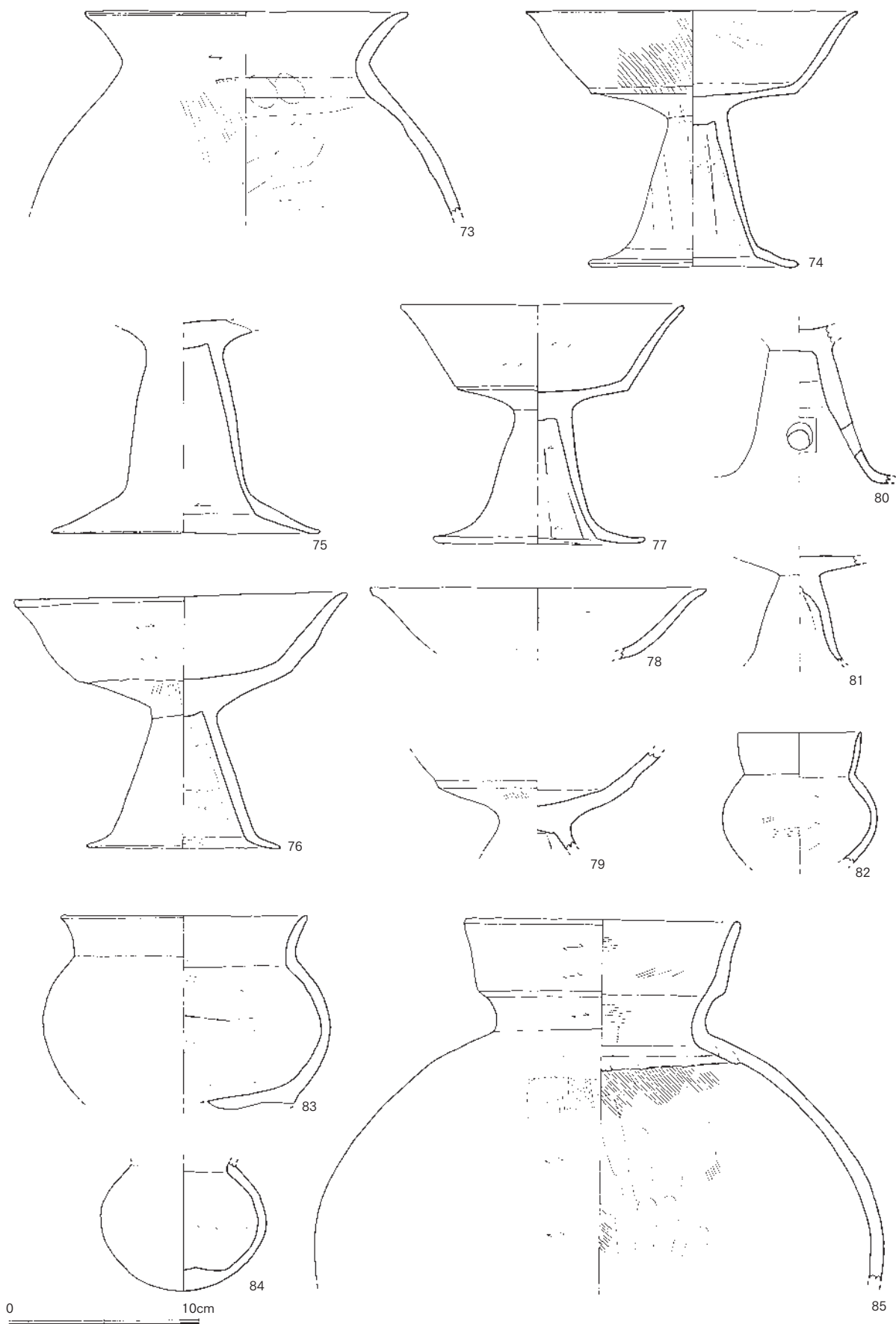


图20 SX003 6群出土遺物実測図 (1/3)

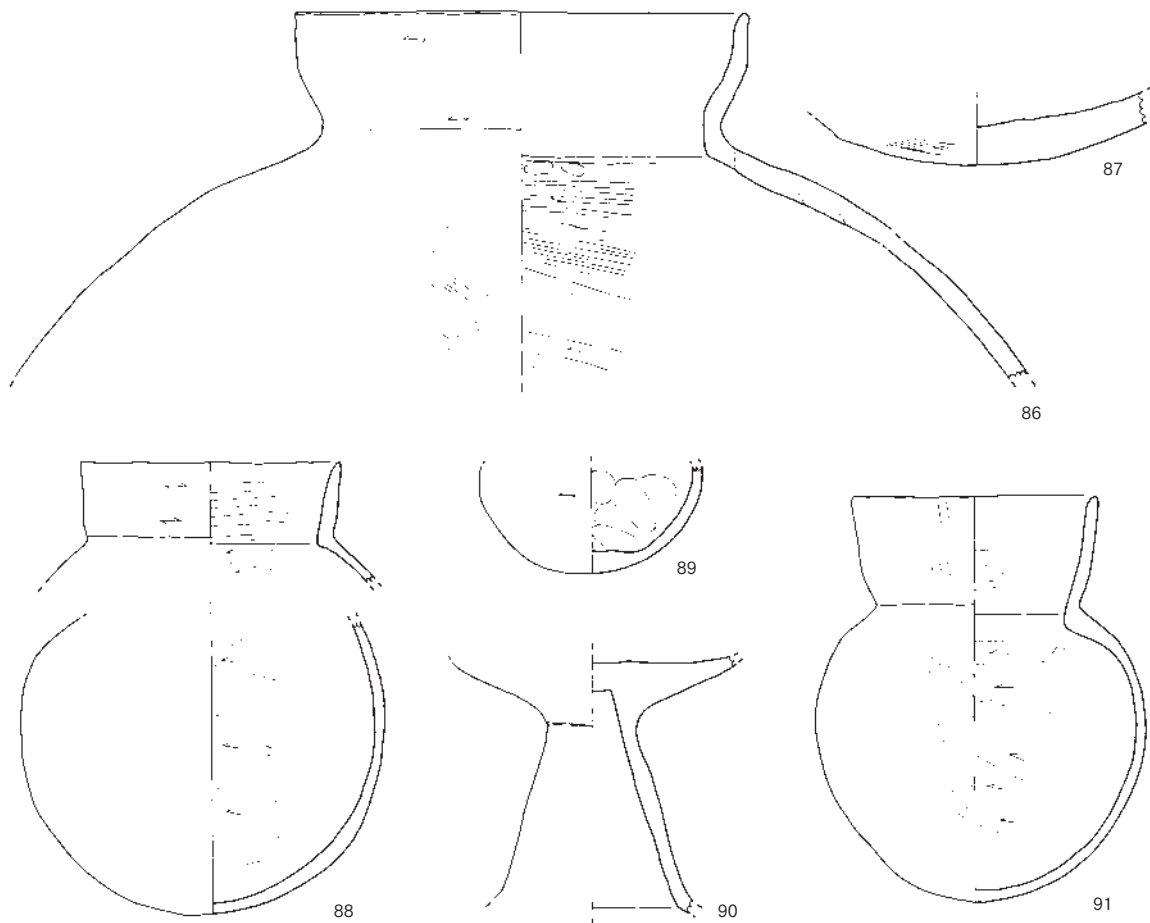


图21 SX003 6群出土遺物実測図 (1/3)

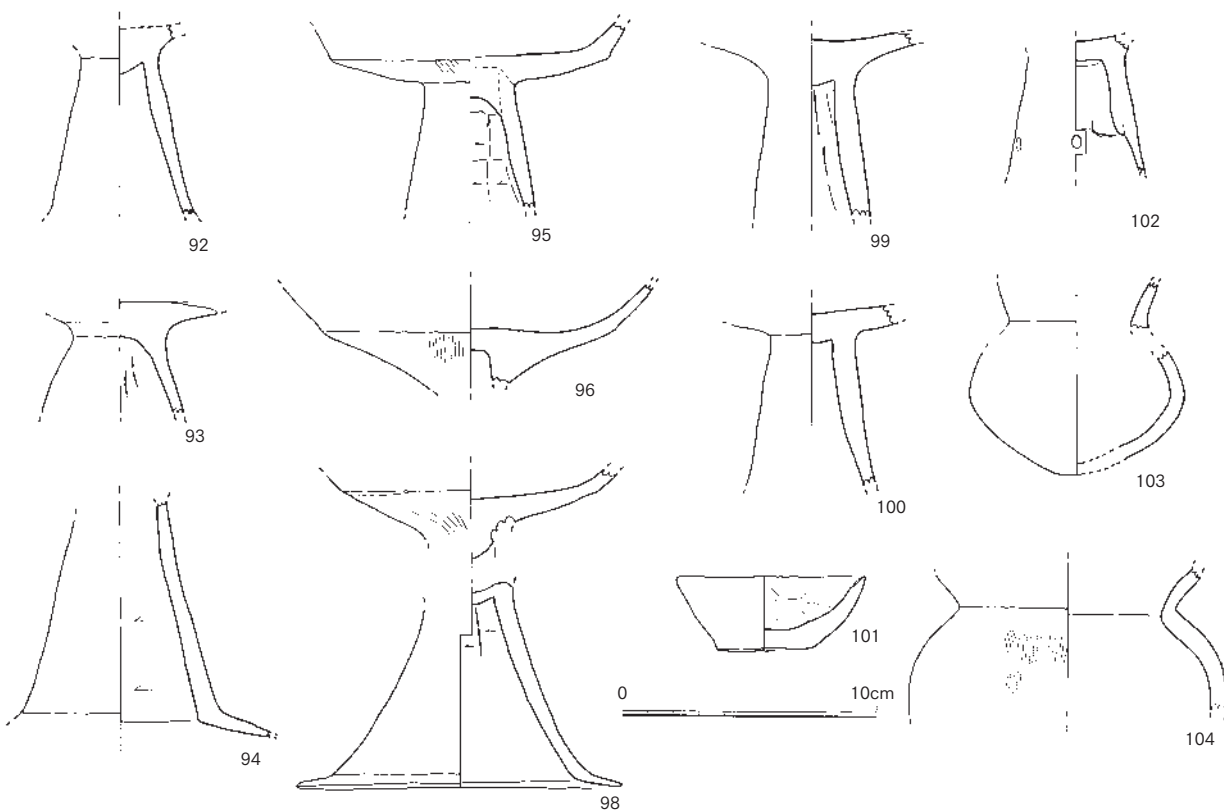
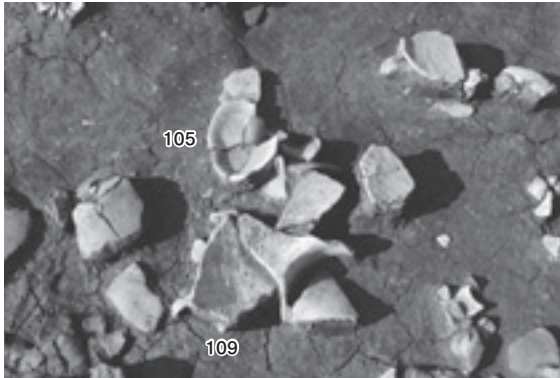


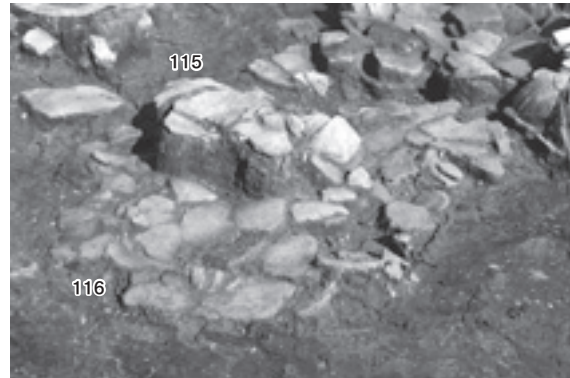
图22 SX003 7群出土遺物実測図 (1/3)

8群 (図12・23) C4北東側に散乱する。105は北端で西に倒れた高坏。甕106はその北側下部から個体がまとまって出土した。接合できていない胴部がある。109は105の南出土の大型の壺で破片は大きい。107、108はその南に散乱する破片群からの二重口縁壺と甕。110から112は横倒して散在する。113、114は甕で横倒して出土した。細かく割れる。

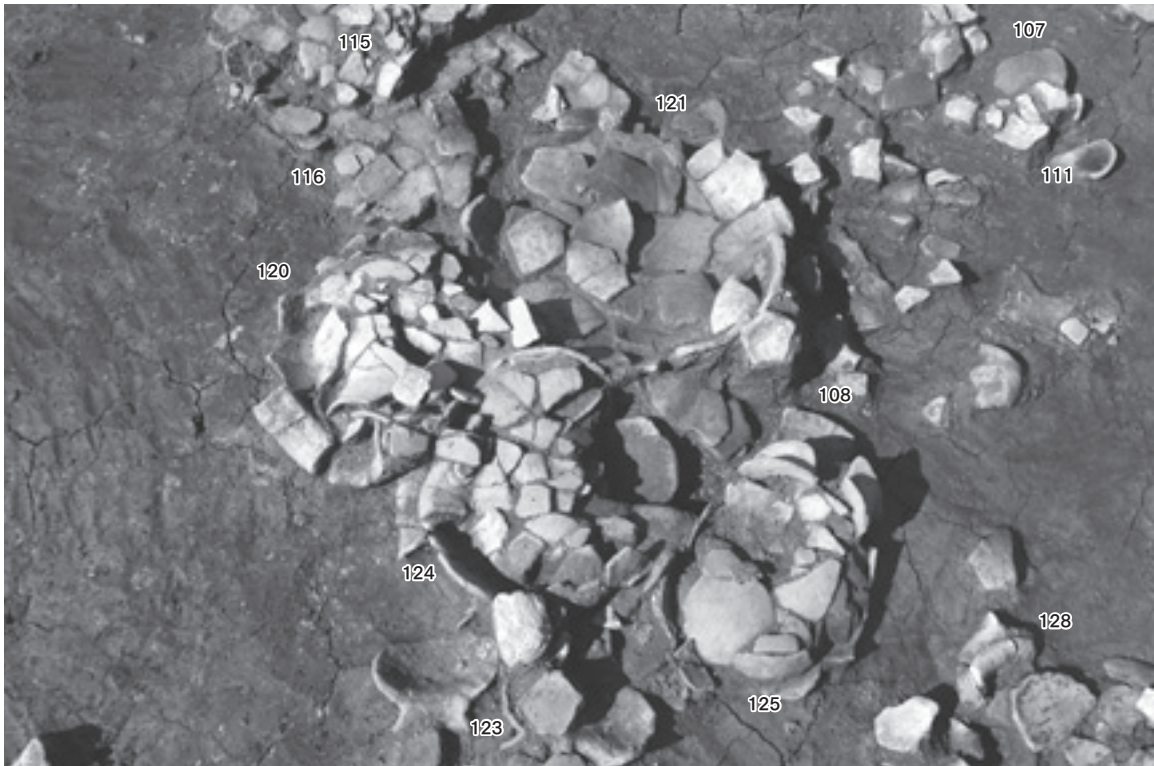
9群 (図12・24・25) C4西側の範囲。115は北側で116の上で出土した二重口縁壺。肩部に沈線で動物、虫のような線刻画を描く。接合しない小片にも線刻がみられる。上が口で胴部と羽根であろうか。116は115の下に平たくつぶれて出土した甕で、口縁部と胴部は接合できていない。胴部は調整の方向から上下、位置を想定して大胆に復元を行った。115、116ともに脆い。117は西側で北西に倒れた壺。119、118は南西側で出土の高坏。120から125は互いに接し、上下関係は判断できない。いずれも横倒しである。120は壺形で口縁部は南方向、121は二重口縁の甕で北方向、124は甕で西方向、125は甕で北を向く。甕123は南端で南を口にする。122は121と一緒に取り上げた口縁部で磨研調整を施す。



PI.5-1 8群 南から



PI.5-2 9群 西から



PI.5-3 9群 南から

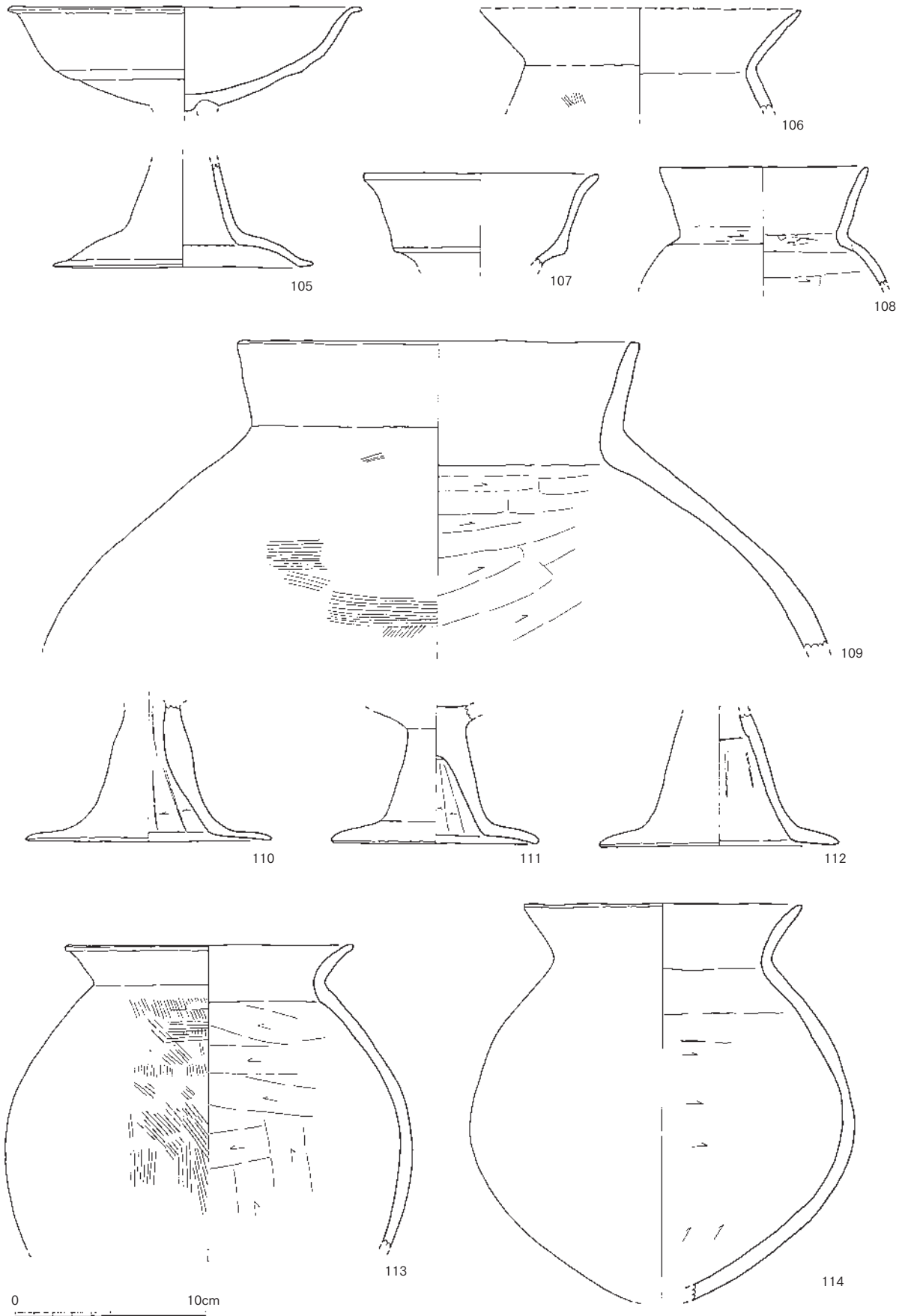


图23 SX003 8群出土遺物実測図 (1/3)

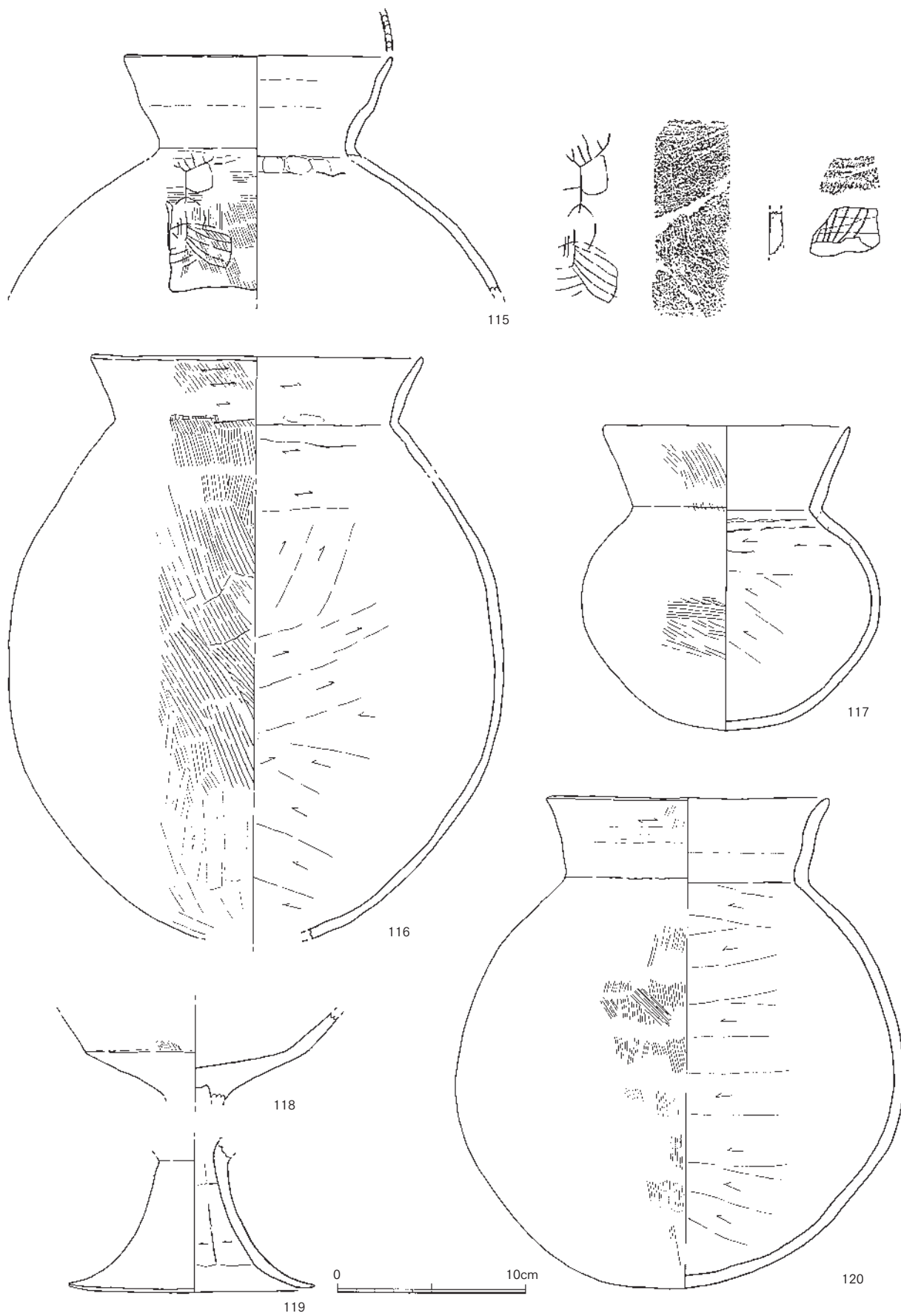


图24 SX003 9群出土遺物実測図1 (1/3)

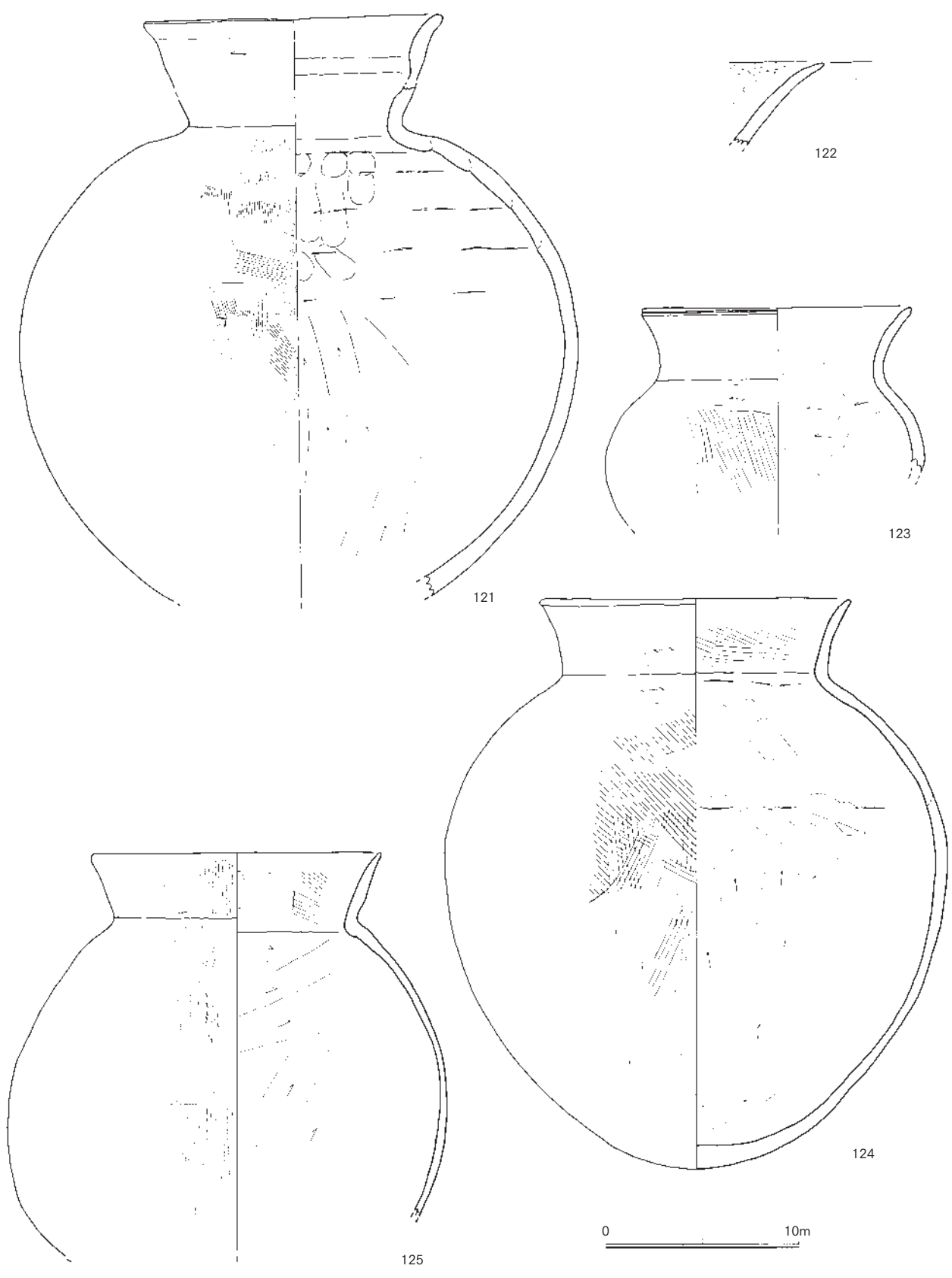
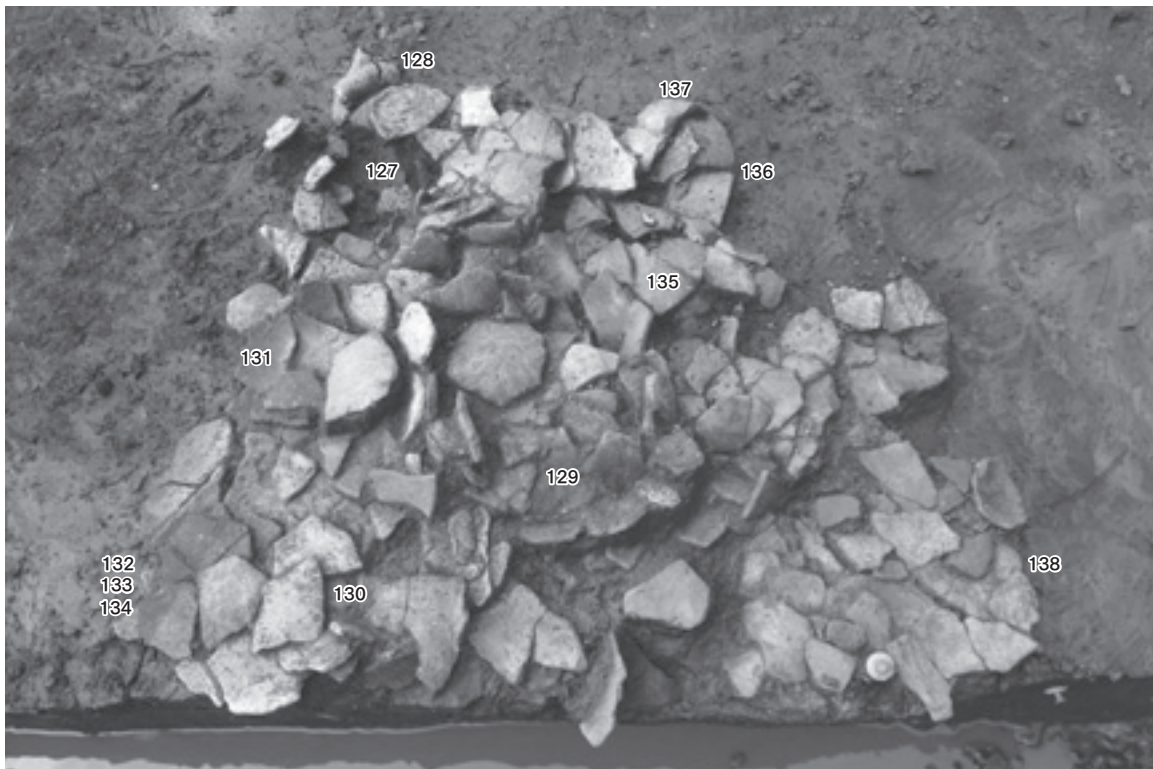


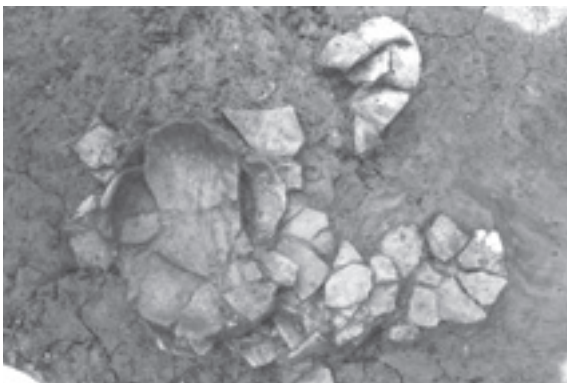
图25 SX003 9群出土遺物実測図2 (1/3)

10群 (図26・27) C4南側で甕が密集する。127は北側に位置する甕で北西側を向いて開いて割れており一部が130の下になる。北、北西側に口縁部がみられる。128は127の北側出土の甕の口縁部。129は127の南に接する甕で東または南東に倒れる。130から134は129の南西出土で取り上げ時に分離できていない。そのうち甕130が南側で倒置されて胴部は主に東側につぶれる。甕131は130の北に接して北に口縁を向けて倒れる。132は甕、133は二重口縁甕の破片で出土状況は確認できていない。135、136は北東側に位置し、135は南東に向く口縁部がみられ、136は北東側に向く。137は136と一緒に取り上げた甕の破片。138は南東側出土の甕で口縁部は南西を向く。高坏139は南側で西向きに倒れて出土した。

11群 (図28) C5、D5グリッド北側の遺物を一括する。141はC4グリッドで口縁部を南に横たわる。142は西側出土の台付きの鉢で正置、鉢143はその下からの出土。144は小鉢、145小型壺でいずれも倒置、146は脚で正置。147は南東側の破片群内で出土状況不明。148は底部を南に横倒しでの出土。149は甕で径の1/4破片。150は149に被り倒置でつぶれる。151はD5で破片がやや広がる。正置か。



PI.6-1 10群 南から



PI.6-2 10群131 西から



PI.6-3 10群130 南西から

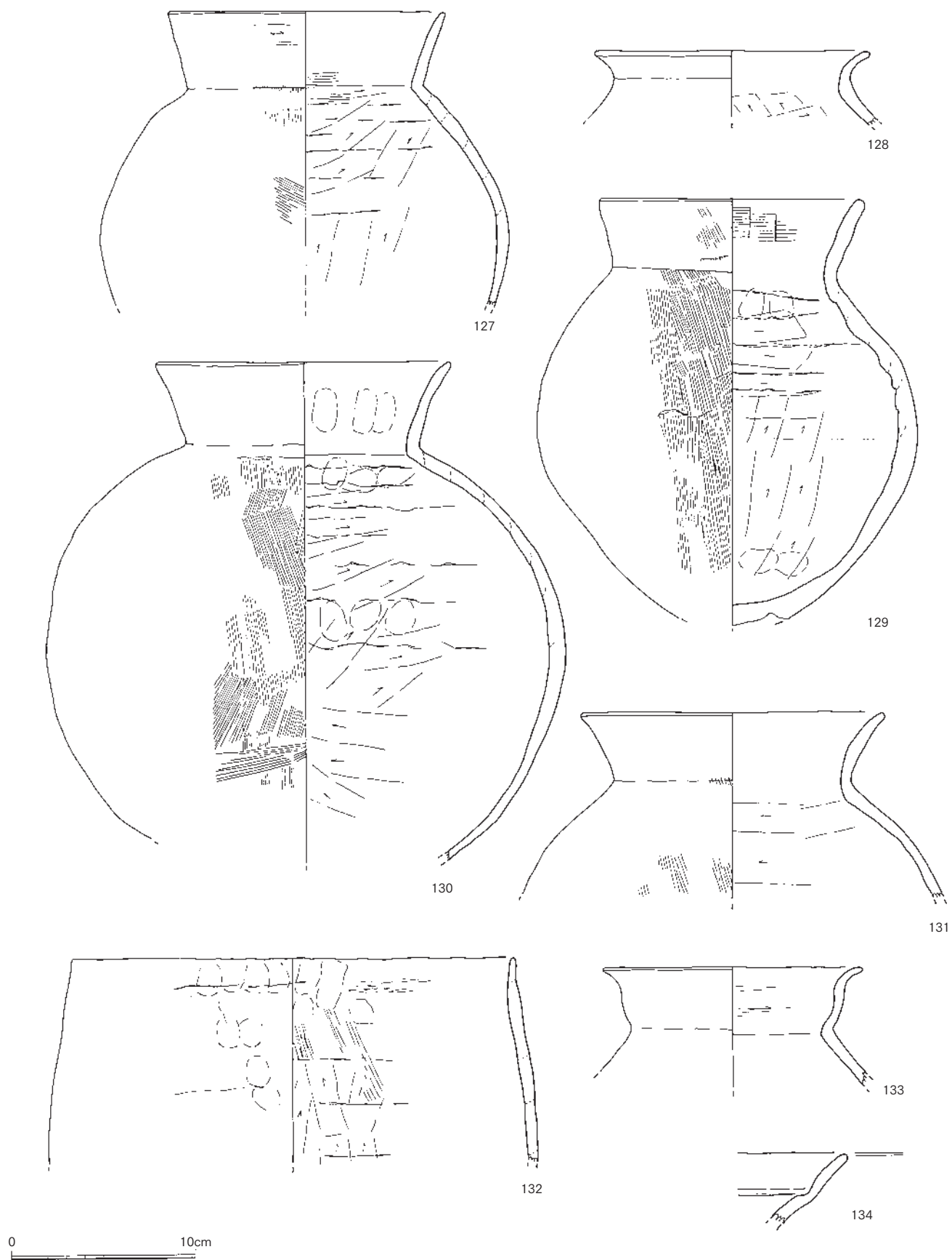


图26 SX003 10群出土遺物実測図1 (1/3)

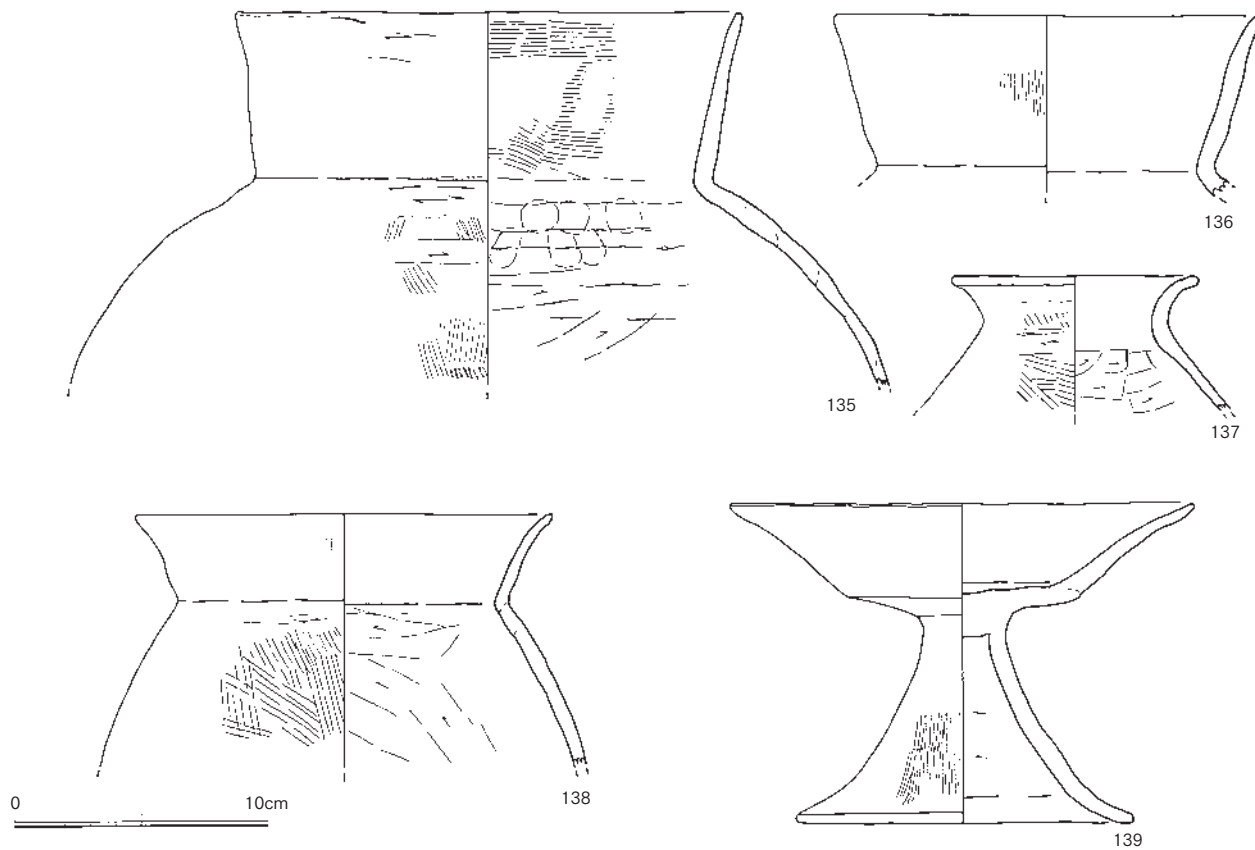
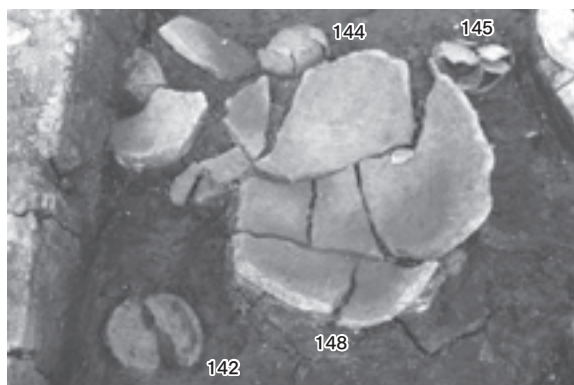
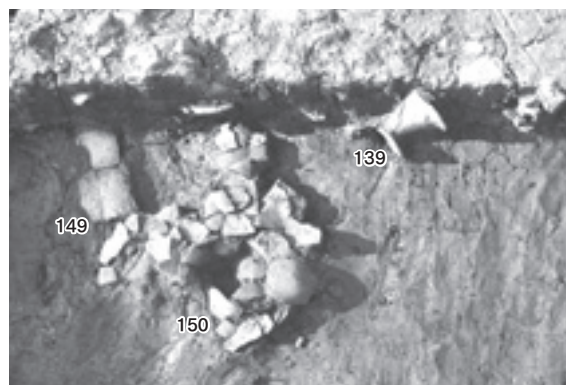


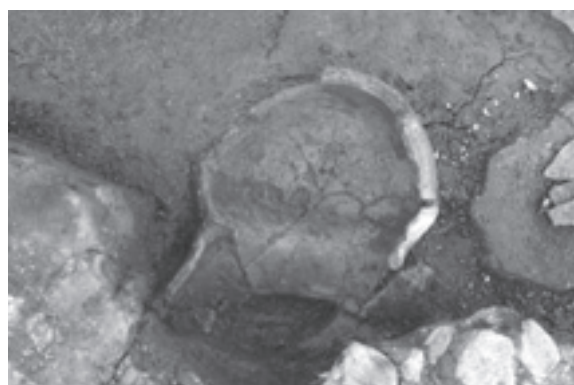
図27 SX003 10群出土遺物実測図2 (1/3)



Pl.7-1 11群 西から



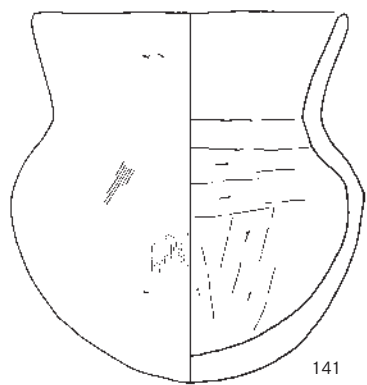
Pl.7-2 11群 南から



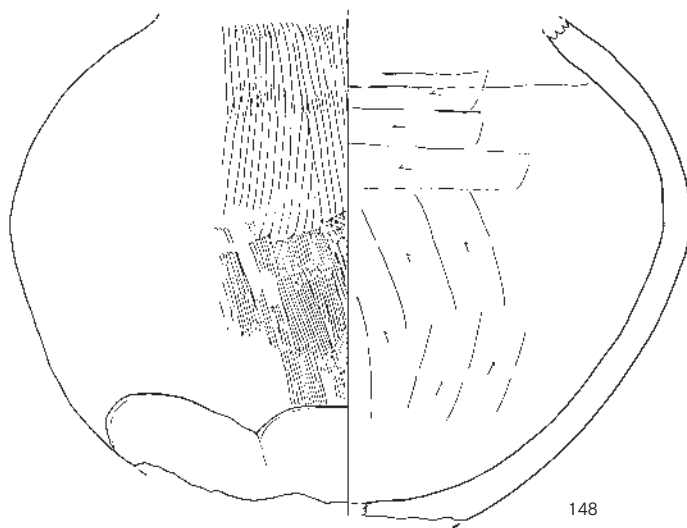
Pl.7-3 11群141 南東から



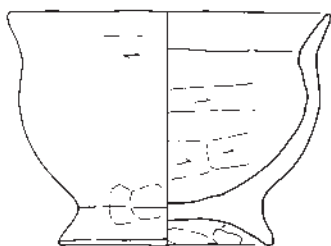
Pl.7-4 11群151 南から



141



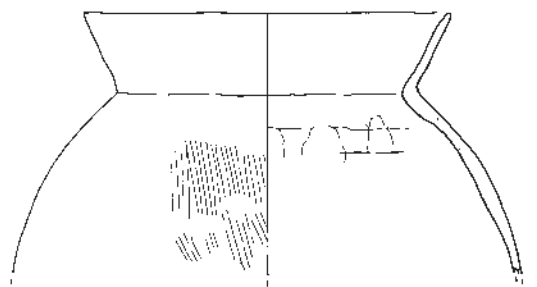
148



142



143



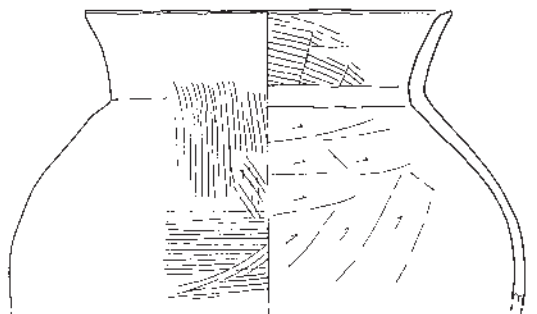
149



144



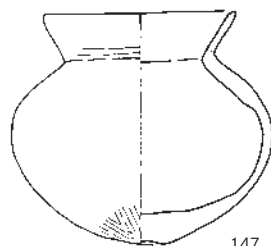
145



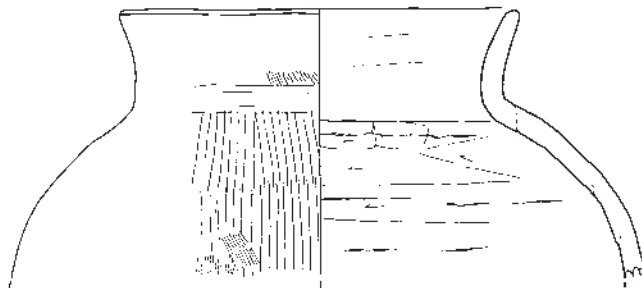
150



146



147



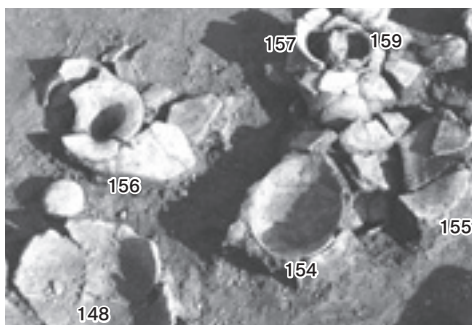
151



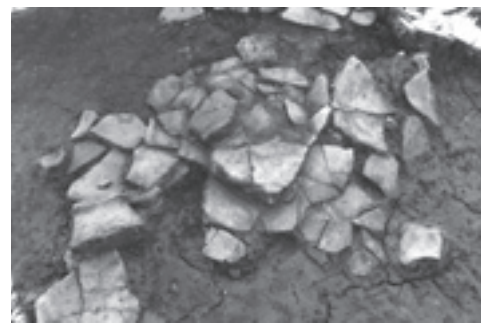
图28 SX003 11群出土遺物実測図 (1/3)

12群 (図12・29) C5西よりの一群。152は高坏の破片で伏せた状態で出土。154、155は高坏の坏部で中央の集まった部分に正置、157は甕でその東に接して正置され、口縁部に159が正置される。口縁端部をわずかに欠く。160は157の北側下に隠れた台付きの小壺。153は155などの下から口を南につぶれて出土した甕。156は高坏の脚で倒置される。158はやや大型の壺で、南西側でまとまった破片が出土した。

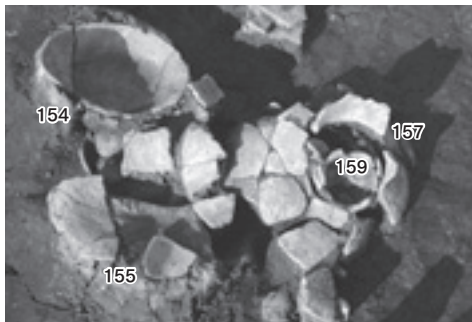
13群 (図30・31) C5南東よりで1個体がつぶれたものが目立つ。161は甕で横倒しで出土。甕162は横倒しで接合しない下半部がある。163は口縁部が南西に向いて胴部片が北東側に広がり倒れた状態で出土した。164は甕で正置したものが東よりにつぶれている。165は二重口縁壺で164の下から倒置で出土。166は西側で口縁部を西に向け横倒しで出土した。胴下半との接合ができていない。



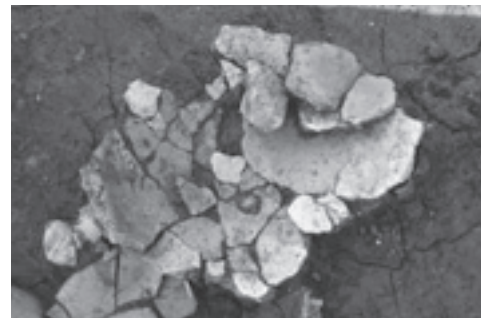
PI.8-1
12群 北西から



PI.8-5 13群163 東から



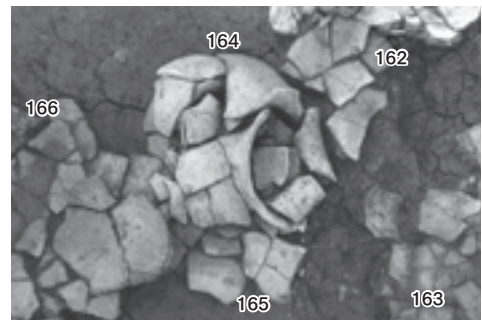
PI.8-2
12群 南西から



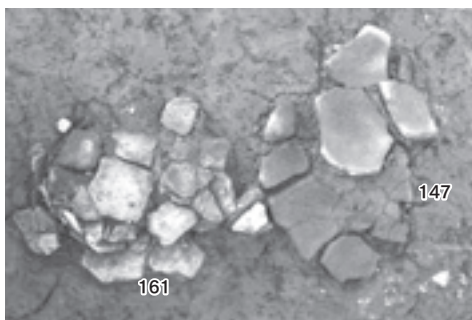
PI.8-6 13群162 南から



PI.8-3
12群 東から



PI.8-7 13群 南から



PI.8-4
11・13群 南から

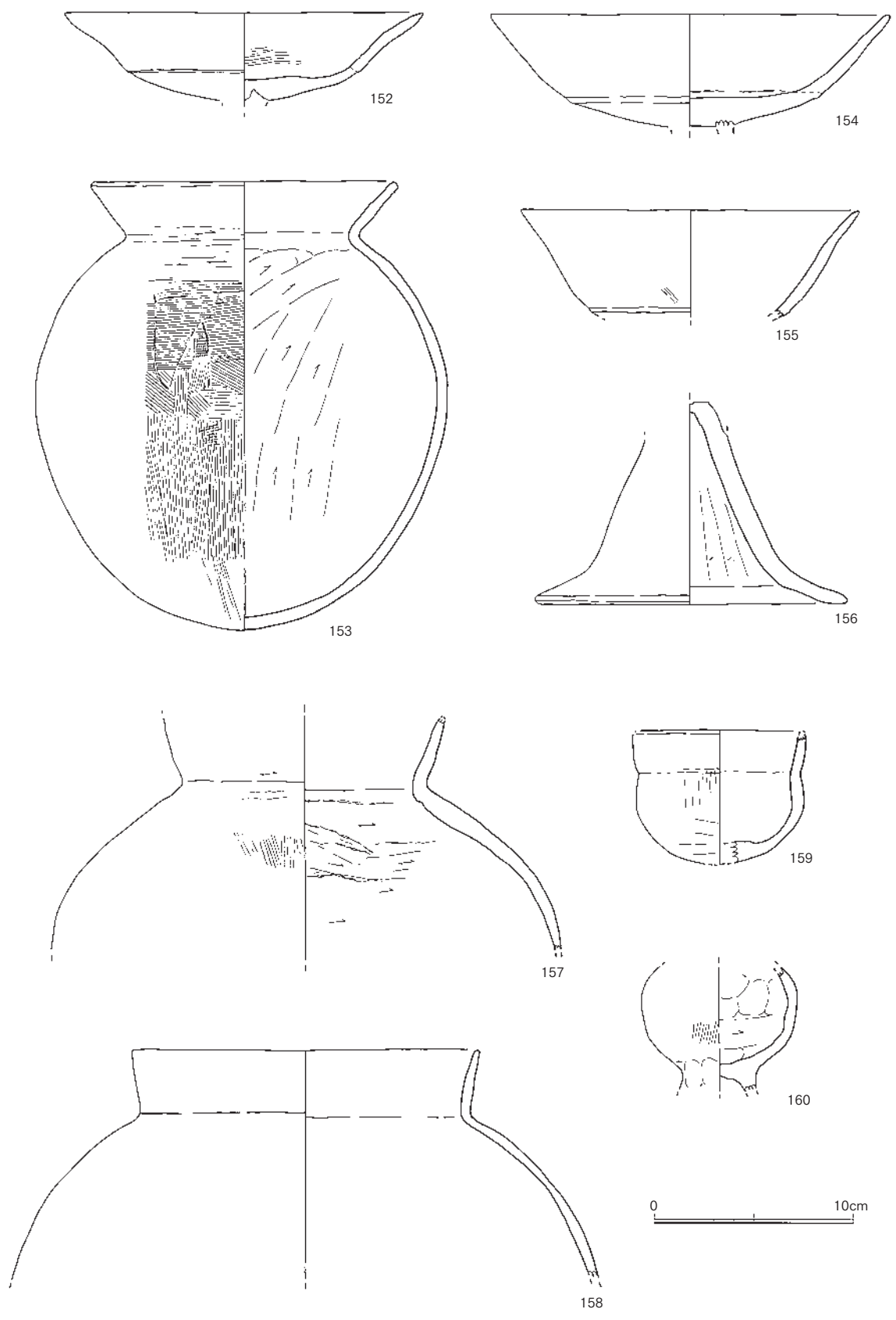
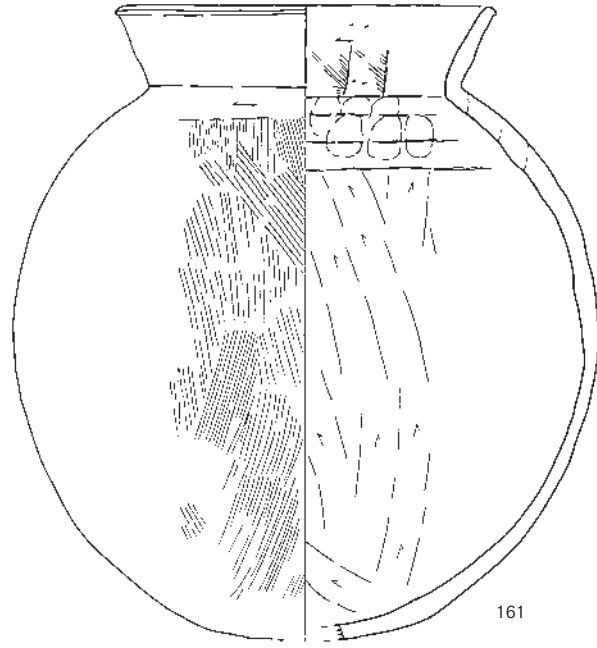
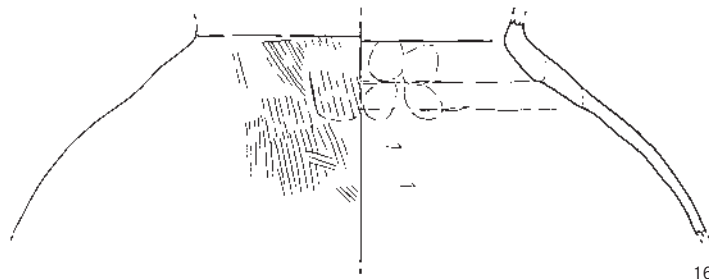


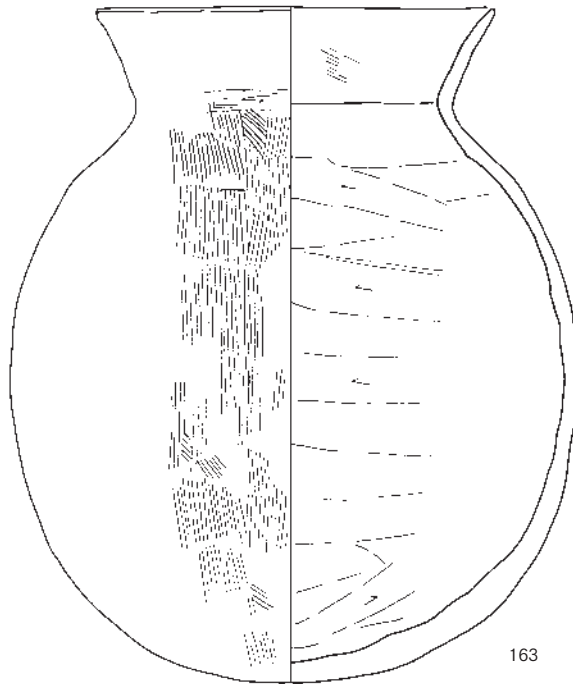
图29 SX003 12群出土遺物実測図 (1/3)



161



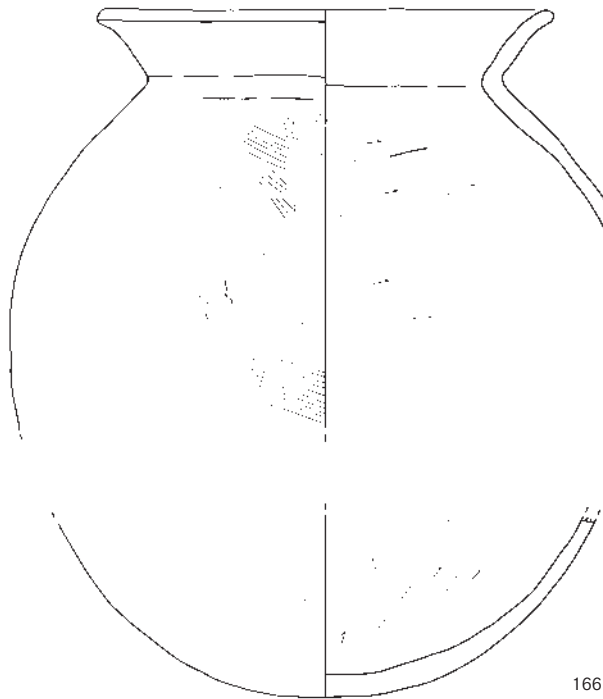
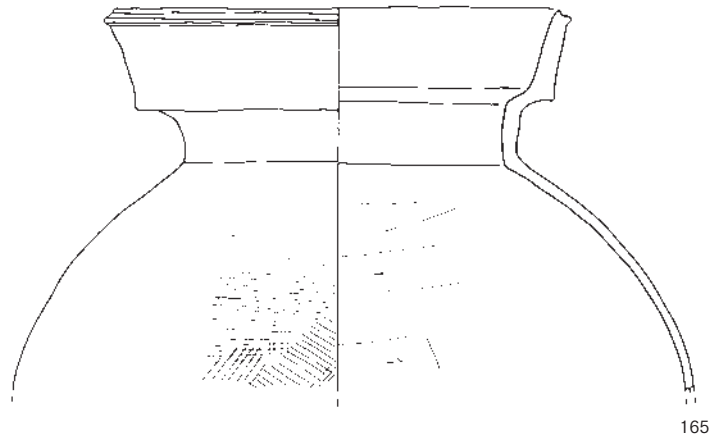
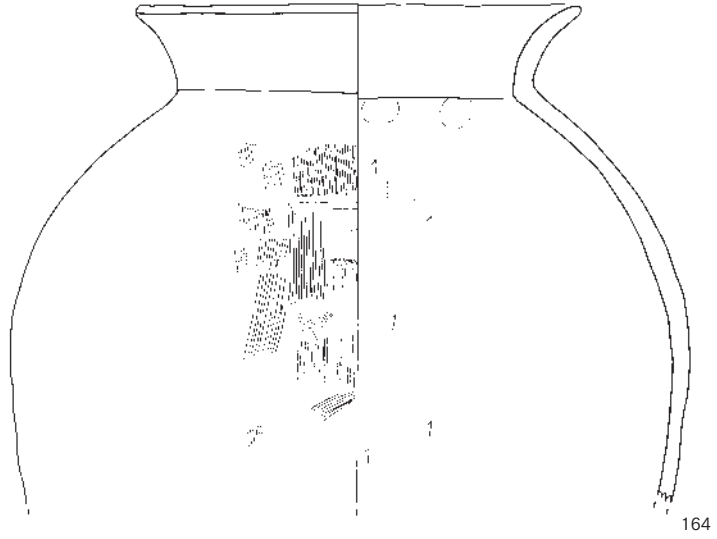
162



163

0 10cm

图30 SX003 13群出土遺物実測図1 (1/3)

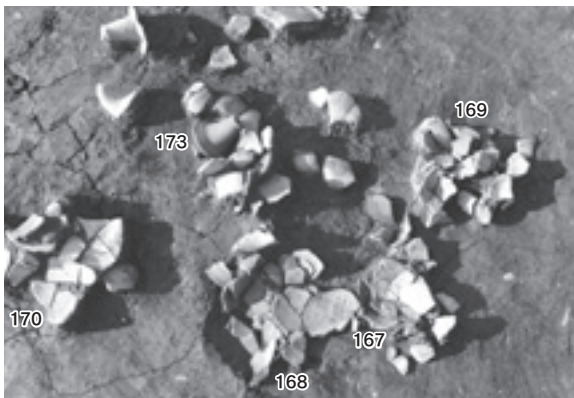


0 10cm

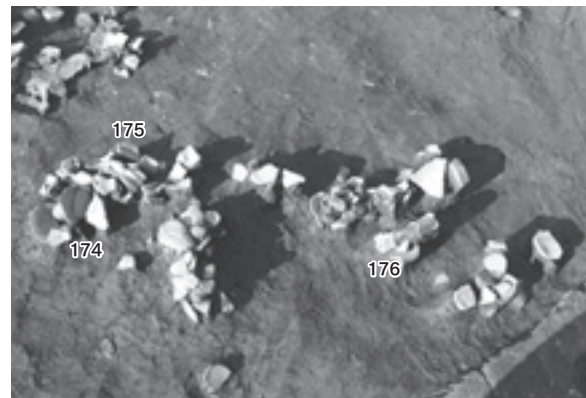
图31 SX003 13群出土遺物実測図2 (1/3)

14群 (図32) C5-6グリッドにまたがる一群。167、168は近接する甕で167は口縁を北東に、168は北西にして横たわった上半を削平される。167の胴部は推定した底部位置、調整から復元した。169は甕で限られた破片がやや乱れて横たわる。口縁部は北を向く。170は甕の上部片で一個体の破片が集まるが乱れが大きい。171は小型丸底壺で口縁部を東下方にむけて倒立に近い状況で出土した。172は取手で単独で出土。173は高坏の脚で正置したものが東を向く。西側近くに凶していない高坏2点が出土している。174は高坏で東に倒れ、その上に壺175の破片が乱れて集まる。176は甕の口縁部片。破片群の一つ。

15群 (図33) D5、6グリッドに散在する。177はSX003の分布域から東に離れ、甕が口縁部を東にして8層に沈むようにつぶれて出土した。178は土師器の胴部下半で破片が散乱する。底に焼成後の穿孔がみられる。径5cmほどが復元できる。179はD6東側で8層を掘削中に出土した甕。1個体がつぶれていた。方向は確認できていない。180は直口壺で8層に沈んで南東を口に横たわる。181は高坏の脚。182は須恵器の坏蓋で口縁部の稜が段をなす。内面に当て具痕がみられる。183は高坏の脚で北西に傾き正置で出土。184はD5出土の甕。

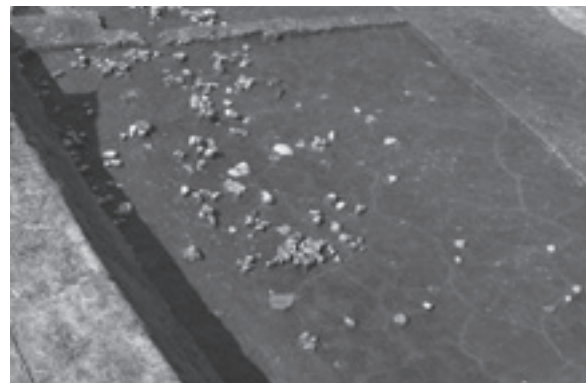


PI.9-1 14群 南から



PI.9-2 14群 西から

16群 (図34・35) 7グリッドから南は遺物の出土状況は散漫になり、同一個体の破片が集まる箇所はあるが一個体がつぶれた状況は見られない。Dグリッドから東はさらに薄くなる。またCグリッドも西側は9層が露出し、出土状況を図化した中にも319など弥生土器を多く含む。ここでは古墳時代の遺物を北側から取り上げる。185～187は取手で185は11cmと長い。187はC7内出土。188は高坏の脚が横倒しで出土。189は甕の破片。190は台付きの壺で北へ倒れて出土。191は直口壺で破片が散るが西側を向く。192は壺形の肩部で外面なで調整に上部から斜めにやや太めの沈線を平行して描く。破片を欠く部分があるが7条がみられる。破片が集まって出土。193は甕で大きめの破片がC8に散る。194、195はミニチュア土器。196、197は高坏坏部で破片からの復元。198、199は脚部で198は倒置、199は横になって出土。200は須恵器の大甕破片で外面は平行叩きの後に横方向の搔目を施し、内面は上部に当て具痕が残る他はなで消している。202は小型壺、203は高坏で破片群のなかの一片。204は甕で口縁部内外面の指抑えが顕著で外面は工具に



PI.10 16群 南から

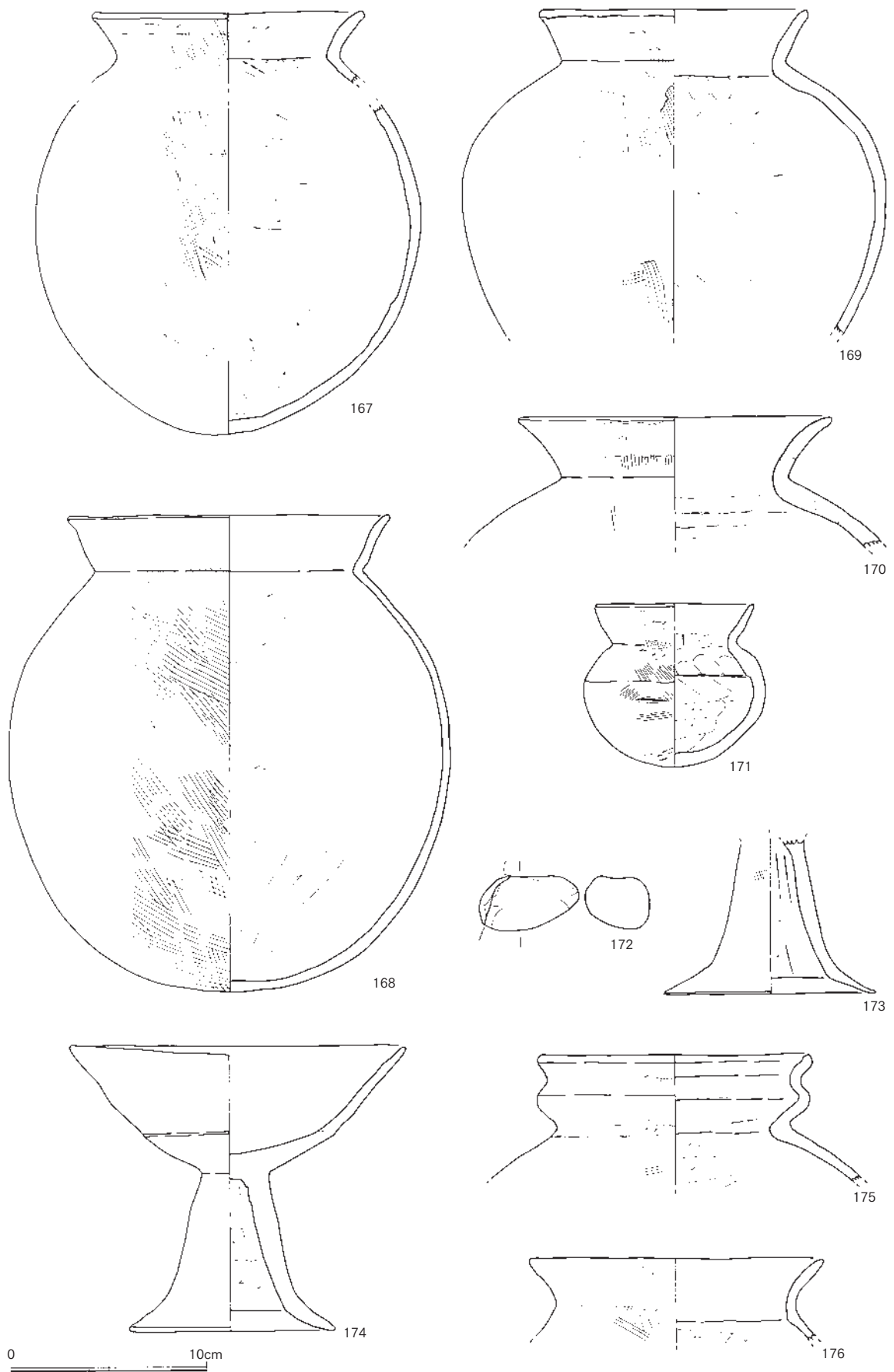


图32 SX003 14群出土遺物実測図 (1/3)

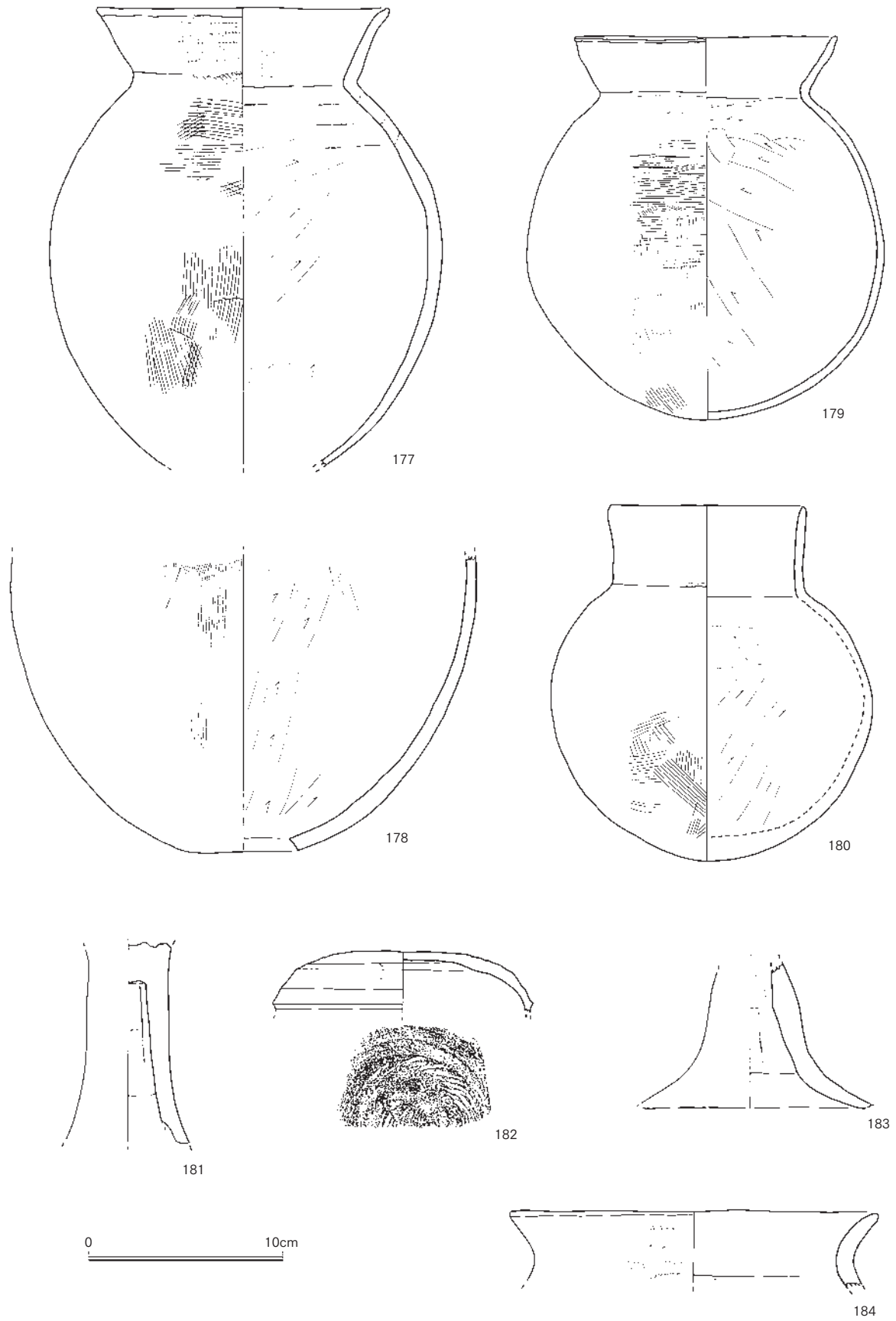


图33 SX003 15群出土遺物実測図 (1/3)

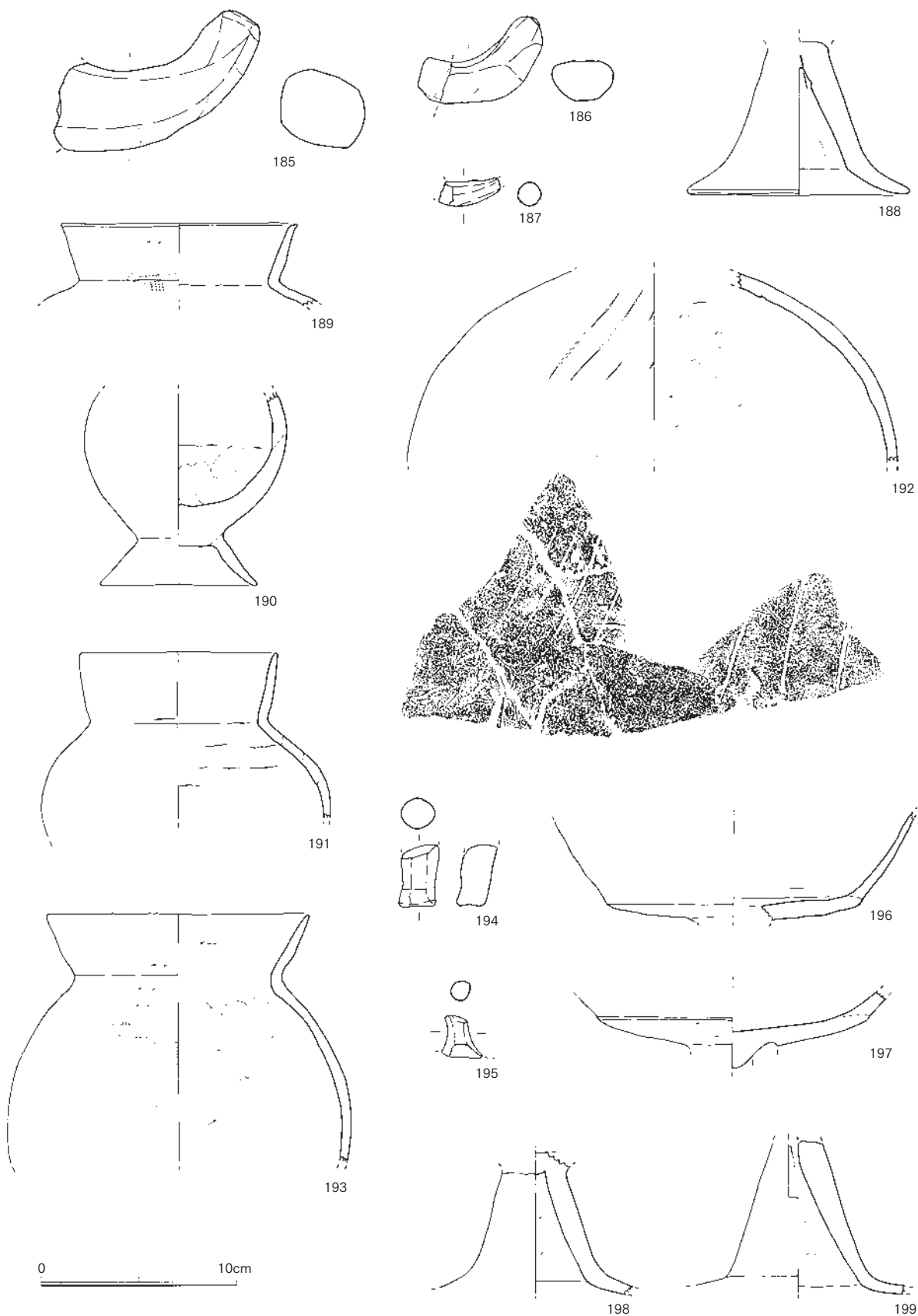


图34 SX003 16群出土遺物実測図1 (1/3)

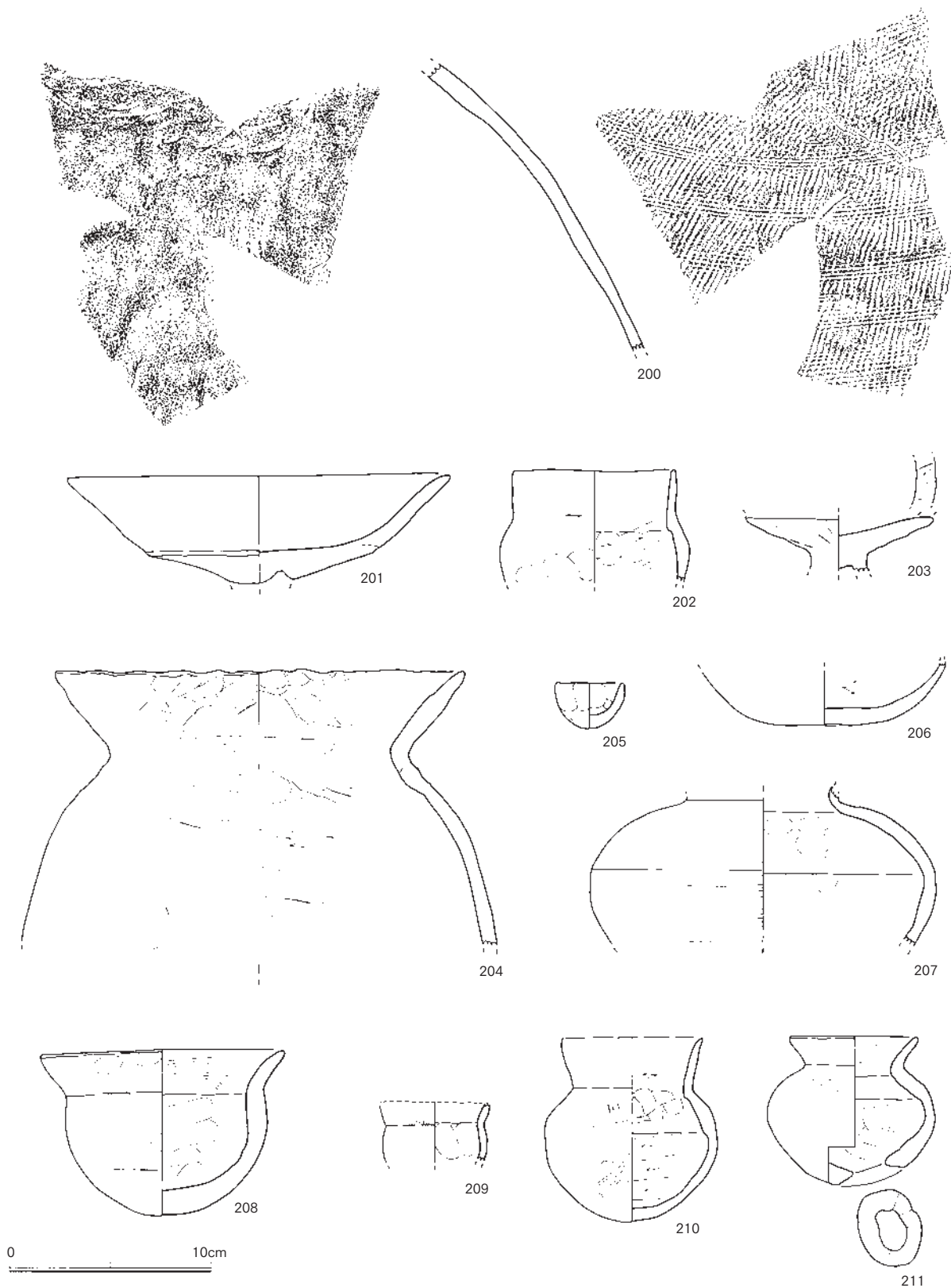
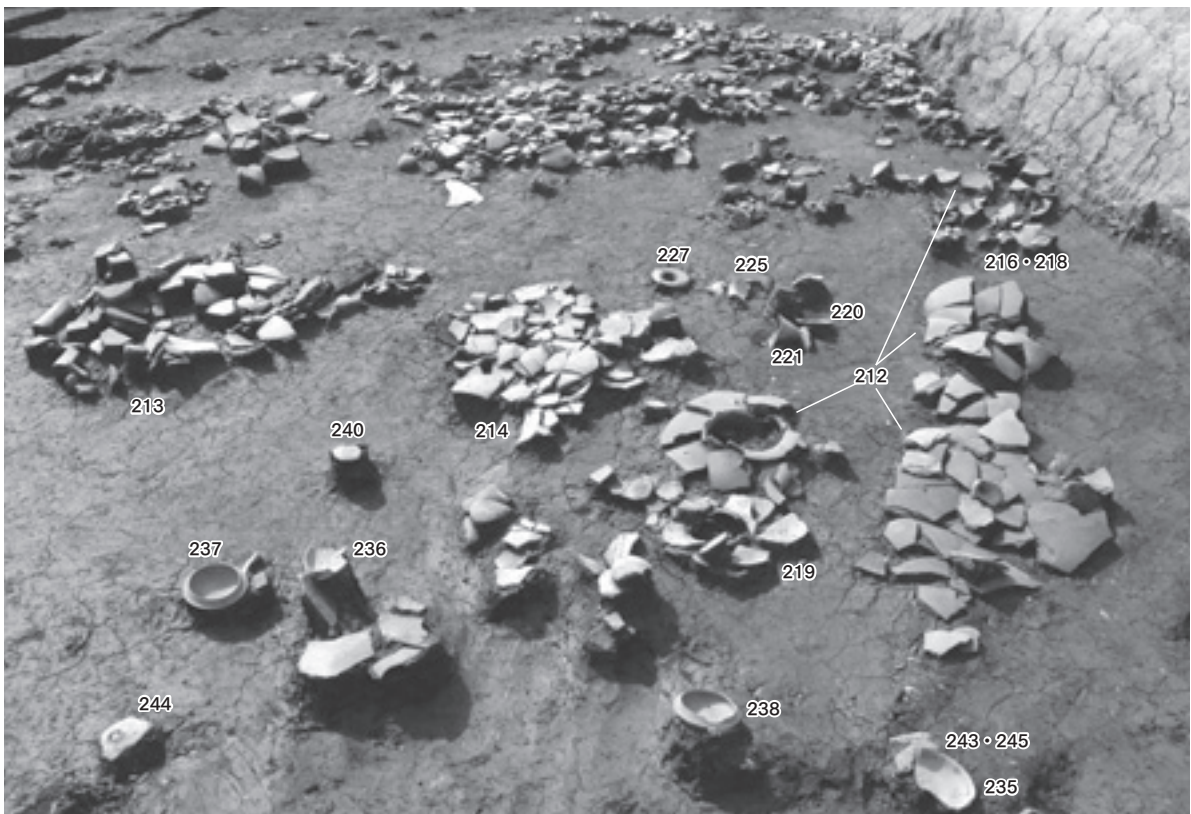


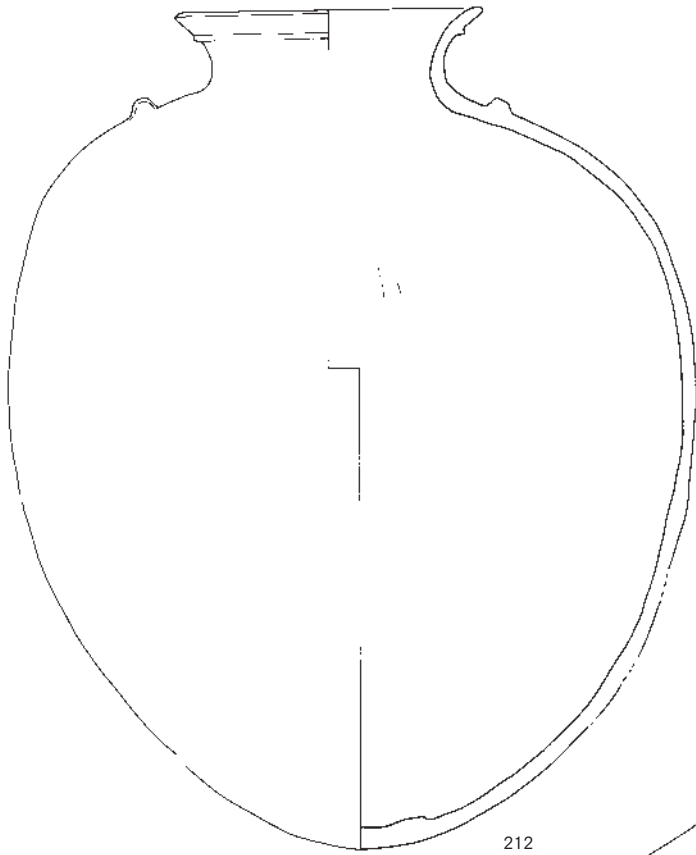
图35 SX003 16群出土遺物実測図 2 (1/3)

よるなど、内面は削り。破片が集まる。205はC9出土のミニチュア土器。206は底部片。207は須恵器で甕の肩部か。外面自然釉。209はB9出土の小鉢でほぼ完形。209はD9出土の小鉢破片。210は小型壺で北西に倒れて8層に沈む。211は小壺で南東に倒れる。焼成後の穿孔がある。

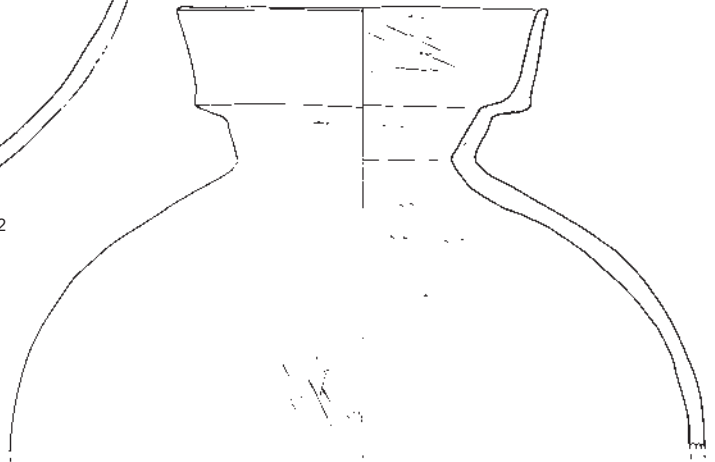
17群（図36・37・38）DE2、3グリッドはCグリッドに比べると密に遺物が集まることはないが、つぶれた大きな個体が目立つ。その周囲に破片が散乱する。また、Eグリッドでは須恵器のⅢ期の坏がみられる。212は須恵器の甕で高さ68cm、最大径55cmを測る。口縁部は外反し、少し下がった位置に三角突帯をめぐらす。肩部には二つの耳を付す。器面は内外面ともになで調整で仕上げる。破片は大きく4箇所に分かれ、それぞれまとまりを持って集まる。南側に口縁部から肩部が正置で出土した。割った後で置かれたものか。破片は接合できなかったものもあり、また北壁中に及ぶと考えられる。213は大型の二重口縁壺でD3の南側に集中する。口縁部と頸部の接合は不明瞭だが復元的に作図した。胴部も接合した部分が大いだが位置が不明で、全体を復元するには破片が足りない。214は二重口縁壺でD4北側でつぶれた状態で出土。口縁部は南を向く。胴部下半1/3以上を欠く。215から218はD2西側の破片群中の出土。215は甕の破片。216、217は須恵器の甕で同一個体の可能性がある。216は同一個体片で2/3強が残るが217は小片からの復元。218直口壺で小片からの復元。219は212の口縁部の東に近接して出土した甕で口縁部は倒立する。胴部を大きく欠く。220、221は近接する高坏で221は北に倒れる。222から224は219にまじって出土。222は甕の底部で底に焼成前の径2.5cmの穿孔がある。223は丸平底。224は須恵器甕で外面は平行叩きで内面はなで。225は短頸の壺片。226は小型壺片で212の北東側のまとまりから出土。227は高坏の脚で倒置で出土。228は高坏の脚で212北東側のまとまりの上で出土。229はD3南の213の北側で出土した甕片。231、232も同じ位置の出土で231は小型壺、232は二重口縁壺である。230は213の西で出土した甕の破片。233は須恵器の甕の胴部片で傾き不明。



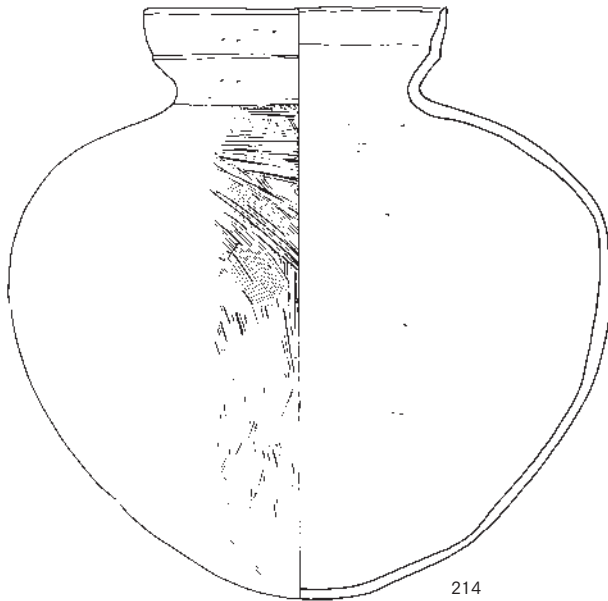
Pl.11 17群 東から



212



213



214



图36 SX003 17群出土遺物実測図1 (1/4)

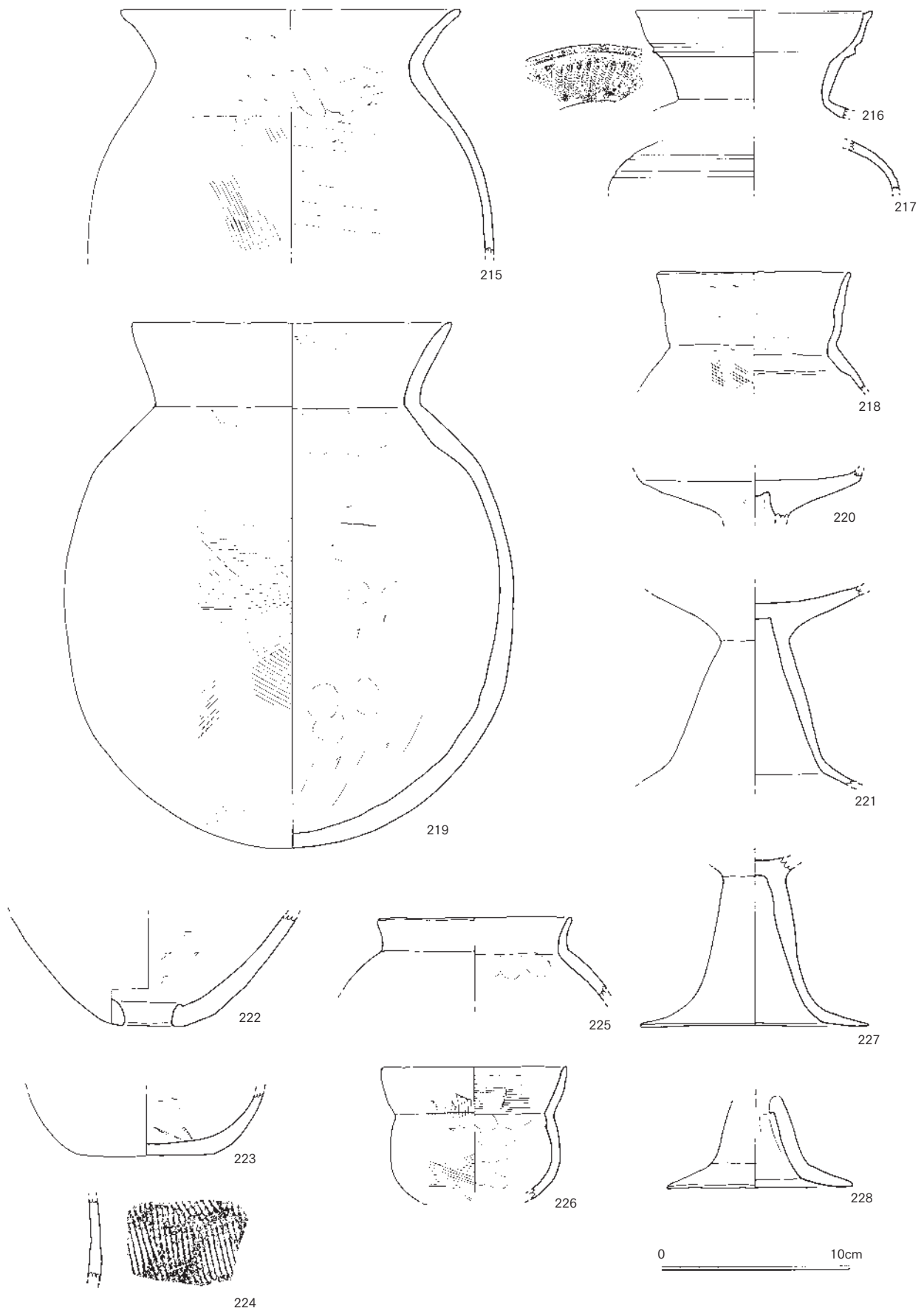


图37 SX003 17群出土遺物実測図2 (1/3)

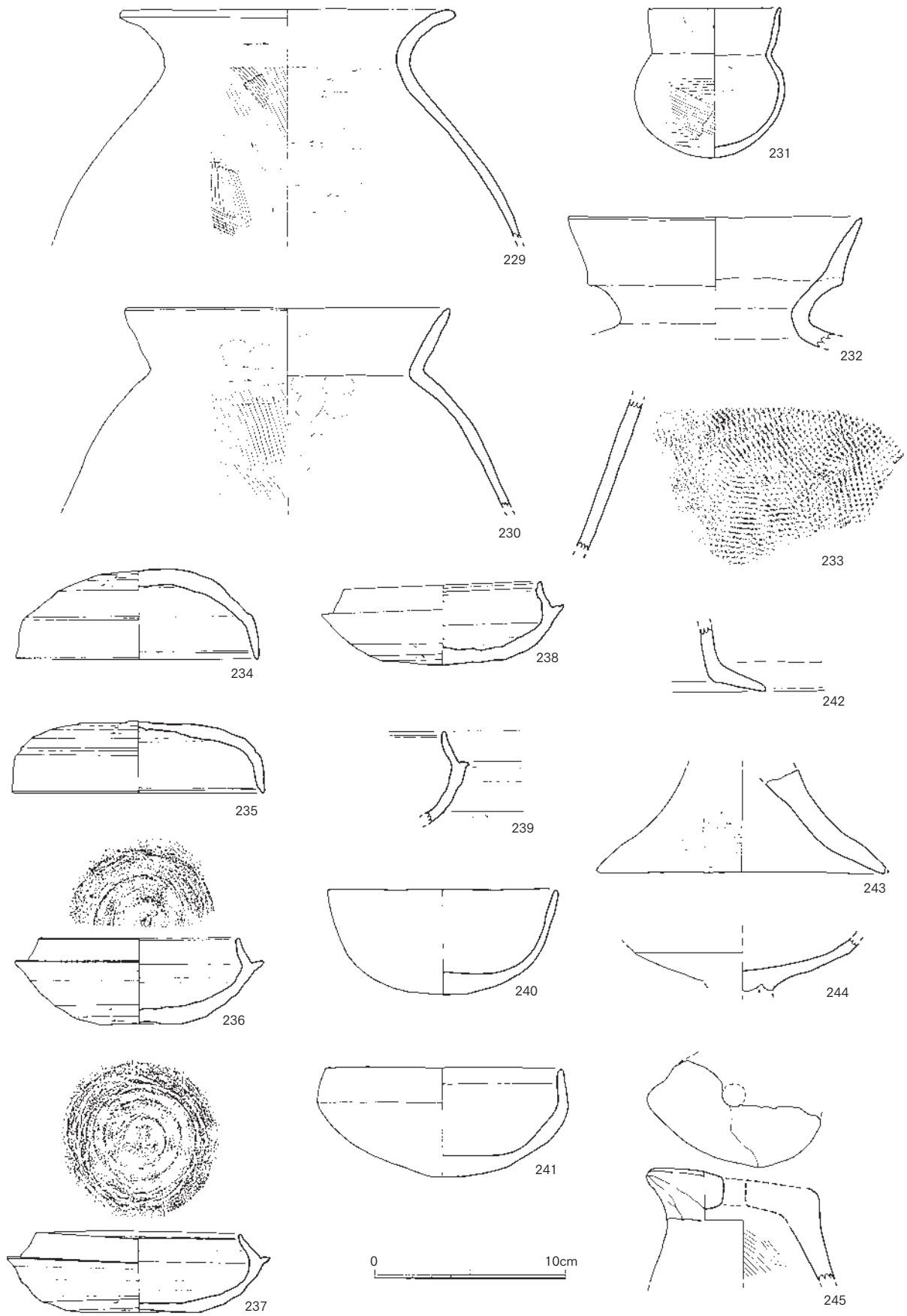


图38 SX003 17群出土遺物実測図3 (1/3)

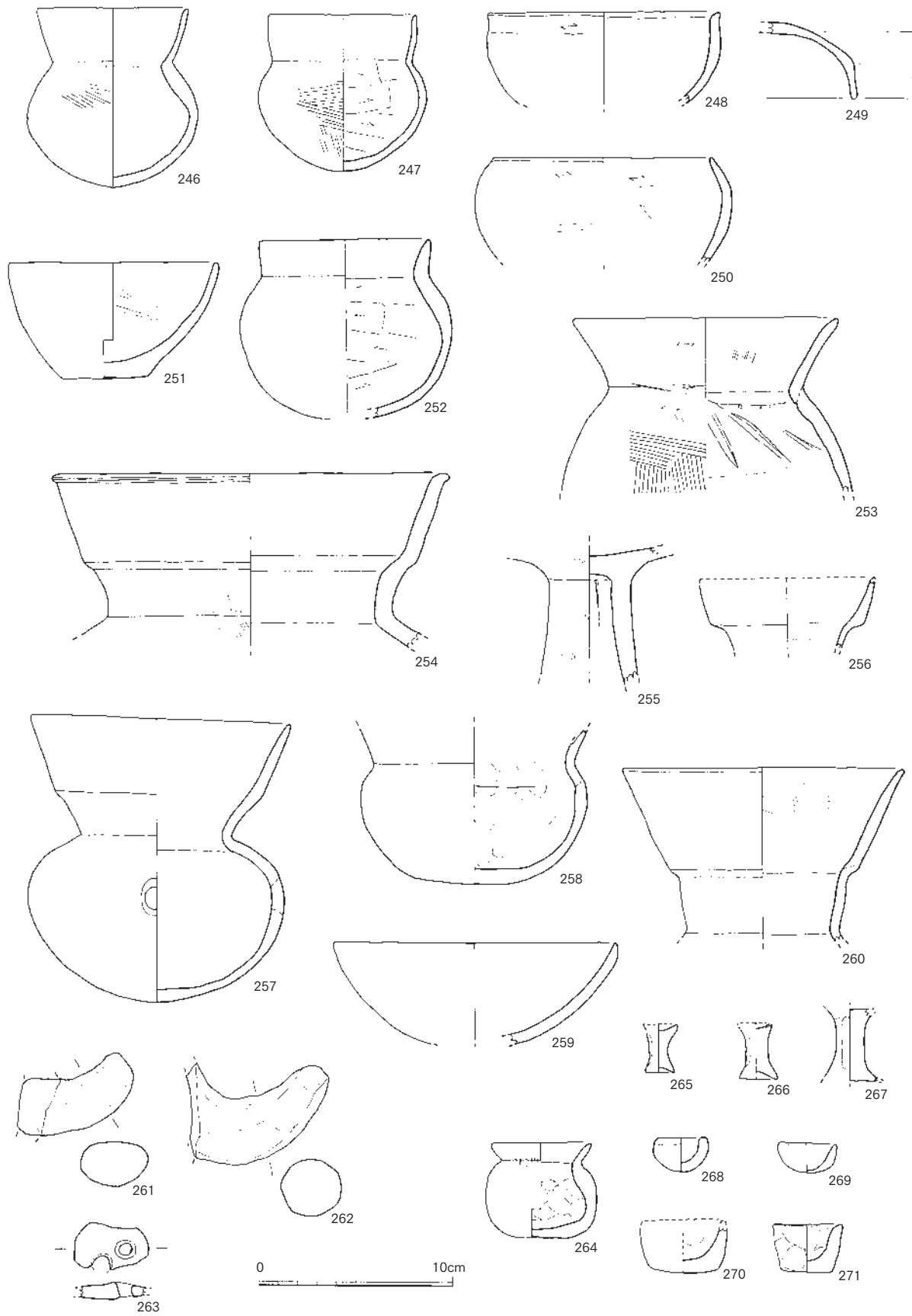


图39 SX003出土遺物実測図 (1/3)

234から239は須恵器の坏でEグリッドの各位置で出土した。坏身236、237は内面に当て具痕がみられる。234は2つに割れ、235、236は破片、237、238は完形で234以外は内面を上に出土。240、241は土師器の鉢。240はE2で正置、241はD3出土。242は高坏の脚、243は脚部、244は高坏、245は弥生時代の支脚でそれぞれ破片である。

D4、E5、F5ほか(図39) 遺物の集中部から外れたもの、出土位置を記録できていないものなどをまとめた。246から248はD4出土の小壺と鉢。246、247は図12に示す。D4の東側では上部の細かな土器片は広がるが、甕などの設置は見られない。ただしこれより東にもD5の177のように単体での設置は存在する可能性はある。249、250はD8出土で249は須恵器坏を模倣した土師器。250は小片。鉢251はE5、甕253はF5の検出時の出土。252は003上部検出時の短頸小壺。二重口縁壺254、高坏255はそれぞれC5で166、158と共に取り上げた破片。254～256は図12に示す。256はC3⑥の破片群の一片。257から260は北壁からの出土。257は胴部に焼成後の穿孔1つを施す。261、262は取手で甕と考えられる。取手は他の器種ほど多くはないが出土があるが、はっきり甕とわかる口縁部等は確認できていない。263は甕の底で多孔タイプである。264から271はミニチュア土器で手づくねで成形する。264がF2、270がC5、271がC3出土で、他は出土位置を記録できていないが、4グリッドより北と思われる。270は図12に示す。

須恵器(図40) 出土位置を図化せず主にグリッドで取り上げた須恵器ですべて破片である。その広がり003の範囲全域に及び、集中箇所はない。概ね小田編年Ib期からII期に収まる。280が坏Hで上層の混じり込みと考えられる。272から279は坏で蓋の口縁部は稜がみられ、口縁端部は蓋身とも段または凹面をなす。281、283から286は甕の頸部で波状文を施すものがある。287と288は直線的な口縁部に細い突帯を付す。290、291は甕の胴部。292から298は高坏の脚部で、292から294は透かしがあり、いずれも4方向と考えられる。299から302は甕で波状文を施すものがある。

石製品(図41) 出土位置等は表に示す。303から312は滑石製品である。303は紡錘車で表面は平滑に仕上げるが側面には縦横方向の擦痕が多く見られる。304、305は薄い円盤で304に1つ、305に2つの穿孔がある。306から312は小玉で2、3グリッドにやや集まるがCD8グリッドにもある。いずれも掘削中に確認したもので、見落とししたものもあろう。他に滑石の礫が数点、重さ450gほどが出土した。大きなものは長さ11.5cm幅4.5cmほどの棒状のものがある。また粉末は確認していない。18次調査II区に古墳中期の滑石玉製作跡があり関連が注意される。313から315は砂岩製のくぼみ石である。313と315は1面、314は3面にくぼみがみられる。SX003では砂岩、火成岩、軽石等の礫が出土するが、定型的なものは見られない。黒曜石等の剥片石器は下層の遺物に含める。

動物遺体 牛または馬の歯が2ヵ所で出土しているが残りは悪い。

弥生、古墳前期の土器(図42) 003の報告中でも下層の遺物と考えられる弥生土器もいくつか取り上げた。ここでは同様の遺物で下層で報告する中にもない器種等を取り上げる。316は支脚、317は山陰系の甕で小片からの復元、318は丸底の底部で外面に段を有す。319は袋状口縁壺で口縁部が一周する。(図12 C9) 320は小型の「く」の字口縁の甕で1/4からの復元。

272	C3・E3	279	C5	286	C5	293	C10	300	C5
273	C8・D9	280	C2	287	C8	294	E3	301	検出面
274	C2	281	D8	288	D4	295	C4	302	C3
275	D8	282	C8	289	C7	296	C2		
276	D8	283	D6	290	D5・E5	297	検出面		
277	C7	284	C8・D9	291		298	C10		
278	D4	285	D3	292	検出面	299	C3		

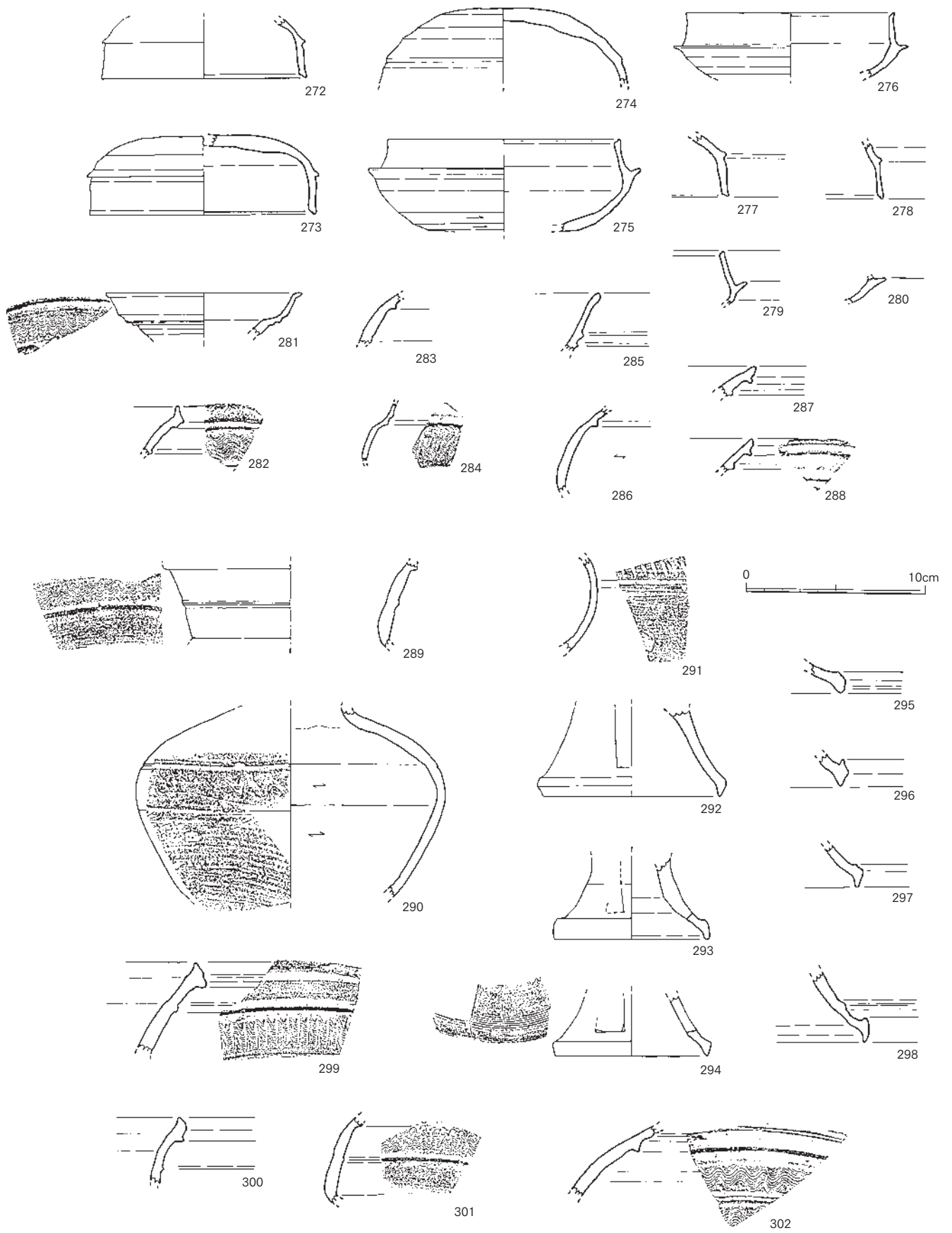


图40 SX003出土須恵器実測图 (1/3)

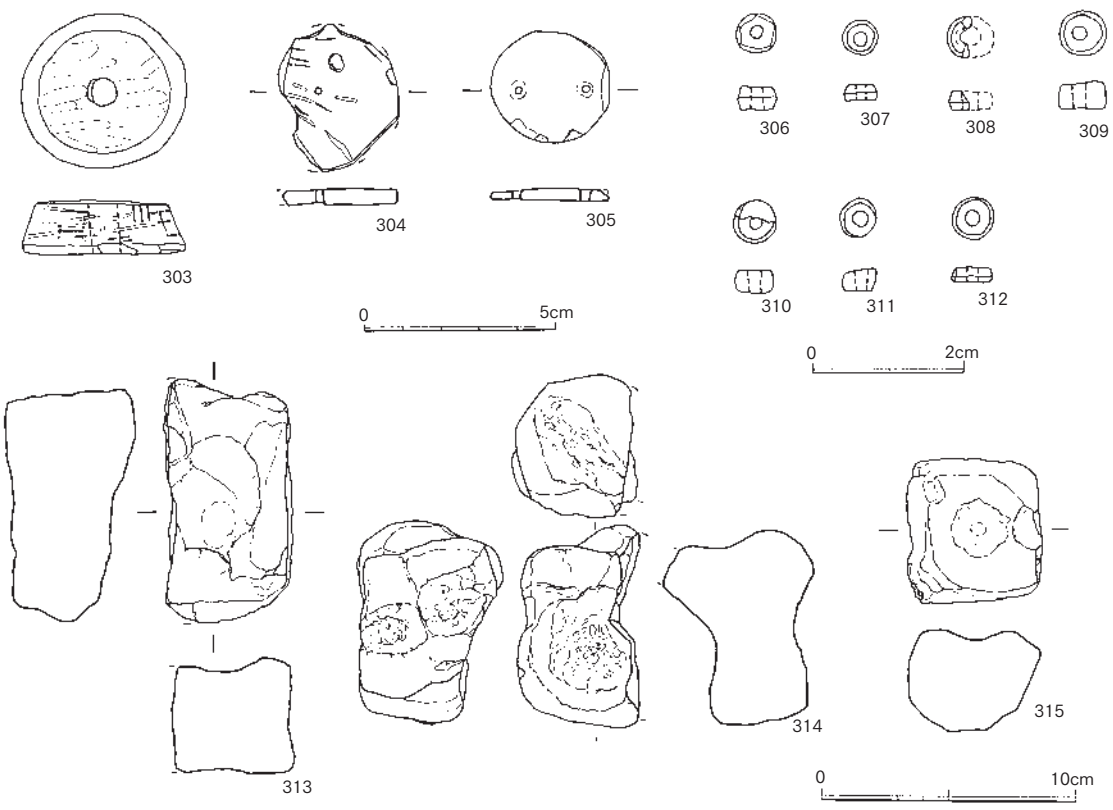


図41 SX003出土石製品実測図 (1/3、1/2、1/1)

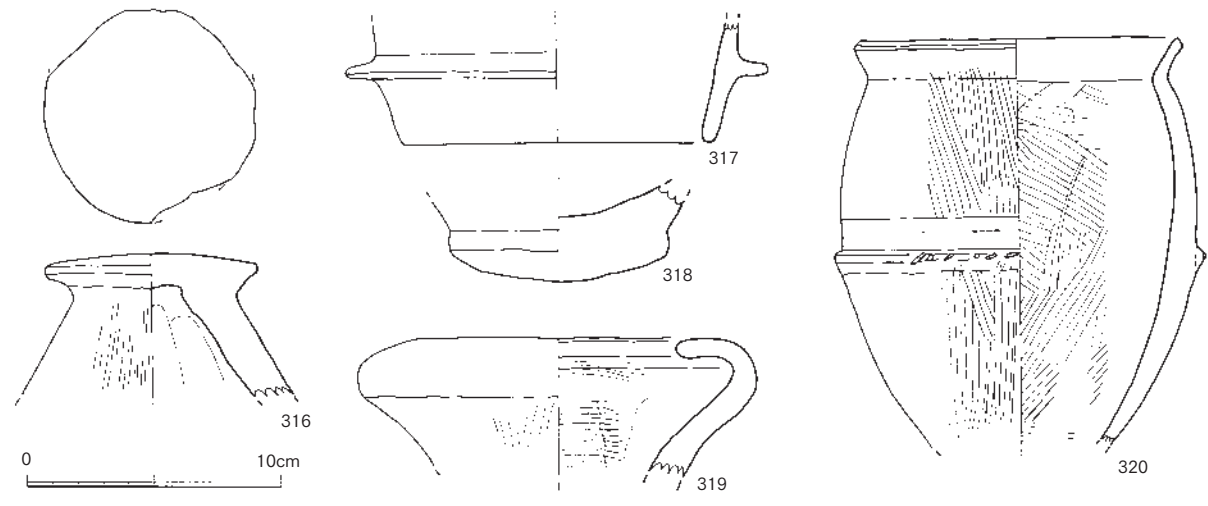


図42 SX003出土そのほかの遺物実測図 (1/3)

		径cm	厚cm	孔径cm	重量g			径cm	厚cm	孔径cm	重量g			長×幅×厚cm	重量g		
303	C7	4.4	1.4	0.8	24.8	308	C2	0.49	0.28	0.18	0.05	313	E2	9.6×5.0×4.6	410	316	BC 6
304	C2	3.9	0.43	0.13	9.06	309	D3	0.59	0.38	0.15	0.23	314	B8	8.0×5.1×4.1	378	317	C9
305	D4	3.1	0.32	0.14	5.61	310	D2	0.54	0.29	0.14	0.14	315	C4	6.4×5.5×2.7	173	318	C4
306	C3	0.51	0.32	0.17	0.13	311	D8	0.48	0.32	0.17	0.11					319	C9
307	C3	0.45	0.21	0.15	0.15	312	C8	0.57	0.22	0.15	0.10					320	C5

3. 下層の調査

8層から八女ローム上の最下面までを下層として報告する。調査は8、9、10層を順に掘削し、八女ローム面とそのやや上で遺構SK005とSX008を確認した。遺構、各層の出土遺物の順で記載する。各層については概要、図6の土層図、層序の項でふれている。8層の遺物はごく少量で、9層は主に弥生後期から古墳前期まで、10層は弥生前期までの遺物を含んでいる。

SX003および7層を除去した面では、Bグリッド東側からCDEグリッドに8層が広がり、台地の落ち際斜面上面のAグリッドに10層、Bグリッドに9層が露出した状況で、それぞれの層に特徴的な刻目突帯文、後期土器が見られた。以下の掘削は上層と同じ4mグリッド単位で行い、遺物もグリッド毎に取り上げた。手掘りで掘削した範囲は調査期間の都合上、図43に示した範囲で、その他の調査範囲は八女ローム面の遺構の広がりを確認するために重機で掘削した。

調査区東側のB2からB7グリッドには西側の台地からの落ちが八女ローム層の面としてみられ、南北方向に連なる。最下面では、標高9.1mのコンタ付近から傾斜が緩やかになり、標高9.0m付近からは東へほぼ水平に推移する。この状況は17次調査でも確認されており、広い範囲に及ぶと考えられる。9層の遺物は東側でやや少なくなるものの、調査範囲内では一定量の出土があった。10層ではD5・6、BC7グリッドでは少なくなる。南に隣接する17次調査2区の1トレンチおよび1グリッド（図4）では遺物が出土しておらず、遺物を包含する範囲はこの間までに限られる。掘削中は9層途中から水気をおび、10層では水が溜まる状態で、ローム層が露出する面では溜まった水を汲みながらの作業であった。

八女ローム面はA3・4グリッドでは東へわずかに下がるテラス状（T1）をなし、B5グリッド西

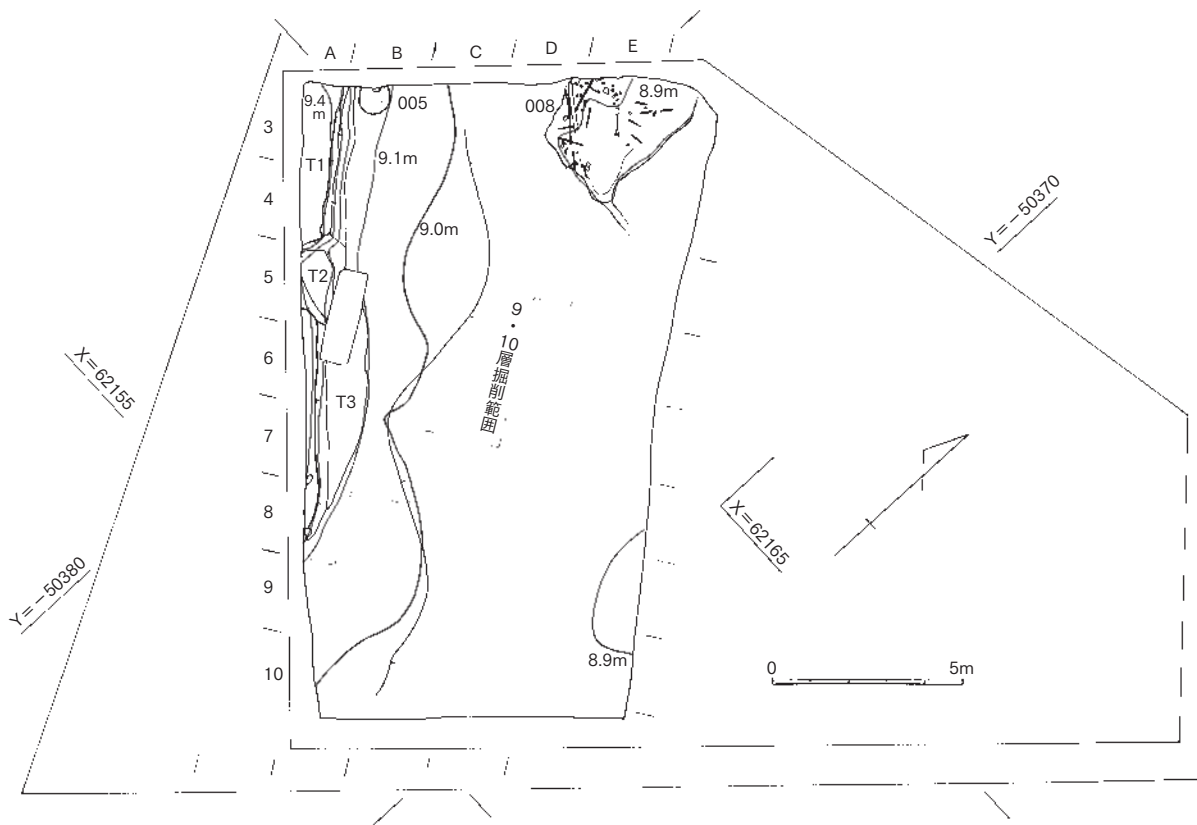
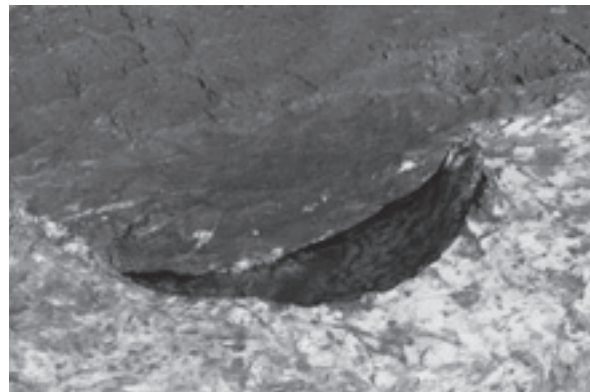
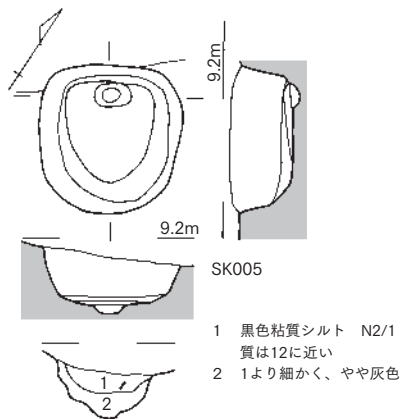


図43 下層遺構実測図 (1/200)

側で南に15cmほど落ち、テラス状 (T2) となる (巻末写真31)。B6~B8グリッドでは、西壁際は斜面でその東側は最大幅1mほどのテラス (T3) をなし、小さな段を経て東側の平坦面となる。T2部分はT1とB6の斜面に挟まれた東西方向の溝またはくぼみ状をなす。またB6から南の西側斜面下端からT3への傾斜の変換は顕著である。これらのテラス状は人為的な成形の可能性もあろう。ただし、足跡、杭などの痕跡は見られなかった。テラスには10層が覆っている

(1) SK005 (図44、45)

B2グリッドの台地斜面の八女ローム上面で検出した土坑である。平面不整形円形で規模は78×75cm、深さ25cmを測り、床面北端に浅いくぼみがある。埋土は黒色の粘質シルトで10層とは不整合で、



Pl.12 SK005土層

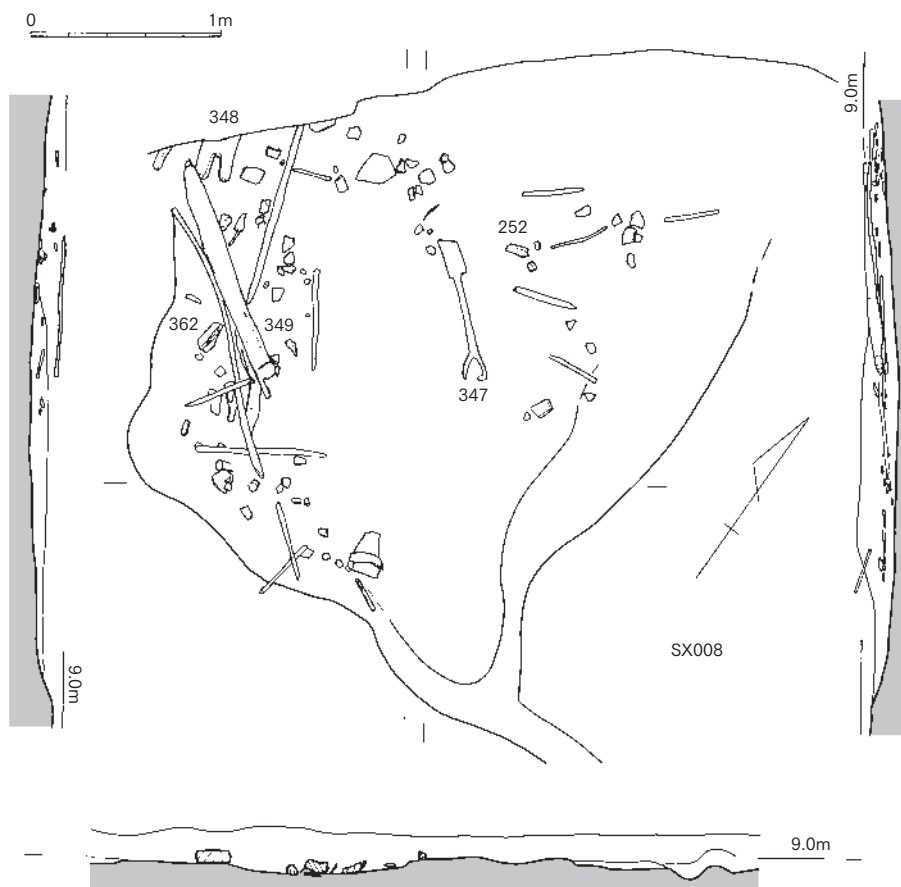


図44 SK005・SX008実測図 (1/40)

10層と比べて有機質を含まず均質で締まる。10層の堆積以前の遺構であることは明らかである。埋土中より刻目突帯文土器が出土した。

340は2条突帯の甕で上部1/4を欠く。口縁部の刻目突帯は一周するが、屈曲部は一部突帯を施さない部分がある。欠けている部分があるためはっきりしないが、およそ1/4ずつ突帯の有無を繰り返すものと考えられる。この突帯がない部分は横方向になでた箇所と器面外面の縦方向の擦痕のままの箇所がある。外面は屈曲部から上はなで、下は縦方向の削りで前調整として条痕の痕跡がみられる。刻目はへら状工具で施し、施文時の痕跡が各刻目の下に見られる。内面は横方向の浅い条痕調整である。341は340に似るが別個体で上部を欠く。刻目突帯文土器と考えられる。342は磨研調整の浅鉢片。343、344は甕の底部だが、341、342とは色調、器壁の厚さが異なり、別個体と思われる。

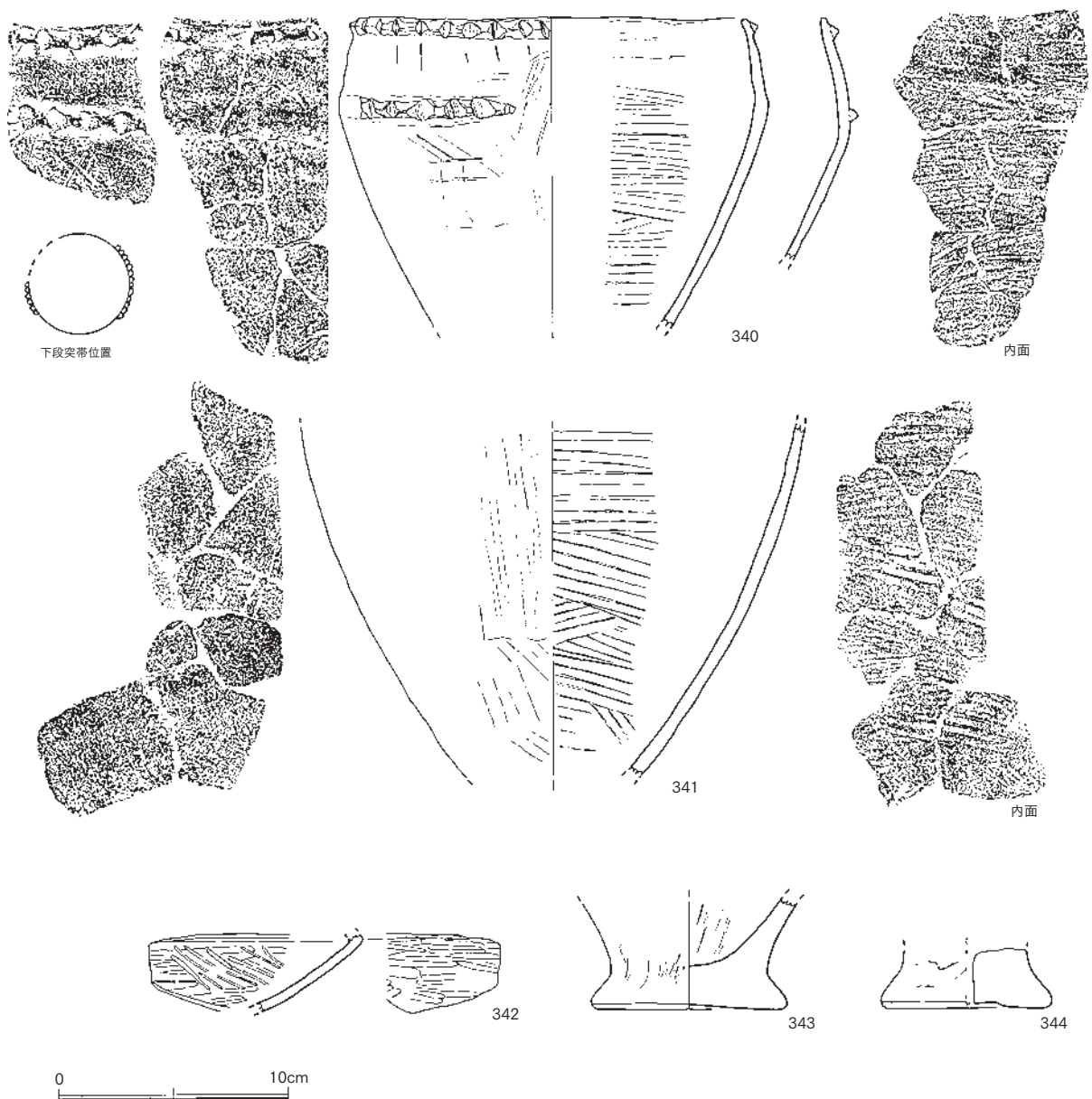


図45 SK005出土遺物実測図 (1/3)

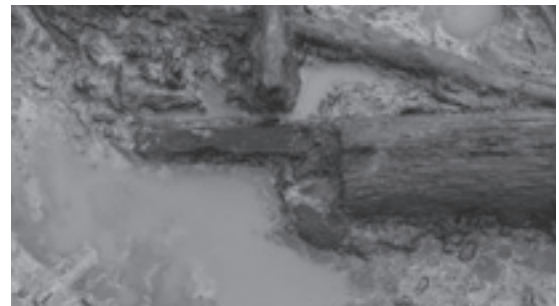
(2) SX008 (図44、46、47)

10層の掘削中、D2グリッドからE2グリッドで木材がやや集中し、周囲に弥生後期の土器が出土した。上層からの掘り込みを想定してプランや土層で確認を行ったが、はっきりとした土の違いを認識できなかった。このことは土層図(図4)にも示している。D2グリッド南側の土層に落ちがあるようにも見えたが不確かである。掘削中はロームの小ブロックを含むことを感じた。上層から手掘りを行ったのは図43のようにE2グリッド西半までで、他は重機で10層相当部分を残して掘削した。図44で示した東西3m、南北3mほどの不整形の浅いくぼみの範囲は八女ローム面で確認したものである。木材は、くぼみの底の西側に集まり、南北方向に横たわる。この中に加工のみられる348や349があり、くぼみ中央には鋤347が出土した。鋤346はE2グリッドの10層掘削中にローム面よりやや上のレベルで出土した(巻末写真30)。ネズミ返し345は重機による掘削中にE3グリッドの八女ローム直上で出土した。くぼみの範囲外であり、SX008堆積が広がる可能性がある。

345はネズミ返しで大きく欠ける。残存長64.6cm、残存幅44.3cmで径約68cmが復元できる。厚さ3.4cm。横木取りの板目材で樹木の又部を利用する。方形孔は図右端が角にあたる可能性があり一片17cmほどの方形が想定される。孔側面は直線的に仕上がる。板目面は両面とも丁寧に調整し、刃部痕は弧状と角状がある。はつり方向は一定ではないが傾向がある箇所もあり、観察できた刃先幅は3cm程度である。346は広鋤で大きく破損する。広葉樹の柁目材である。残存長30.7cm、残存幅10.3cm、最大厚1.1cmを測る。347は一木造りの鋤で広葉樹の柁目取りで全体に摩耗する。残存長76.7cmでそのうち柄部が56.2cmで、鋤部の残存幅8.5cm、柄の厚さ2cmである。348は広葉樹の板目材で残存長75.1cm、幅19.0cm、厚さ5.0cm。全体に摩耗し生きた側面はない。片側にほぞ穴と思われる形状があり、その大きさは8×5cmほどが想定される。その反対側の木口は直線的に揃った部分があり端部の可能性がある。また厚みも薄く矢板状に加工している可能性がある。349は広葉樹の半裁材で、板目面は炭化し、表面側も多くが黒ずむ。存長94.2cm、最大径9.7cmを測る。片方の端部をのみ加工で成形し一部板状に仕上げ半裁面も平滑に調整する。この板状部の片側には幅2.5cm、厚さ1.2cmの断面扁平長方形の突起部を作り出す。取り上げ以降の破損で接合しないためおよその位置に図示した。



PI.13-1 SX008 北から



PI.13-2 SX008 349



PI.13-3 SX008 347から

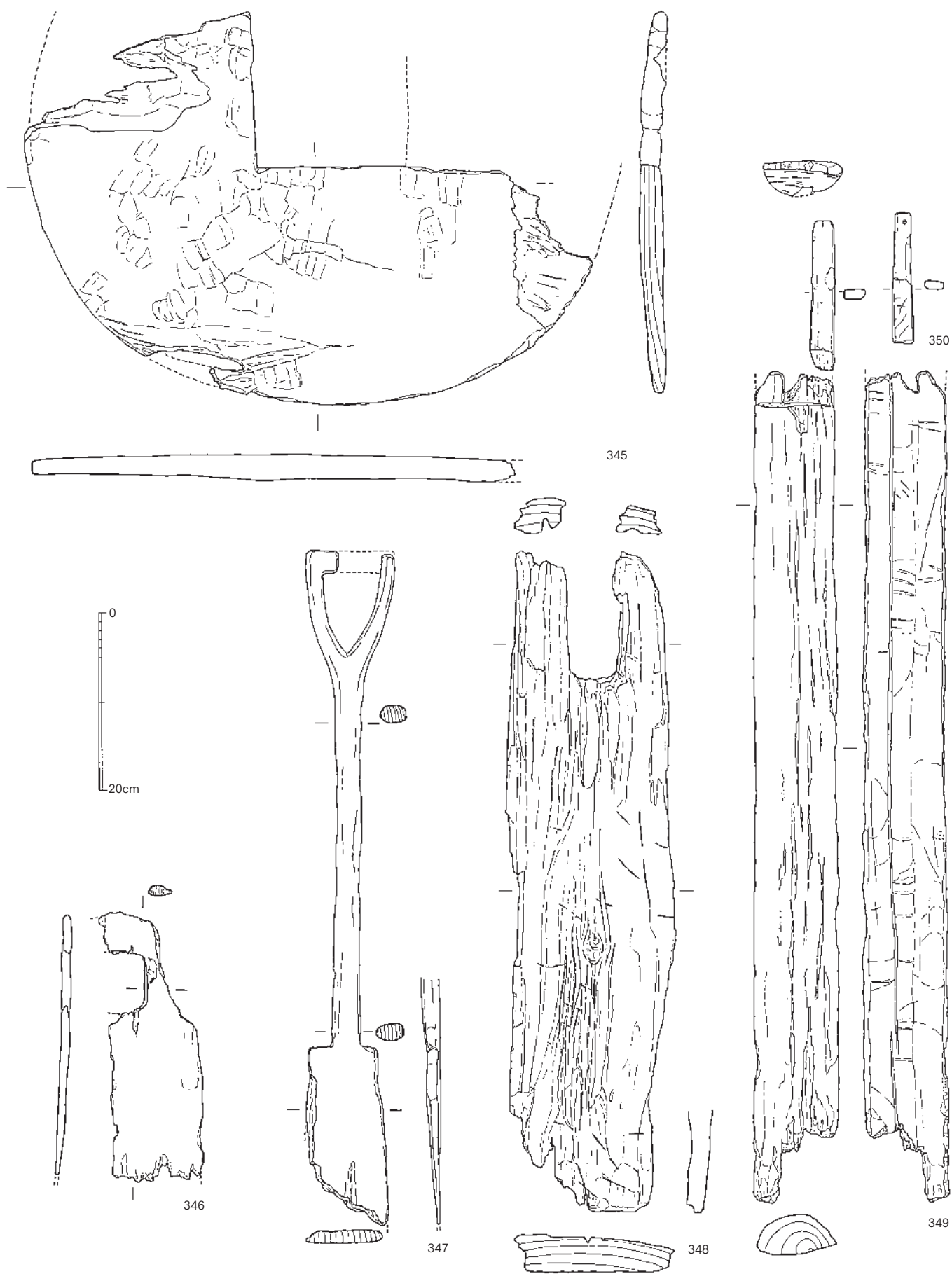


图46 SX008出土木製品実測图 (1/6)

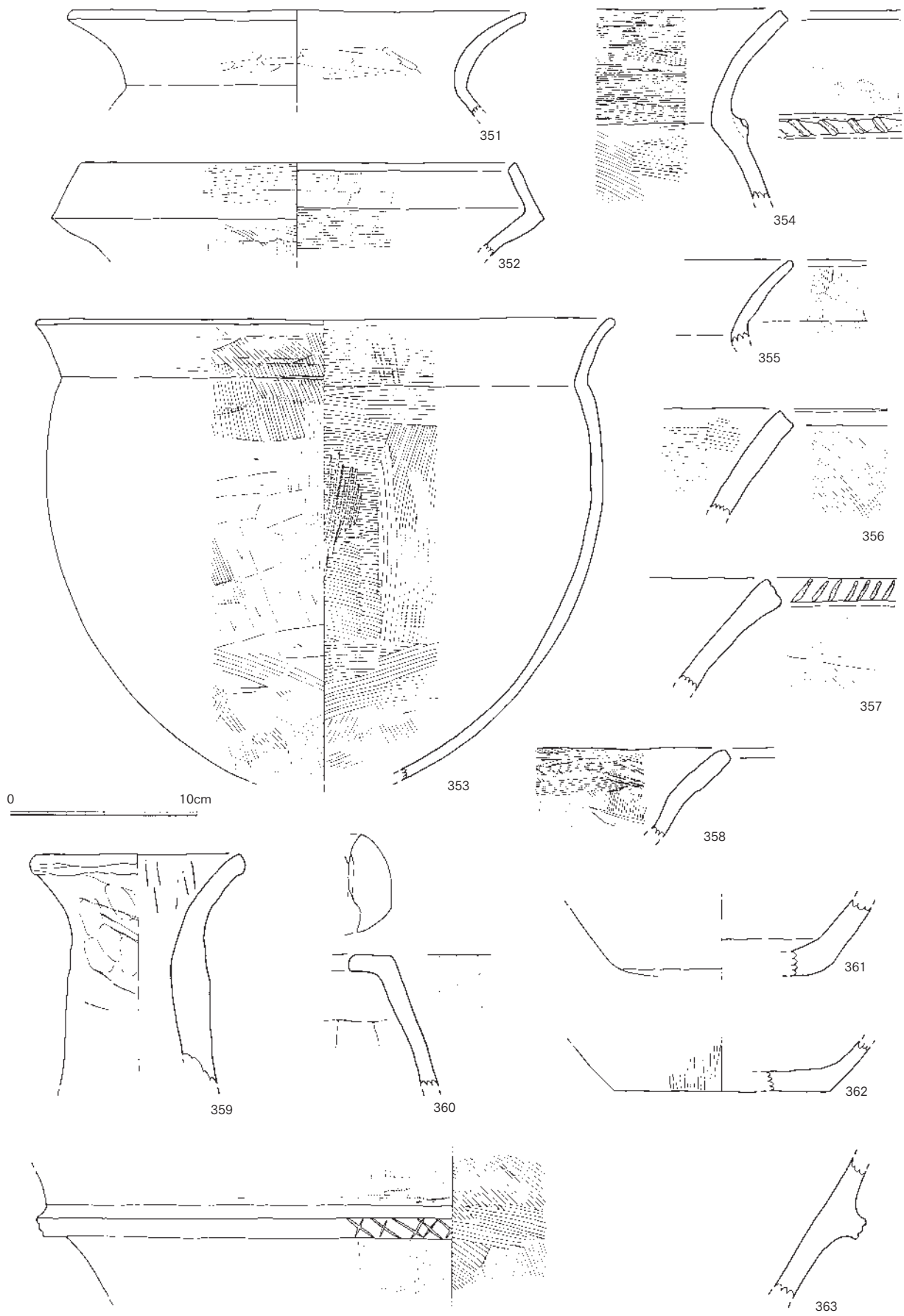


图47 SX008出土遺物実測図 (1/3)

端部から15cmほどで1.5～4.5mmの段を成して下がり、本体の板状部に連なる。構造物のうち水平部分か。350は349の突出部と同様の形状で349の一部の可能性はある。端部から1cmに径2mmほどの孔を端部と反対側にやや斜めに穿つ。これらの外に、径3cmほどの枝の先を加工したものがあり、加工がみられない同様の枝片が出土した。

土器類は破片が散らばる。任意のまとまりごとに取り上げた。いずれも破片である。351は大きく外湾する甕で内外面の頸部に工具によるなでの痕跡がみられる。1/6からの復元。352は複合口縁部で刷毛目が残る。353は「く」の字口縁の鉢状の甕で1/6からの復元。内外面の刷毛目が明瞭で、器面は固い。354から358、363は「く」の字口縁の大型甕である。357は口唇部に木口による刻目を施す。359は器台、360は支脚か。361、362は底部で361がやや丸みをおびる。後期前半。このほかに軽石5cm、6cm大の軽石2個がある。

(3) 下層出土遺物

8・9層出土遺物：土器類（図48～51） 8層はBグリッド東端より7層の下に広がる。上下の層より暗く黒色を呈し、層厚5～10cmほどである。遺物は土師器、弥生土器の破片のみが少量で、弥生後期、古墳前期までの遺物がみられる。SX003の下部でつぶれた状態の土器数個体が8層に沈む状態で出土したが、SX003の遺物として取り上げ、図を掲載した（46、88、89、90、91、143、153、177、179、180）。これらが8層堆積時の遺物である可能性はある。この他の小片については図化していない。

9層はBグリッドから東側に広がる包含層で、特にBグリッド中央部を5cmから10cm下げた段階で南北の帯状に土器片が集中して出土した。弥生後期に台地落ち際に9層の傾斜が緩まる部分と考えられる。この部分をSX004として取り上げた（巻末写真25）。

図48はSX004の遺物。弥生中期の土器を主体に後期までの土器が出土した。破片のみで器面は荒れる。364から370は須玖式の甕、370は赤色顔料の痕跡がある。371は同じく小型の壺。372は外反する大型の甕、373は大きく外湾する甕、374、375は複合口縁部で後期前半。376は台付きの鉢状で指頭痕が著しい。377は支脚、378は器台、底部379、380はやや丸みをおびる。

381から407は刻目突帯文期から弥生前期までの土器。381から386は刻目突帯文土器。387は外反口縁の甕。388から395は壺で388、389は夜白系で他は口縁部外面肥厚する板付系である。396は高坏基部、397から399は浅鉢。400から405は断面台形の底部で、400、404は壺、他は甕か。406、407は大型の壺の底部である。

408から426は弥生中期の土器。408から418は須玖式の甕。408は内面最上部に赤色顔料が残り外面は器面剥落する。409は外面が黒く黒塗りか。416は立岩式の丸みのある甕棺で1/4からの復元。418は所々に赤色顔料がみられる。419は鉢で1/4から復元。420から422は壺。420は外面と内面頸部に、423は外面と内面上端に赤色顔料を施す。424は高坏、425は器台、426は甕の底部である。遺物は中期が主体である。

427から443は弥生後期以降の土器。427、428は布留式の口縁部で出土例は少ない。9層の下限か。いずれも上部の出土。429から432は甕。432は複合口縁か。433は袋状口縁、434は複合口縁である

435、436は大型の甕の肩部で台形突帯をめぐらす。437、439はその胴部突帯部で、木口で「×」を刻む。438は三角突帯3つがみられる。440、441は支脚と思われる。440は外面叩きで内面がなで上げる。径が大きい。442は丸底、443はレンズ底に近い。

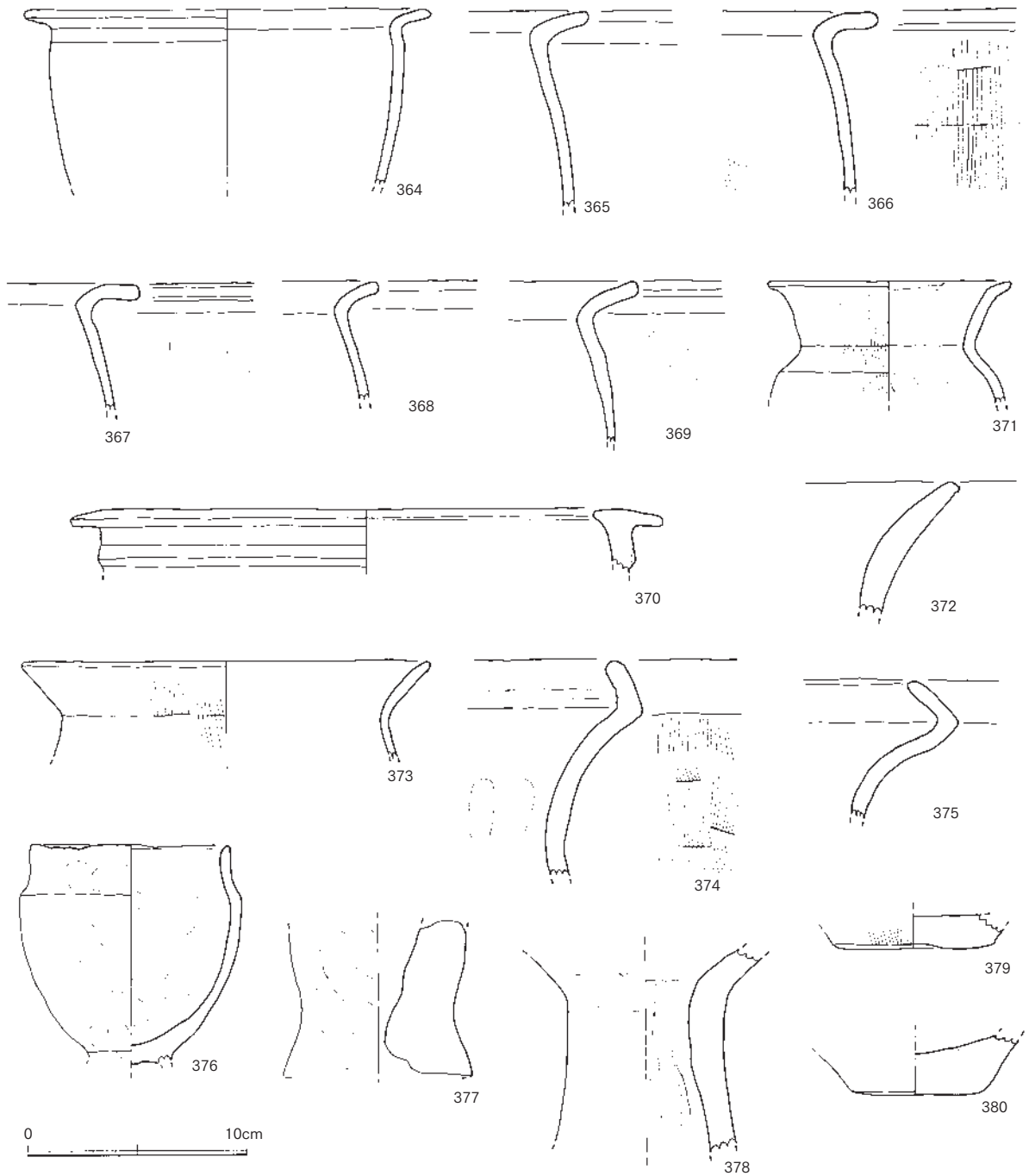


图48 9層SX004出土遺物実測図 (1/3)

364	BC4	004	374	B4	004	384	B4	9層下部	394	B4	9層下部	404	C5	9層下部	414	B4	9層上部
365	C4	004	375	B7	004	385			395	B3	9層上部	405	C8	9層	415		9層
366	BC4	004	376	B2·3	004	386	D5	9層	396	B8	9層	406	C3	9層	416	C7	9層
367	C4	004	377	B4	004	387	C8	9層	397	D2	9層下部	407	B3	9層	417	B3	9層上部
368	B4	004	378	B4	004	388	C3	9層下部	398	D2	9層中-下	408	D2	9層下部	418	C7	9層
369	BC4	004	379	B4	004	389	B3	9層	399	B3	9層上部	409	D4	9層上部	419	B2	9層下部
370	C4	004	380	B4	004	390	B3	9層下部	400	B5	9層下部	410	C4	9層下部	420	C3	9層下部
371	BC4	004	381	C6	9層上部	391	B5	9層	401	C5	9層下部	411	C6	9層上部	421	C6	9層下部
372	B2·3	004	382	B4	9層上部	392	D2	9層下部	402	C7	9層	412	B4	9層	422	C2	9層上部
373	B7	004	383	D5	9層上部	393	C6	9層上部	403	B2	9層下部	413	C5	9層	423	BC6	9層

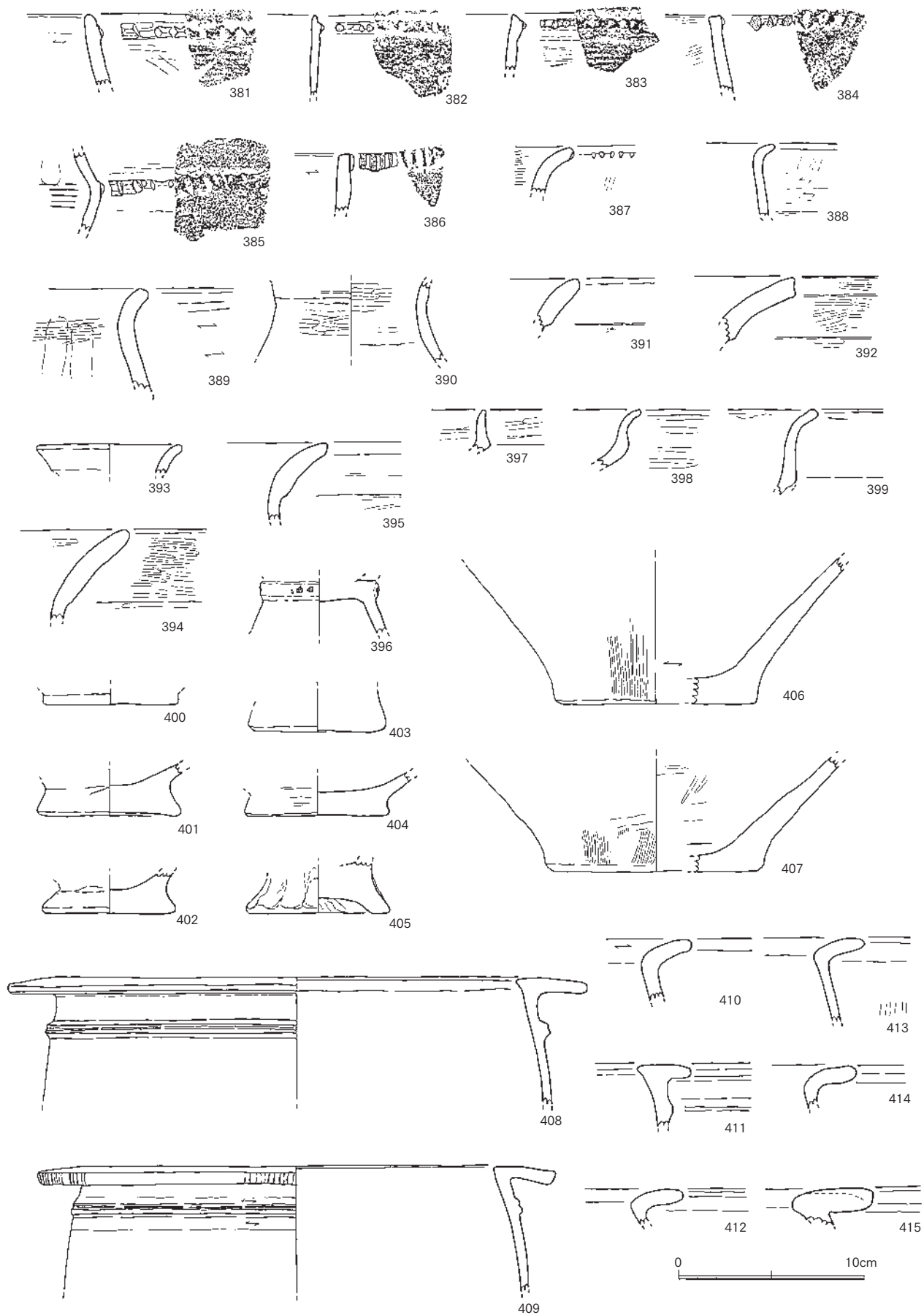


图49 9層出土遺物実測图1 (1/3)

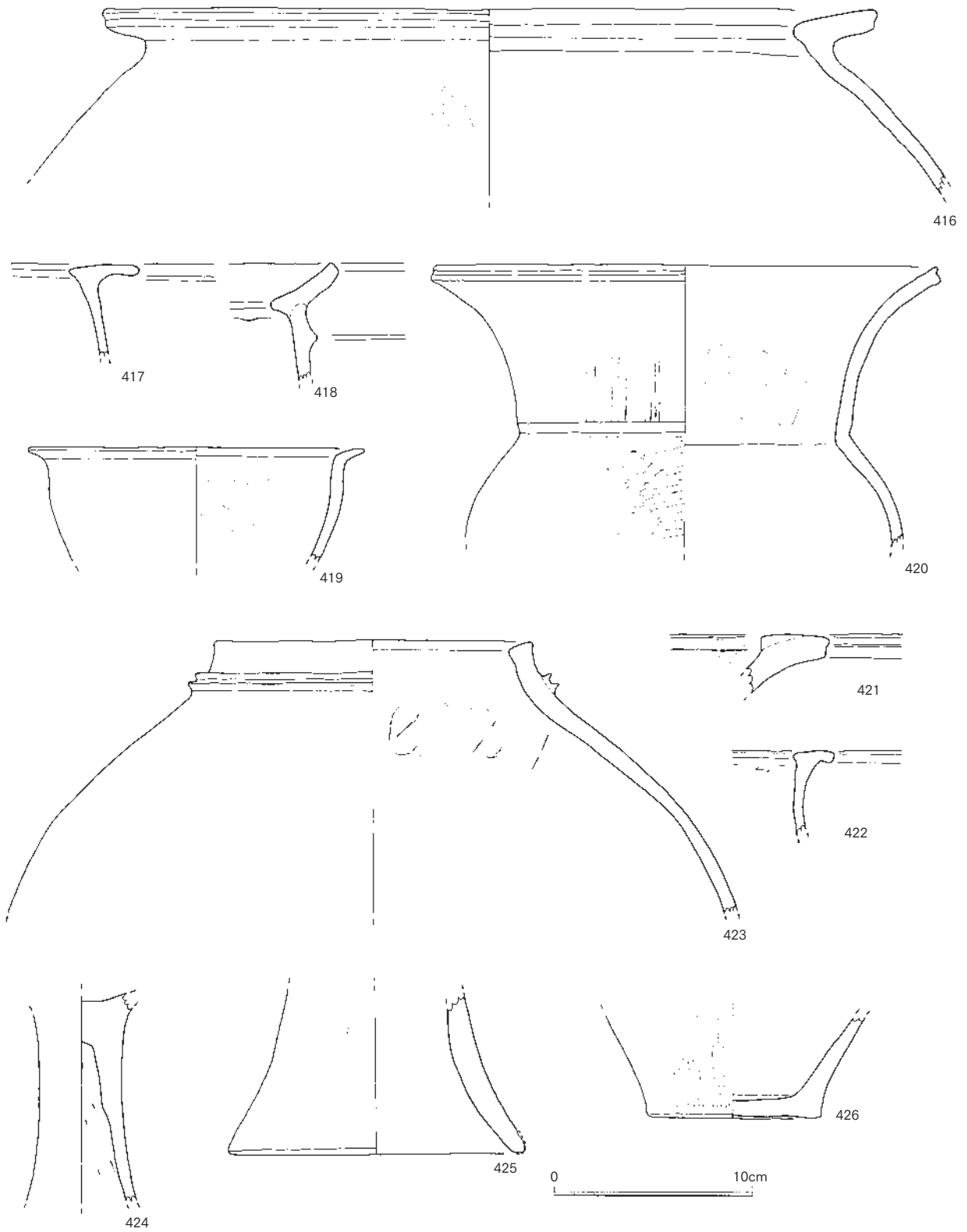


图50 9層出土遺物実測図2 (1/3)

424	C8	9層	427	D6	9層上部	430	C3	9層	433	B3	9層上部	436	C10	9層	440	D2	9層中-下
425	B7	9層	428	B3	9層上部	431	C3	9層	434	C5	9層上部	437	C5	9層下部	441	C5	9層
426	C4	9層下部	429	B3	9層上部	432	D4	9層上部	435	C3	9層下部	438	C3	9層	442	C3	9層
												439	D2	9層下部	443	B8	9層



图51 9層出土遺物実測图3 (1/3)

10層出土遺物：土器類（図52～55） 451から472は刻目突帯文を施す甕で9層よりも出土数、比率が大きい。内湾する451や指頭施文の452などの古手のものから471から472などの浅い刻みや刷毛目調整を行う後出するものまで幅がみられる。473は口唇部を面取りし外面に刻目を施す。474から497は外反する口縁の甕で多くに刻目を施す。板付Ⅰ、Ⅱ式。474、475は外反がわずか。476から485は口唇部全面に刻み目を施す。486以降の口唇部刻み目を施すものは下端である。498から500は大小の突帯を付し小さな刻目を施す。いずれも10層最下部での出土で500は前期末から中期初頭に位置付けられよう。501、502は須玖Ⅰ式の甕で501は最下部からの出土。この時期とわかる遺物は他に537がある。

503から527は壺形の土器。503から510は口縁部の外反が弱い夜臼系で、それ以下は板付系である。507にはわずかに橙色の器面が残る。512から516は口縁部外面を肥厚する、やや大型品であろう。517、518は前期末から中期初頭である。519から522は沈線による施文、523、526は木口による綾杉文を施す。524は接する2条の弧状の浮文を貼付する。525から527はC4の底でまとまって出土した。525は広口の口縁だが胎土は前期的。526は内外面に研磨、なでの痕跡が残る。527は器壁が荒れ気味で、円盤状の底部は古手で526とは胎土等から別個体と考える。526は厚手の器壁に研磨を施す。529から533は浅鉢、534、535は磨研調整で鉢か。536は高坏で突帯がめぐるが3/4は剥げる。537は高坏で中期。538から550は主に断面台形の甕の底部。538は条痕が顕著である。551から553は底部が直線的に広がる甕の底部。554から560は円盤状底部の壺または浅鉢の底部、561、562は大型壺の底部である。554から556には木葉痕がみられる。

土製品ほか（図56） 563、564は9層、他は10層出土。563は投弾で全面なで仕上げ。564から568は紡錘車で厚手と薄手のものがある。568は表裏面に線刻による同じような意匠を施し、側面にも沈線がめぐる。1/4ほどの破片で復元径は6cm強と大型になる。569は緑色片岩の円盤で、器面に擦痕がみられる。形状からここで示した。

石製品（図57、58） 図57に9層、58に10層出土の礫石器を図示した。571、572は上層の出土だが明らかに下層の時期でありここに示した。571は柳葉形の磨製石鏃で断面菱形で厚い。572は小豆色泥岩の石包丁。573は滑石片で浅い稜の両側で方向の異なる擦痕がみられる。574は緑色片岩製で刃部が内湾する。鎌か。575は層灰岩の扁平石斧で両刃である。576は敲打痕が残る破片で石斧か。頁岩起源のホルンフェルス。577はホルンフェルスで表裏面は剥がれ、図上部と側面に磨いた面が残る。578は珪化木で一部に磨きがみられる。579は滑石製の勾玉。両側からの穿孔痕がみられる。580は表面を磨いたホルンフェルスの側面を叩き石とする。石斧の再利用。581は側面加工で方形に成形する。外面は未加工。頁岩質のホルンフェルス。582は層灰岩の破片で磨研を施した2側面が残る。583は礫岩の側面に抉り状の成形をする。錘か。584、585は砂岩製の石皿。584は表裏面が使用により平滑で、1側面も一部平滑になる。585は図上面の磨研が顕著で砥石の可能性もある。

451	C7	10層下部	456	B3	10層床上	461	C6	10層下部	466	D3	10層上部	471	C5	10層下部	476	D3	10層上部
452	B4	10層	457	C2	10層下-床	462	D5	10層下部	467	B4	10層	472	B4	10層床上	477	C8	10層
453	C4	10層下-床	458	B3	10層床上	463	D3	10層上部	468	D3	10層下部	473	C3	10下-床	478	D6	10層上部
454	C3	10層下-床	459	C2	10層床	464	C7	10層下	469	C7	10層下部	474	C7	10層下部	479	C5	10層上部
455	B7	10層下部	460	C5	10層上部	465	B6	10層床上	470	C4	10層上部	475			480	C7	10層下部
															481	C4	10層下-床



图52 10層出土遺物実測图1 (1/3)

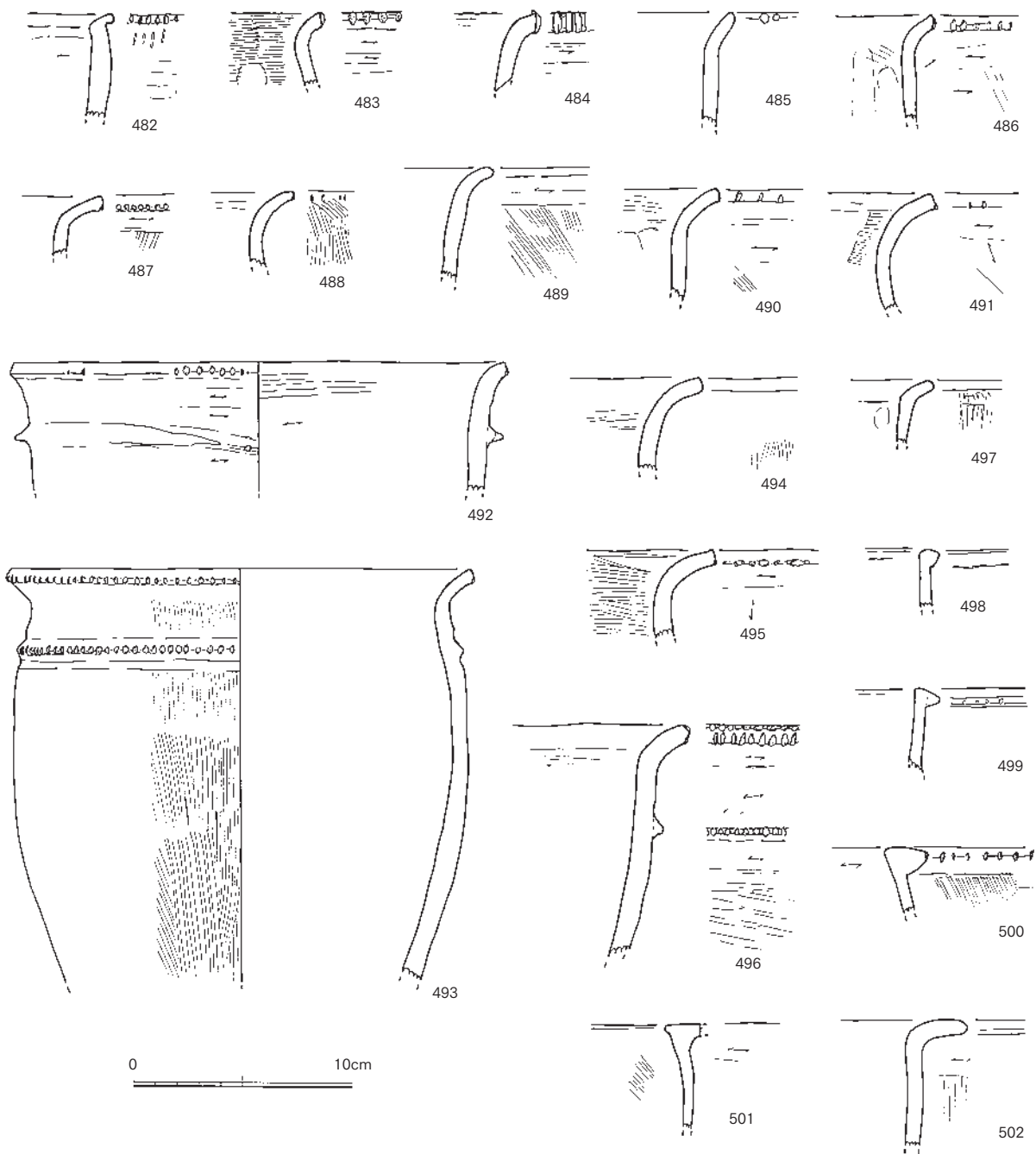


图53 10層出土遺物実測図2 (1/3)

482	C5	10層下部	490	D3	10層下部	498	C2	10層下-床	506	B7	10層上部	514	B5	10層	522	A3	10層
483	C7	10層下部	491	C6	10層下部	499	C3	10層下-床	507	D6	10層上-9層下	515	D6	10層床上	523	C4	10層
484	C3	10層下-床	492	C6	10層上部	500	C7	10層下	508	C7	10層上部	516	C4	10層上部	524	C7	10層下部
485	D6	10層下-床	493	B4	10層床上	501	B3	10層床上	509	B3	10層床上	517	C3	10層下-床	525	C4	10層床上
486	C6	10層下部	494	C6	10層下部	502		10層上-9層下	510	A3	10層	518	C7	10層下部	526	C4	10層床上
487	C3	10層下-床	495	D3	10層下部	503	B5	10層	511	C3	10層下-床	519	D5	10層下部	527	C4	10層床上
488	C3	10層下-床	496	B10	10層下部	504	C7	10層下部	512	D4	10層下	520	D3	10層上部	528	B4	10層床上
489	C2	10層床上	497	B3	10層床	505	C5	10層下部	513	C5	10層下	521	D5	9層上部			

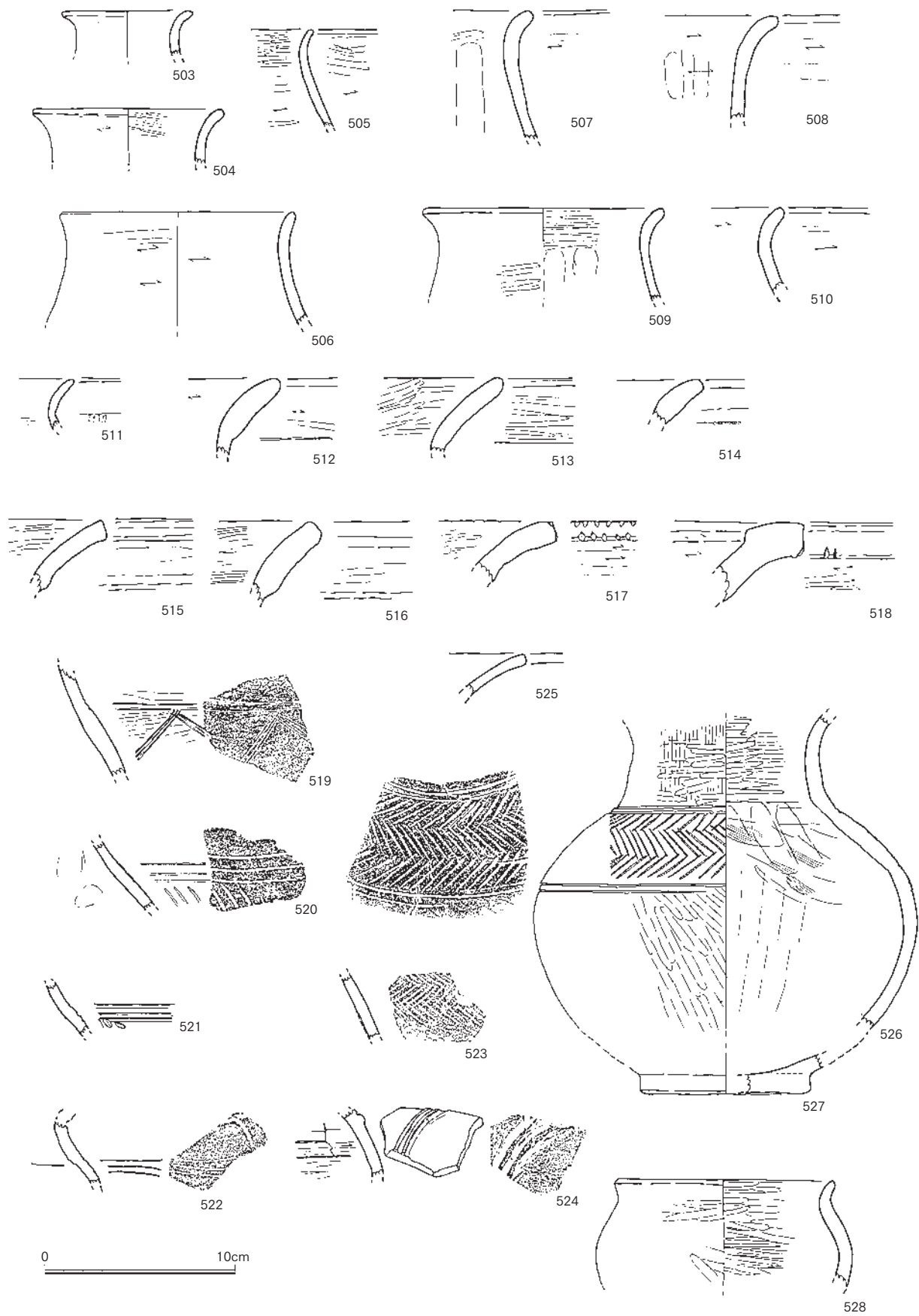


图54 10層出土遺物実測图3 (1/3)

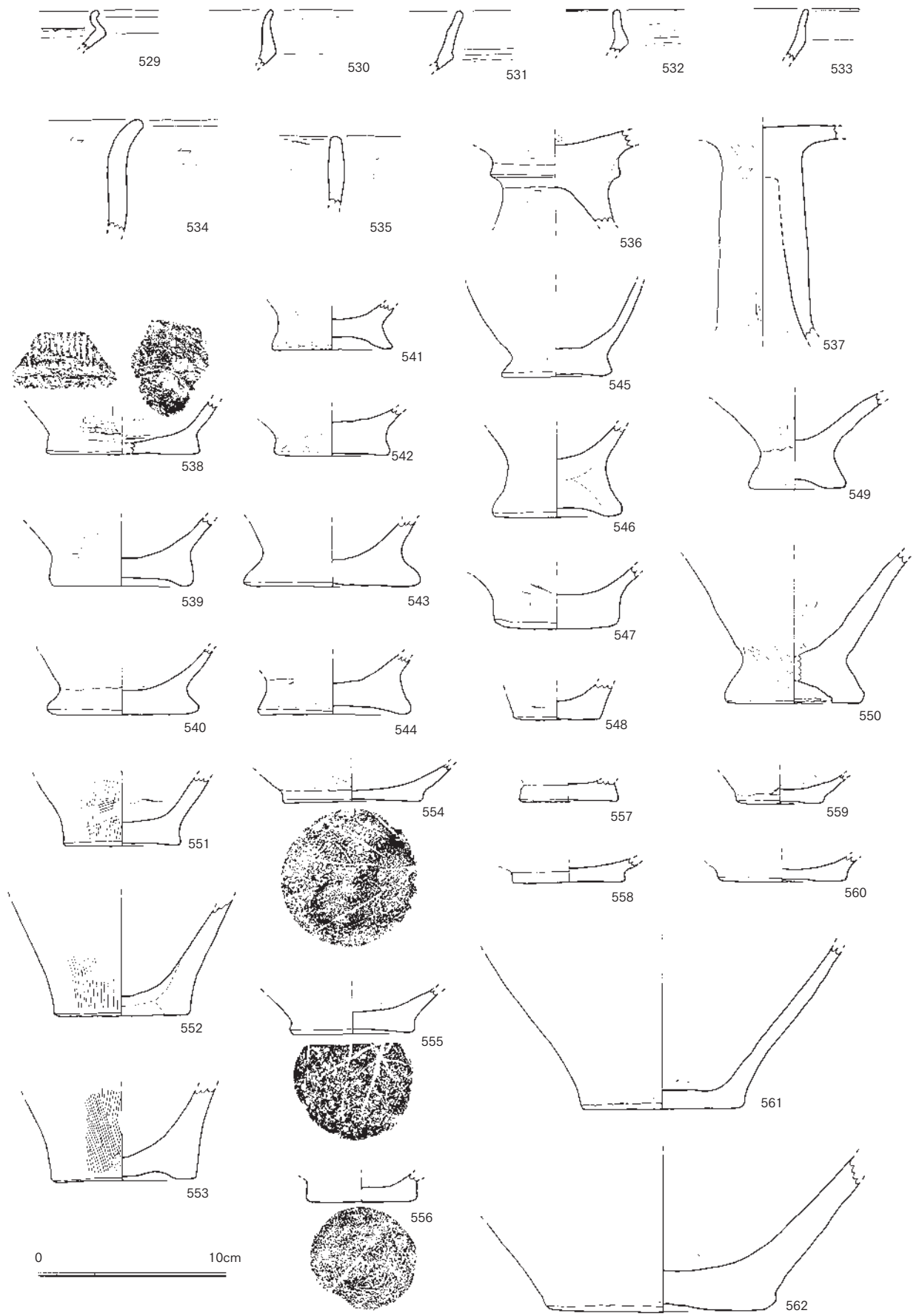


图55 10層出土遺物実測图4 (1/3)

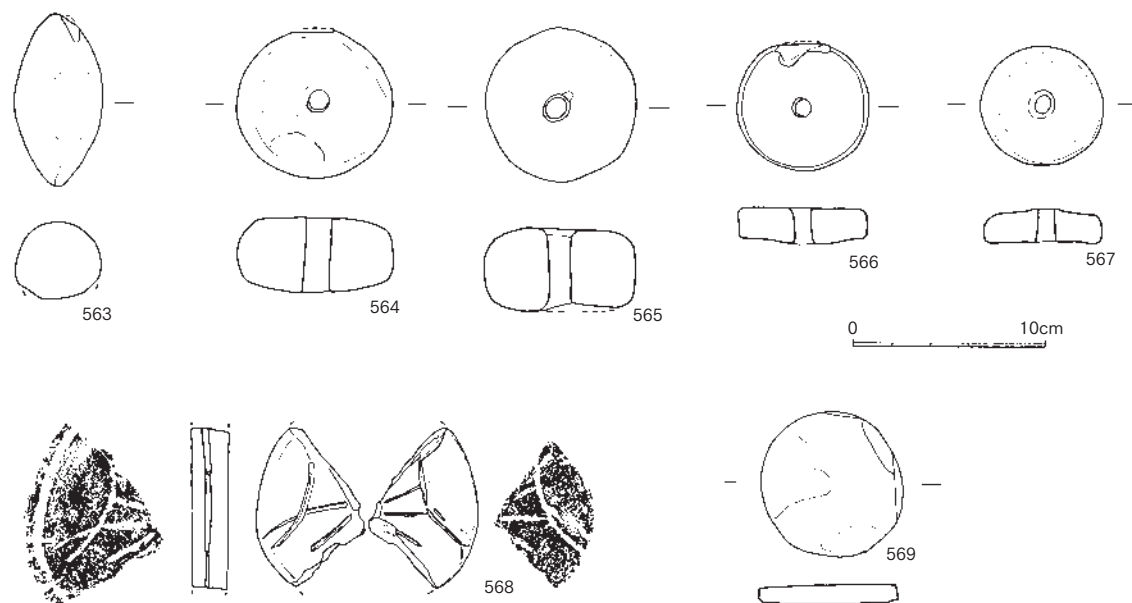


図56 9・10層出土土製品・石製品実測図（1/2）

529	C4	10層下部	538	C3	10層下-床	547	C3	10層下-床	556	D3	10層下部
530	D6	10層上部	539	D3	10層下部	548	C2	10層下-床	557	B10	10層下部
531	C3	10層下-床	540	C2	10層下-床	549	B8	10層	558	C3	10層下-床
532	D5	10層下部	541	D5	10層上部	550	D4	10層下部	559	C5	10層下部
533	D6	10層下-床	542	D3	10層下部	551	C7	10層下部	560	C7	10層下部
534	C5	10層上部	543	B5	10層	552	C7	10層下部	561	D5	10層上部
535			544	B4	10層下-床	553	B5	10層	562	B5	10層
536	B3	10層	545	C3	10層下-床	554	B3	10層床上			
537	E2	10層上部	546	B3	10層床上	555	C4	10層下-床			

				長・径cm	厚cm	孔径cm	重量 g
563	C2	9層下部	投弾	4.5	2.3		15.1
564	C2	9層下部	紡錘車	4.1	2.0	0.6	37.66
565	C2	10層下部	紡錘車	4.0	2.2	0.7	37.49
566	C4	10層上部	紡錘車	3.5	1.0	0.5	12.83
567	D3	10層下部	紡錘車	3.2	0.9	0.4	10.07
568	D3	10層下部	紡錘車	(6)	1.0	(0.6)	13.67
569	C4	10層下部	石製円盤	3.7	1.0	0.5	13.27

586から592は10層出土。586は頁岩製の石包丁片。587は板状の頁岩を成形し浅く穿孔痕と思われる跡が残る。石包丁未成品か。588は鋭角の刃部を持つ大型の鎌で、器面を平滑に磨くが残存部はわずかで意図的と思われる破壊を行う。固い泥岩質。589は泥岩質の大型の片刃石斧基部と考えられる。直線的な一面を平滑に研磨し、他は敲打痕が残る。590は590から592は砥石で592までは砂岩、593は泥岩。594は上面SX003で出土した蛇紋岩製の磨製石斧で巻末写真15、図12に出土状況をしめした。

この他に9層から薄手の石皿2点、一部使用による平滑面がみられる礫片が9、10層で5、6点ある。石材は砂岩、泥岩質。花崗岩質と玄武岩の叩き石が各1点。火成岩の丸石も出土し磨研具や投弾としての使用もあろう。やや扁平な段円形礫も見られる。9、10層では滑石は確認していない。

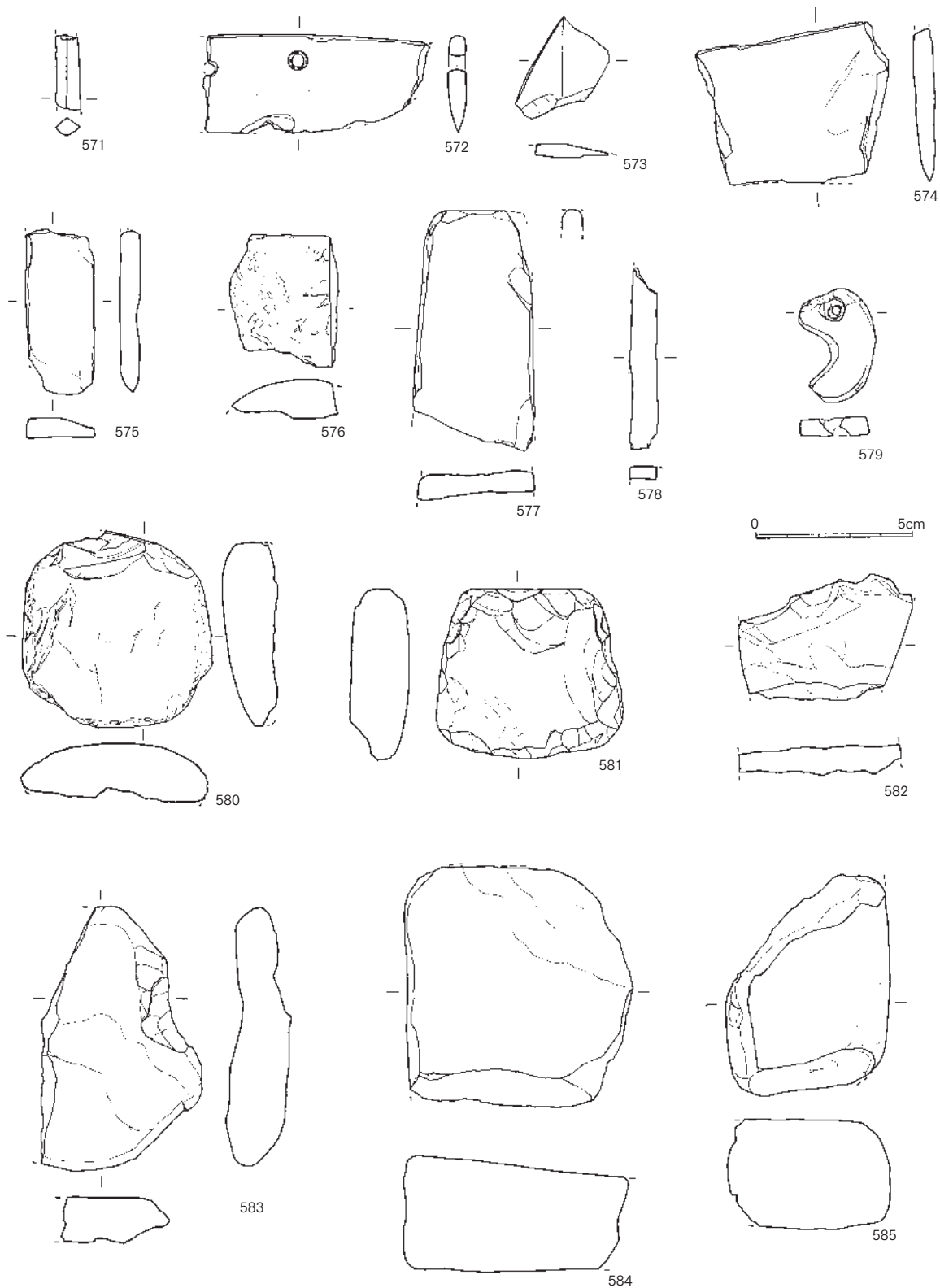


図57 9層出土石製品実測図 (1/2)

					長×幅×厚cm	重量 g					長×幅×厚cm	重量 g	
571	D10	003	磨製石鏃		2.5×0.8×0.6	1.55	575	D2	003	扁平石斧	層灰岩	5.4×2.2×0.65	15.99
572	D2	003	石包丁	小豆色泥岩	7.2×3.2×0.6	21.81	576			石斧片	頁岩質	4.3×3.5×1.3	24.23
573	C4	9層		滑石	3.2×2.1×0.45	4.36	577	C6	9層上部	石斧片?	ホルンフェルス	7.3×3.9×0.8	38.72
574	D6	9層上部	石鎌	緑色片岩?	5.8×4.8×0.7	36.15	578	C5	8層		珪化木	5.9×0.9×0.45	4.61

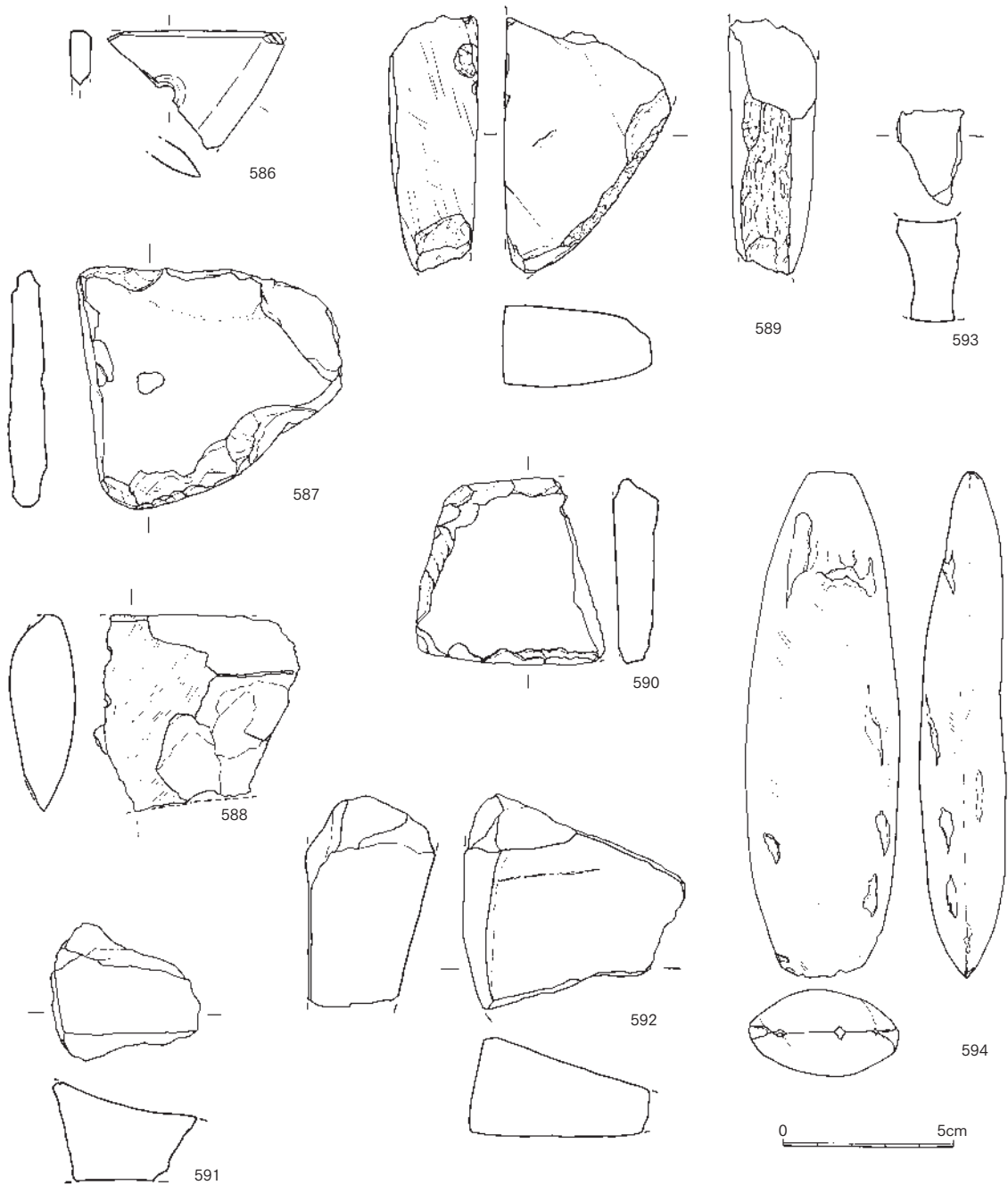


図58 10層出土石製品実測図 (1/2)

					長×幅×厚cm	重量 g					長×幅×厚cm	重量 g	
579	C6	9層下部	勾玉	滑石	3.7×1.8×0.6	10.69	587	C6	10層上部	石包丁末	頁岩質	7.7×7.1×1.08	88.42
580			叩石	ホルンフェルス	6.1×6.3×1.7	106.56	588	C6	10層下部	石鎌	泥岩質	5.8×5.8×1.8	71.2
581	B2・3	9層004	叩石	頁岩質	5.4×6.0×1.85	108.0	589	B2	10層下-床	柱状片刃石斧	泥岩質	7.3×4.8×2.35	123.94
582	C2	9層上部	柱状石斧?	層灰岩	3.7×5.7×0.9	23.91	590	D4	10層下部	砥石	砂岩	5.4×5.5×1.3	64.4
583	B3	9層上部	石錘	礫岩	8.5×5.1×0.9	98.21	591	C2	10層下-床	砥石	砂岩	4.1×4.0×3.0	41.44
584	B3	9層下部	石皿	砂岩	7.7×7.3×3.7	337.39	592	C6	10層上部	砥石	砂岩	6.5×6.1×2.8	130.32
585	D5	9層	石皿	砂岩	6.8×5.2×3.5	182.26	593	B3	10層下-床	砥石	砂岩	1.8×2.8×3.0	16.81
586	C4	10層下部	石包丁	頁岩質	3.4×5.2×0.6	13.32	594	C6	003	磨製石斧	蛇紋岩	14.9×4.5×2.6	262.53

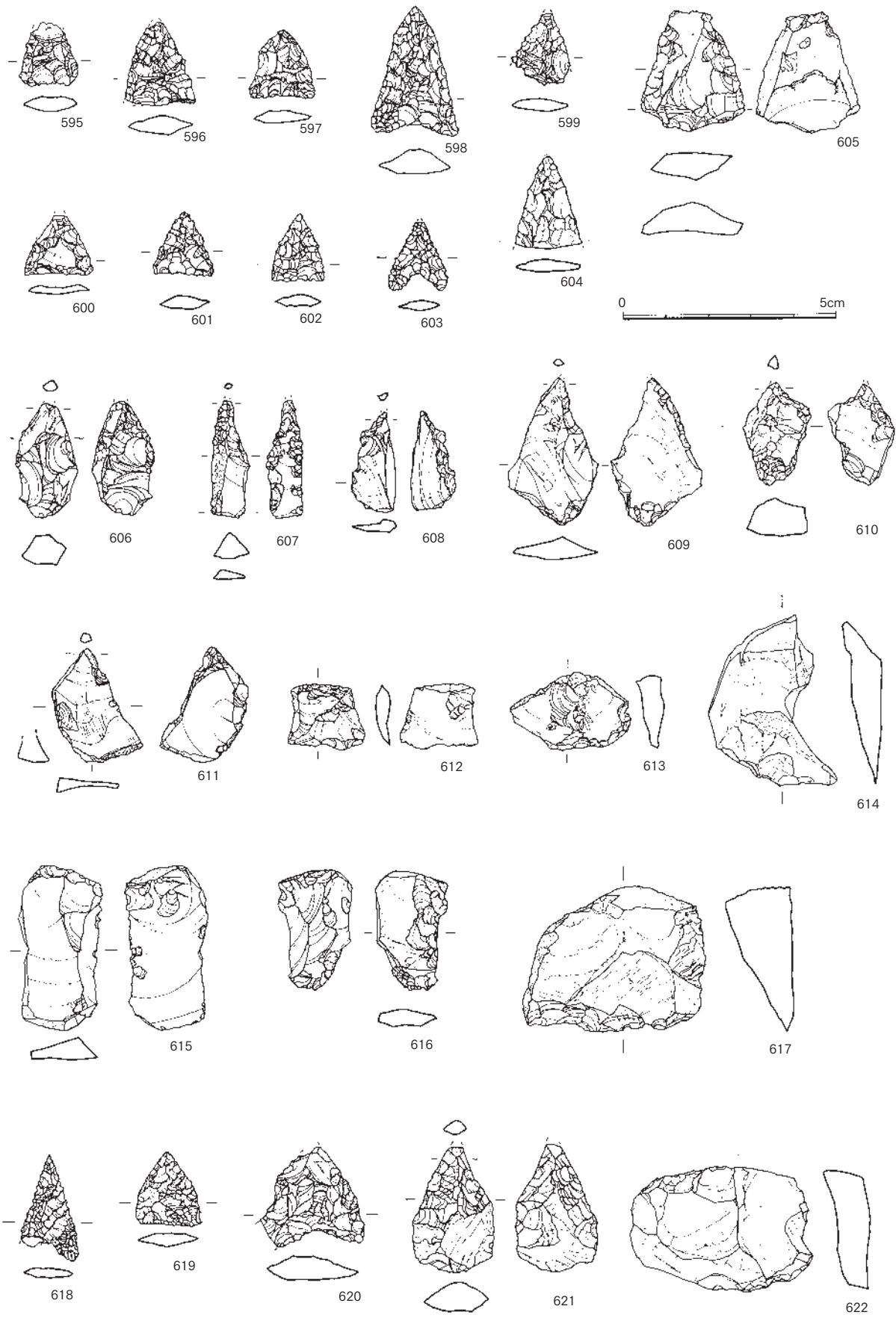


图59 剥片石器实测图1 (3/4)

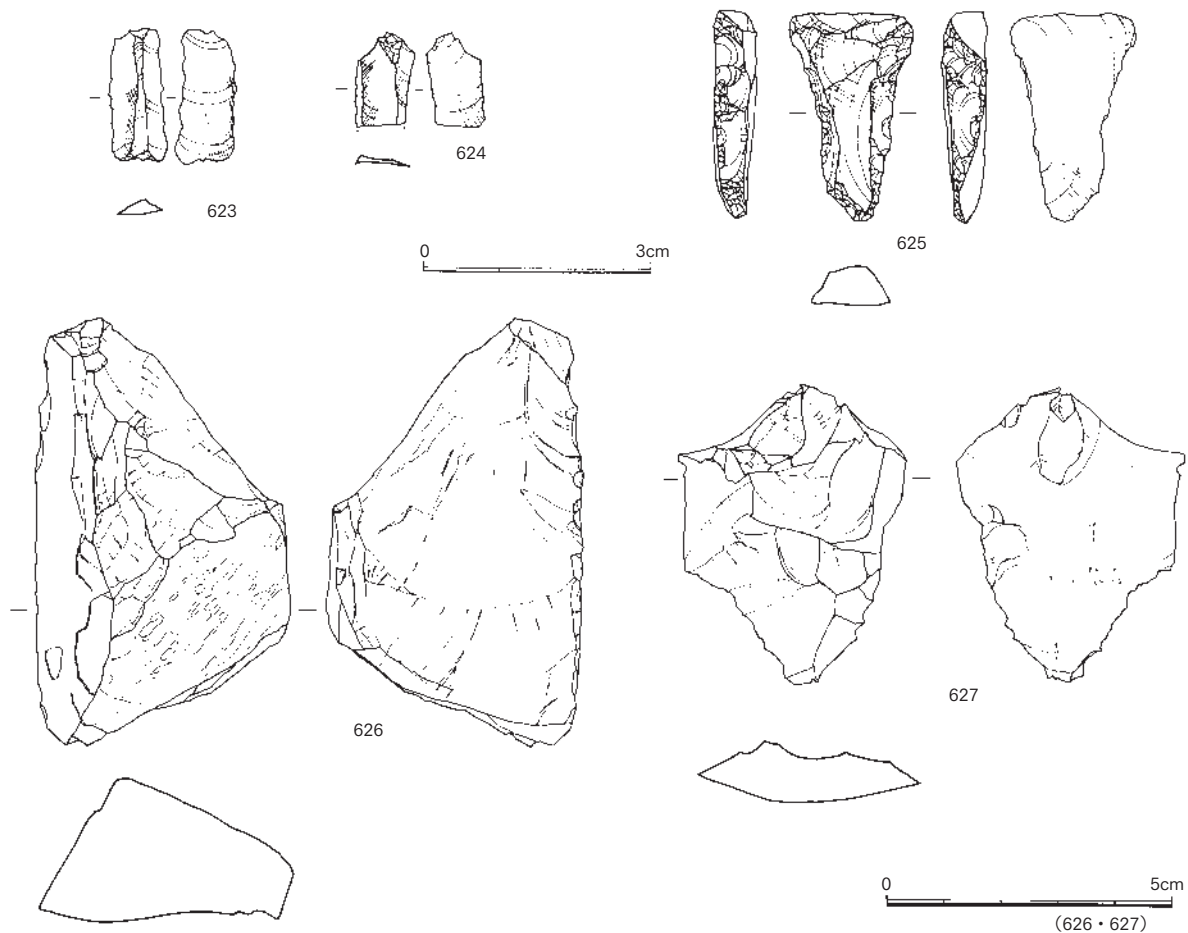


図60 剥片石器実測図2 (1/1、3/4)

				長cm	幅cm	厚cm	重g			長cm	幅cm	厚cm	重g				
595	D3	8層	石鏃	1.51	1.4	0.35	0.77	黒曜石	612	C9	003	スクレーパー	1.50	1.85	0.34	1.04	黒曜石
596	B2	003	石鏃	1.97	1.77	0.44	1.22	黒曜石	613		003	スクレーパー	1.85	2.75	0.6	3.11	黒曜石
597	B3	003	石鏃	1.4	1.63	0.2	0.72	黒曜石	614	B6	003	スクレーパー	3.9	3.33	0.88	7.94	安山岩
598		003	石鏃	3.02	2.02	0.58	2.74	黒曜石	615	C5		スクレーパー	3.88	1.9	0.55	5.27	黒曜石
599		003	石鏃	2.5	2.3	0.3	0.62	黒曜石	616	C2	003	スクレーパー	2.75	1.68	0.45	2.73	黒曜石
600	B4	9層下部	石鏃	1.4	1.63	0.2	0.62	黒曜石	617	B3	9層	スクレーパー	4.15	3.27	1.55	21.21	安山岩
601	C2	9層上部	石鏃	1.24	1.3	0.33	0.63	黒曜石	618	D3	11層	石鏃	2.50	1.30	0.25	0.63	黒曜石
602	C4	9層	石鏃	1.58	1.24	0.3	0.39	黒曜石	619	C5	10層下部	石鏃	1.70	1.53	0.33	0.85	黒曜石
603	D2	008	石鏃	1.60	1.04	0.25	0.32	姫島産?	620		10層	石鏃	2.30	2.50	0.58	2.87	黒曜石
604	D6	003	石鏃	2.15	1.5	3.01	1.01	安山岩	621	C4	10層上部	石錐	2.95	1.92	0.72	3.85	ハリ質安山岩
605		003	石鏃?	2.75	2.43	0.57	5.06	黒曜石	622	D4	10層上部	スクレーパー	4.28	3.02	0.79	11.63	安山岩
606		002	石錐	2.65	1.39	0.78	2.81	黒曜石	623	D6	11a	細石刃?	1.75	0.75	0.2	0.24	黒曜石
607	D8	003	石錐	2.65	0.88	0.64	1.23	黒曜石	624	C4	9層下部	細石刃	1.25	0.8	0.15	0.15	黒曜石
608	D3	003	石錐	2.22	1.05	0.32	0.88	黒曜石	625	C2	10層下部	台形石器	2.75	1.6	0.5	2.01	黒曜石
609	BC	003	石錐	2.50	2.20	0.64	3.31	黒曜石	626	C3	003①	搔器	7.47	4.38	2.55	76.32	チャート
610	B4	003	石錐	2.60	1.59	0.91	3.11	黒曜石	627	B3	9層上部	剥片	6.25	4.02	1.15	16.13	チャート
611		003	石錐	3.02	1.38	0.77	2.48	黒曜石	628	B3	9層下部	石核	5.75	4.93	3.84	130.41	チャート

剥片石器 (図59・60) 595から617は上層と9層出土、618から622は10層、11層出土である。掘削が細かいためか上層での出土が多い。595から604は石鏃で604が安山岩である以外は黒曜石。605は片面に調整剥離を施すが、厚手であり石鏃未成品またはスクレーパーか。606から611は黒曜石の錐、612から617はスクレーパーで614、617は安山岩である。618は11層出土の黒曜石の石鏃で側辺が鋸歯状をなす。619から622は10層出土。619、620は黒曜石、621はハリ質安山岩の錐。622は安山

岩のスクレーパー。

623から627は旧石器時代の可能性がある遺物。623は細石刃の可能性が高いが、中央の剥離が下方から剥出されており、槌状剥離の剥片か。624は細石刃。625は台形様石器で不定形の幅広の剥片を素材とし、素材打面・先端を除去する形で刃潰し加工を加え台形に仕上げている。626から628はチャート。626は片側側辺に使用による小剥離がみられる搔器。627は剥片。628は石核で立方体の1面を除いて剥離がみられる。巻末写真に示した。

剥片石器は各層で出土し黒曜石がおよそ790点でほとんどを占める。他には安山岩が13点、ハリ質安山岩が2点ある。定型的な石器はほぼ図示した。他に使用痕のある剥片が数点あるくらいで、小型の石核と多くの剥片・破片が大多数を占める。縄文時代の石鏃も見られるが多くは刻目突帯文期以降であろう。また風化が進んだ黒曜石も少数だが見られる。

IV おわりに

22次調査では上層で古墳時代の遺物の広がり、下層で弥生時代の遺物包含層と遺構を確認した。

上層ではまず8、17次調査で検出された古代の大溝の確認が期待されたが、北西端でわずかな落ちを検出したのみであった。この点については、これまでの想定ラインを確認することができた。

今回の調査で特徴的な成果はSX003の古墳時代中期を中心とした遺物の出土状態である。現地では土器の個体が識別でき、集中する箇所がみられることから、設置された状況、何らかの行為の痕跡が残ると考えた。このため記録と報告では出土状態の記述に努めた。台地際の低地で集落外での行為であり、高坏、小型丸底壺が多く出土し、何らかの祭祀行為等を想定することができる。周辺の調査では、10次から15、20次へと台地際に続く同時期の河川（図3）で、多くの土器、特に小型丸底壺や高坏、ミニチュア土器、舟形木製品が出土し祭祀的儀礼が想定されている。この河川は本調査区より東へ向かっており、平面的に出土したSX003とは出土状況は異なるが、遺物の内容は近似する。南側に隣接する17次1区の包含層に同時期の遺物が出土し、多くはないが続いている。8次調査では大溝の肩となる8層が7世紀末までの包含層とされ、野帳に5世紀代の土師器、須恵器の記載がある。SX003はさらに北に続くが8次地点では今回の状況ではなさそうである。

今回の状況から甕、高坏、ミニチュア土器などの重なり等から行為の一端を復元できないかと考えたが確かなことは言えない。特徴をあげるとすれば、甕または壺を正置または倒置する行為、20次でも指摘されているが高坏の坏と脚を分離している可能性、炭化物の広がりから火の使用、牛または馬の遺体の存在などがある。また、9群、10群等では甕、壺が密集した箇所があり、同時期と確実に言えないが、接して出土するものの中には一つの行為の結果もあろう。

また遺物の大部分は土師器であるが、II期を中心とした須恵器の出土も特徴的である。SX003の全域で臚、坏等の破片がみられたが、D3グリッドでは大型の壺212が4か所に別れてまとまって潰れた状態で出土した。この隣の219、南側の213、214も大型の器種が潰れた状態で密集せずに出土しており、SX003のCグリッドとやや異にする。さらに東のEグリッドではⅢa-b期の須恵器の坏が散乱するものまとまり、場と時代を違えた状況がある。丘陵に近い西側から埋没し、低い位置の東側が削平されずに残った等の状況などが想定されよう。

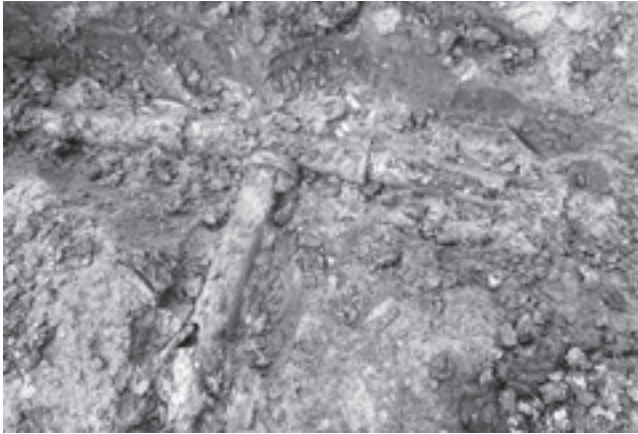
下層ではそれぞれ若干の混じりがあるものの8・9層で弥生中期から後期前半までと古墳前期、10層では前期の遺物が出土した。底の八女ルームでは突帯文期の遺構がありその広がりが注目される。縄文時代の石斧、石鏃などの石器、細石刃、台形石器の旧石器、チャート製の石器も注意される。



1 SD001 南から



2 SX002 西から



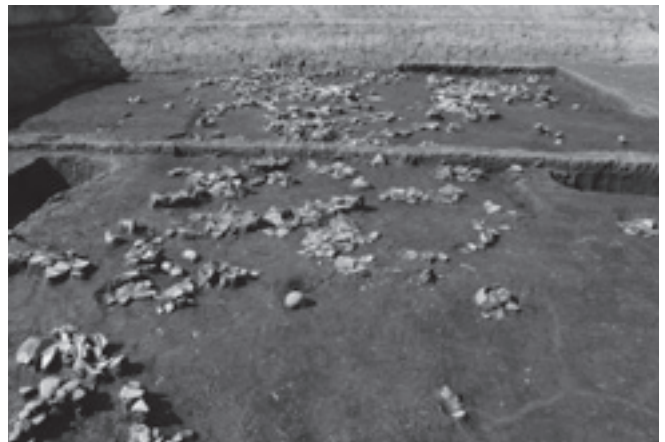
3 SX002 ジョイント部 西から



4 SX003C5掘削 北から



5 SX003C3 掘削 北西から



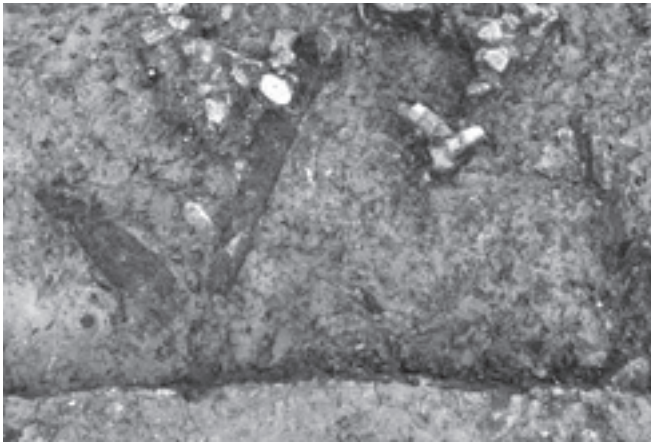
6 SX003 南から



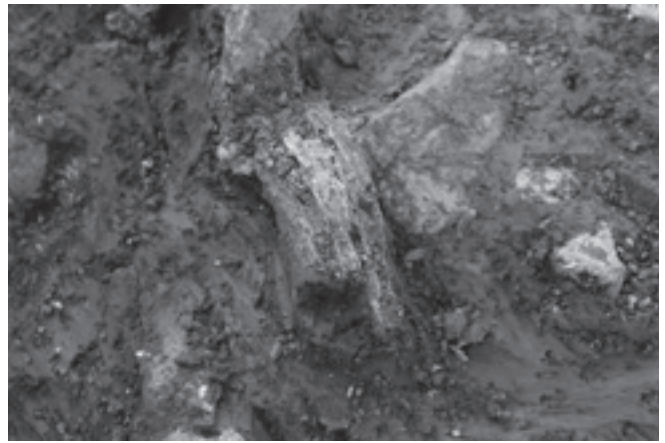
7 SX003 南西から



8 SX003東から



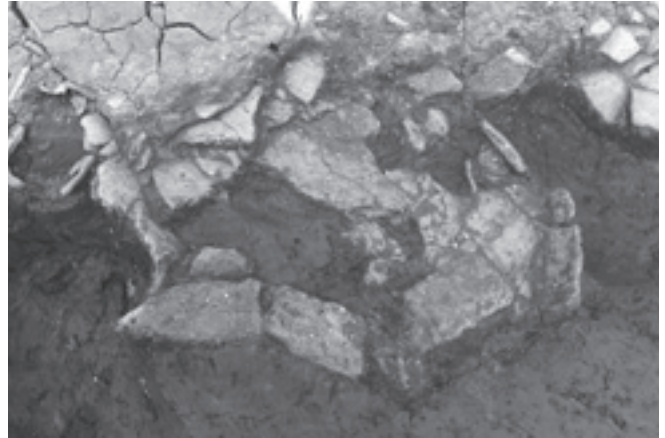
9 SX003 炭化材



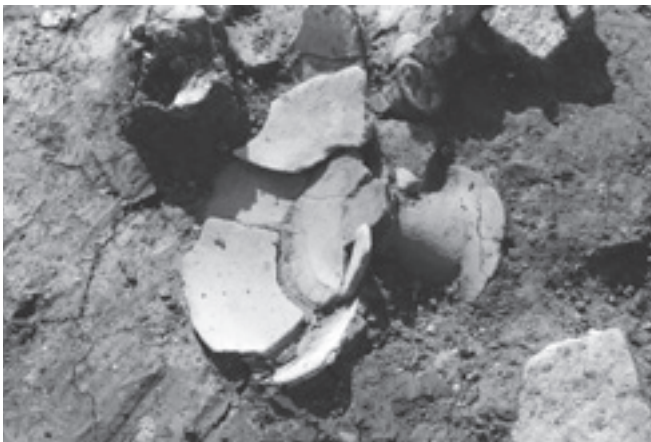
10 SX003 動物遺体出土状況



11 SX003 1・2群 左から14、11、19、18南



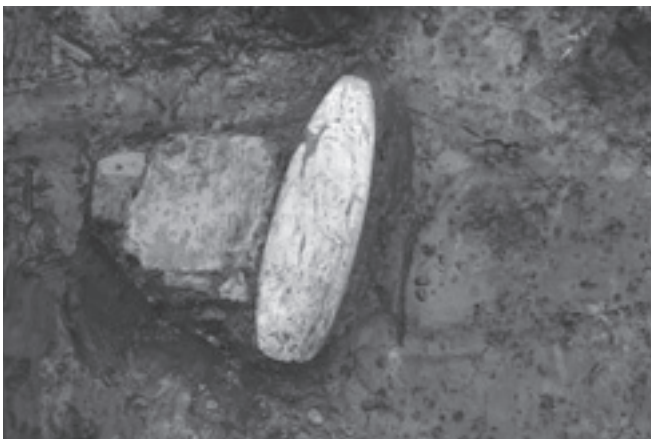
12 SX003 1群 11 南から



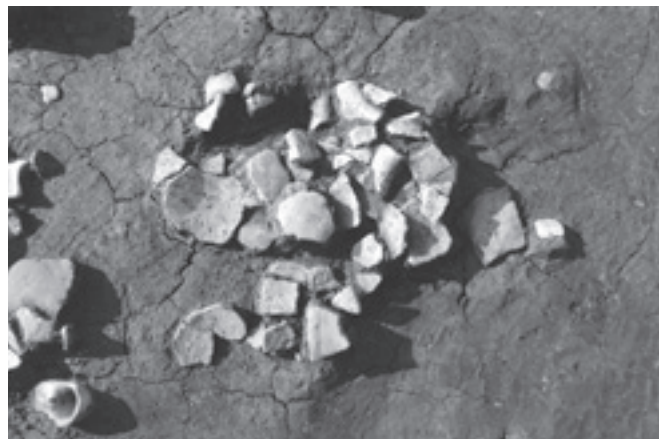
13 SX003 5群69東から



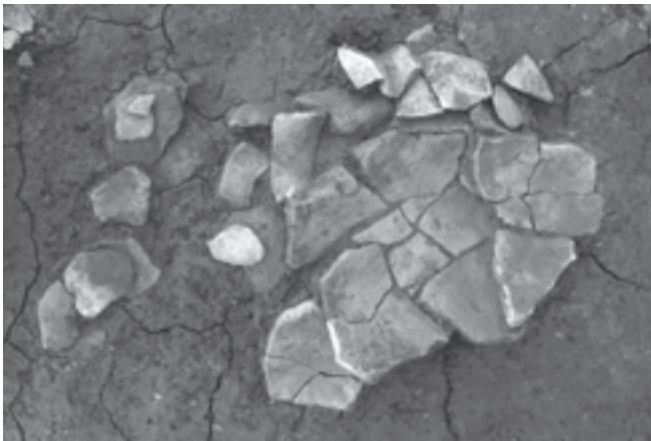
14 SX003 4群 下部 46 南東から



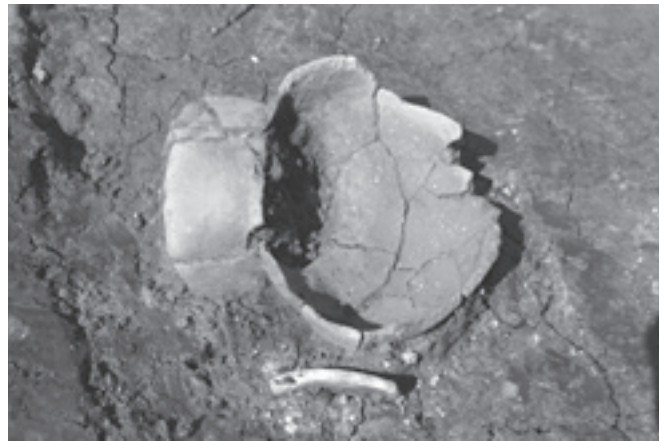
15 SX003 C6 石斧594 東から



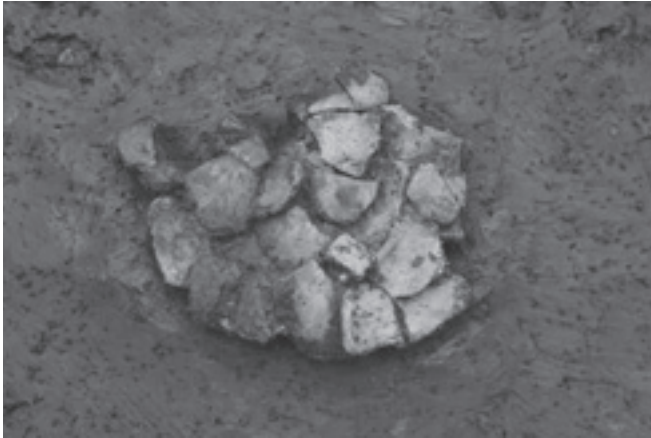
16 SX003 8群 113 南から



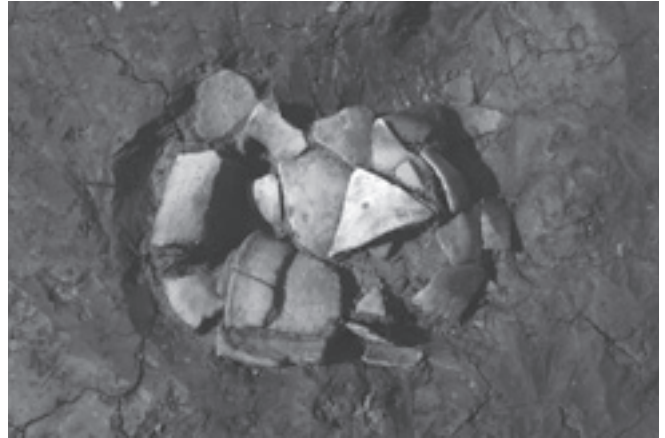
17 SX003 8群 114



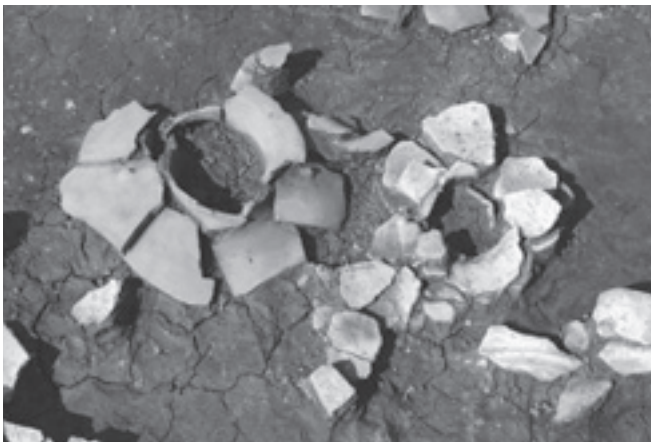
18 SX003 9群117 南西から



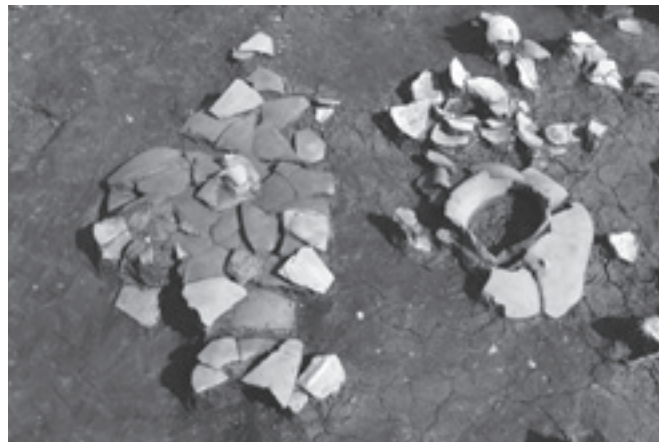
19 SX003 8群下106 南東から



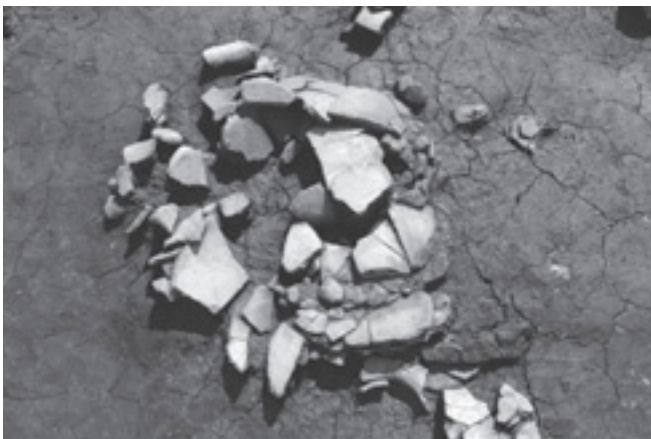
20 SX003 15群 177 東から



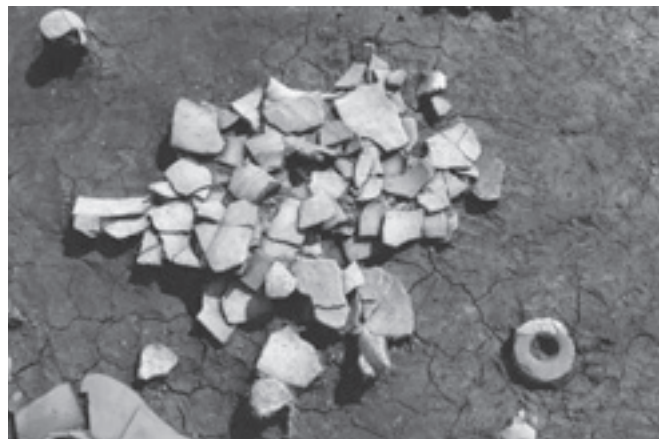
21 SX003 17群 212、219 南から



22 SX003 17群 212、219 西から



23 SX003 17群 213 南から



24 16群 214、227 北から



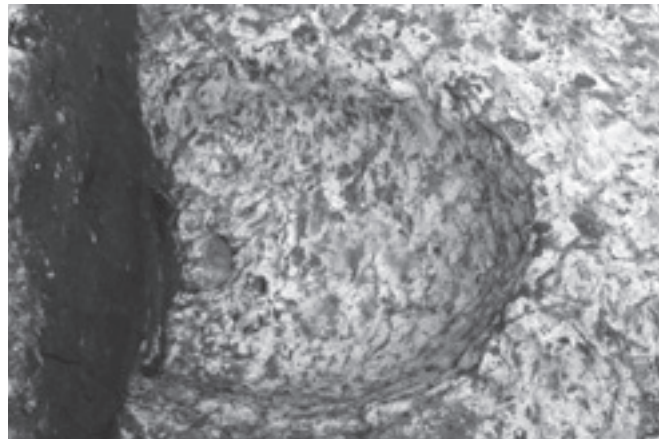
25 SX004 北西から



26 下層掘削作業 南西から



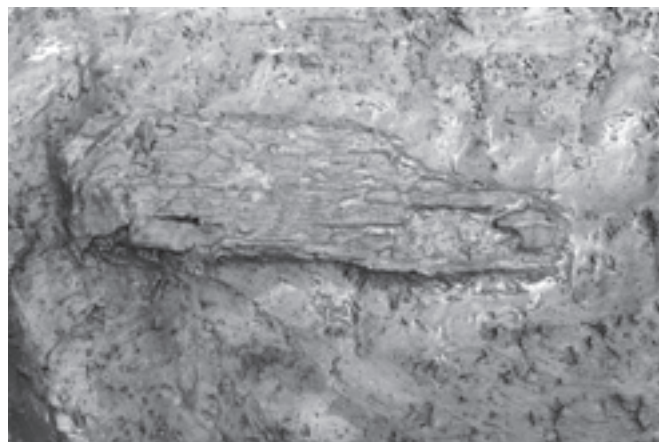
27 下層掘削作業 北西から



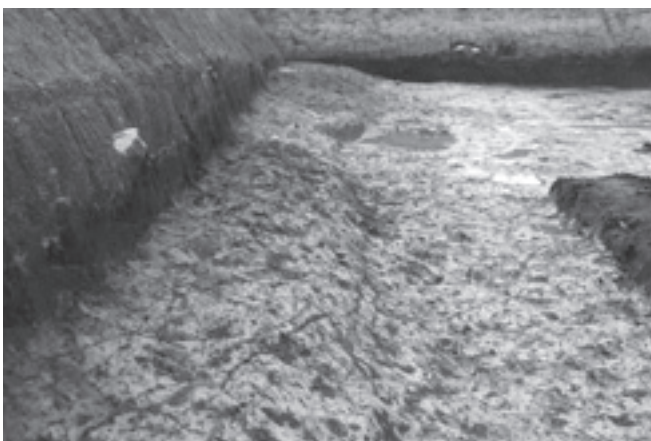
28 SK005 西から



29 SX008 東から



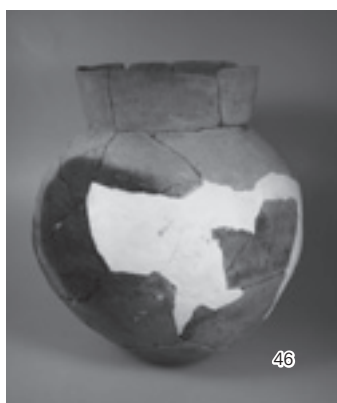
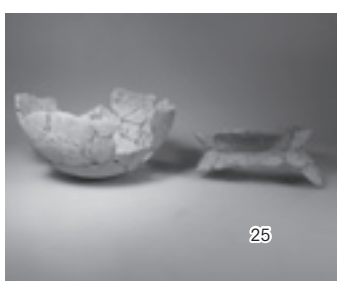
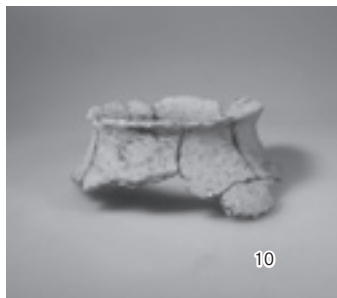
30 木製鋤346出土状況

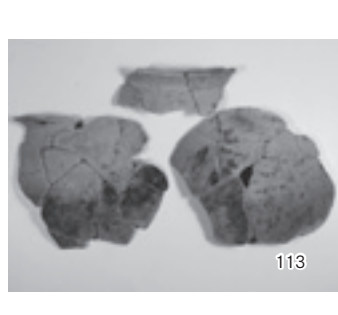
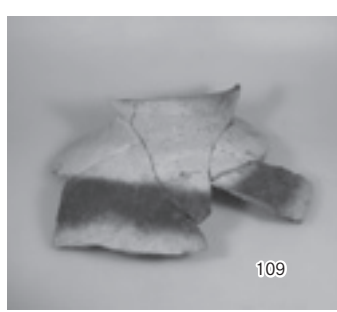
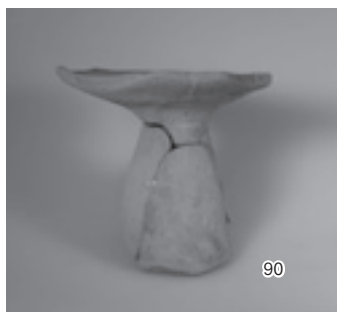
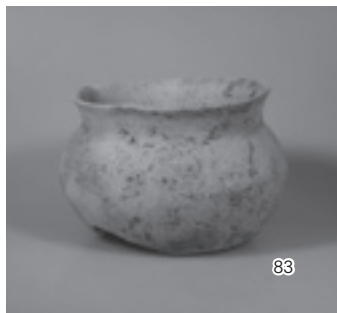


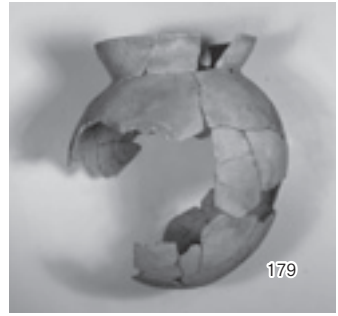
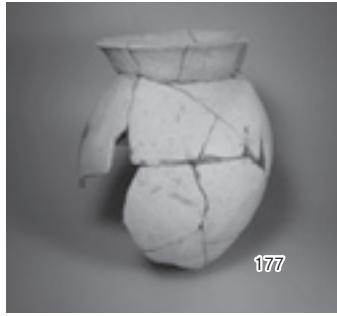
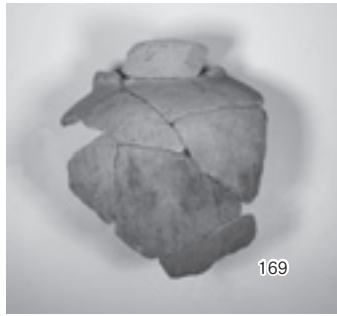
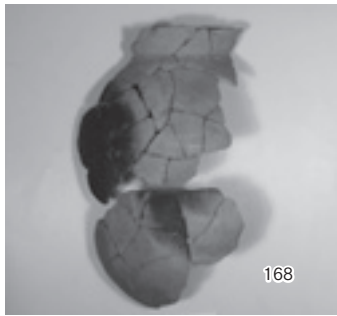
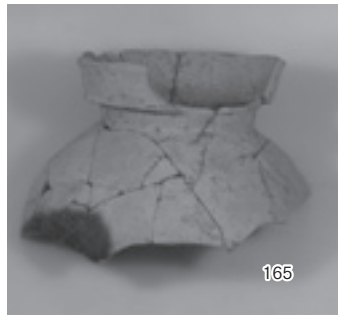
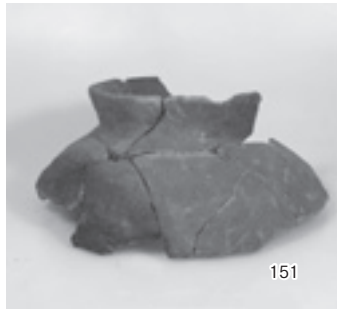
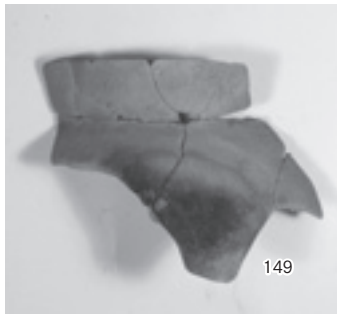
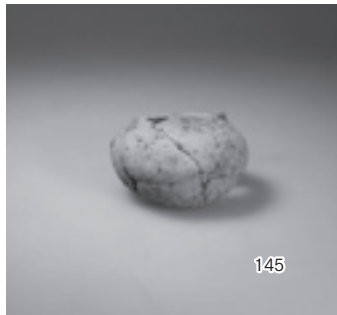
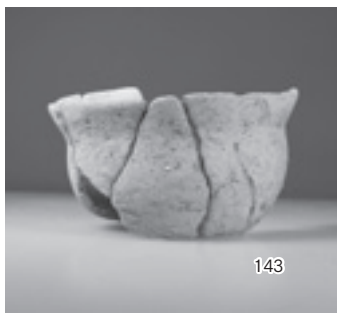
31 西壁テラス状 南から



32 八女粘土上面 北から





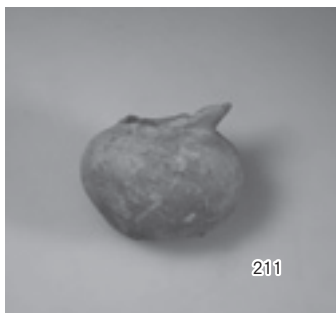




208



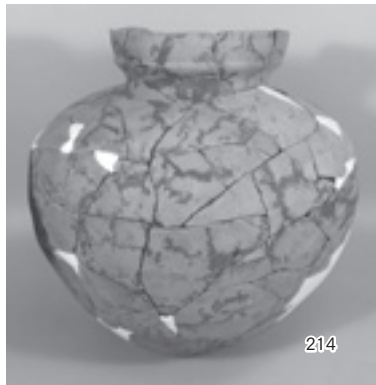
210



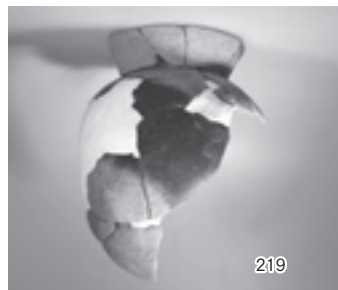
211



213



214



219



229



231



234



236



237



238



241



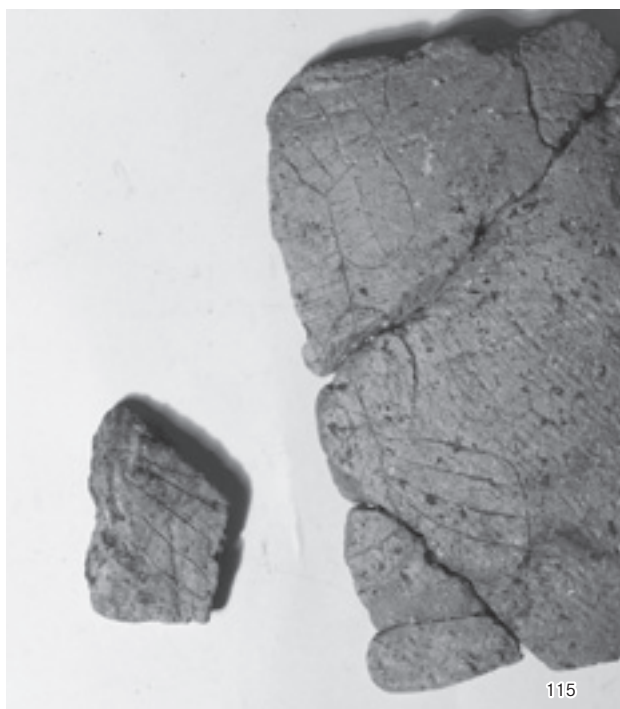
246



252



260



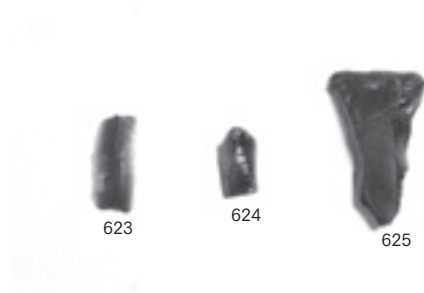
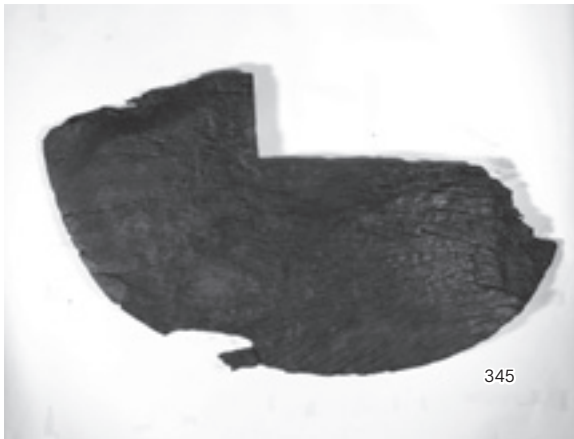
115



212



349



624

625



報告書抄録

ふりがな	たかばたけいせき							
書名	高畑遺跡							
副書名	第22次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1504集							
編著者名	池田祐司							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
たかばたけいせき 高畑遺跡	ふくおかしはかたくい たづけ 福岡市博多区板付 6丁目10-5	40137	0095	33° 33' 34"	130° 27' 27"	20210105～ 20210324	240㎡	共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
高畑遺跡第22次	散布地	弥生時代前期・ 古墳時代後期	包含層、土坑	弥生土器、土師器、須 恵器、台形石器、石斧、 石包丁、木製鋤	
要約	<p>調査地点は高畑遺跡が広がる丘陵の南東裾部に位置する。調査区北西側に八女ロームの斜面がみられ、東側に広がる堆積中で古墳時代中期、弥生前期から後期の遺物が出土した。</p> <p>70cmほどの水田土壌を除去した面で土器細片が広がり、密度が高い東側7mほどでは、細片の下に土師器を中心とした土器が据えたような状態で出土した。各器種があるが高坏、小壺が目立つ。5世紀を中心とした土器群と考えられるが、やや分布を異にして6世紀の須恵器が出土している。</p> <p>さらに下には弥生時代の遺物包含層が50cmほど堆積し、前期から後期の遺物が出土する。破片のみでまとまったものではない。丘陵斜面と八女ロームに接する包含層最下部ではほぼ前期の遺物のみが出土する。ただし、一区画で後期の土器が包含層最下部まで出土する範囲があり、建築材、鋤などの木製品が出土した。</p> <p>このほかに、縄文時代の磨製石斧、石鏃、旧石器時代の台形石器、細石刃が上記包含層中より出土した。</p>				

高畑遺跡

－第22次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1504集

2024（令和6）年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社ミドリ印刷

〒812-0016 福岡市博多区博多駅南6丁目17番12号

